

はじめに

梅田地区の信仰について、気付いた点ひとつふたつに触れてみたい。

一、中世、近世に修験道が盛んであったことが、根本山信仰、北山家（郡主山、新藏院）の先祖がホチ酒で修行して修験となったという伝説、行屋と権現山との関連などからはつきり窺える。そして根本山が分水嶺で、ここから流れ出た水が桐生川にそそいでいるところからみて、単なる山岳崇拜だけでなく、それ以前の信仰形態—古く山の神であり、また、田の神、水（分）神であった—も想像できる。詳しくは、柳田国男集第四卷「山の人生」など、や和歌森太郎氏の「修験道史研究」などを讀みかた。

二、講、特に庚申講が盛んであった。各組々の庚申の掛け軸や箱膳を持ちより、村全体で行なう—村庚申—の例（石巻）すら報告されている。もう信仰というより、生活の知恵の交換、会議、娯楽の場となっていたのだ。

三、山岳丘陵地帯という面から山の神祭祀は盛んであったし、織物の桐生に隣接している土地柄から、機神様が他の土地より強く意識されていたのだ。

四、式内社の賀茂神社（現在、桐生市広沢町鎮座）と美和神社（現在、桐生市宮本町鎮座）について、日本後紀卷五、桓武天皇延暦十五年八月甲戌の条に「上野国山田郡賀茂神美和神那波郡火雷竝為宮社」

とあり、さらに三代実録、卷第三十七の陽成天皇元慶四年五月二十五日戊寅の条に「位階勲等」昇進の記事がある。

賀茂神、三輪神の関連性は記・紀・山城風土記逸文などの記事からも察せられるが、雷カミ蛇神の観点に立てば、その緊密性はよりはつきりするであろう。詳しくは柳田国男集第五卷（「一つ目小僧その他」など）や倉野憲司氏の「賀茂系神話と三輪系神話との関連」（『古典と上代精神』所収）などを参照されたい。

この雷神祭司の集団が古く、上野に住んでいたことは、現在、境町、板倉町にあるあの雷電様の所在とその信仰状態（『境町の民俗』—群馬県民俗調査報告書第五集—「板倉町の民俗」—同前第三集—参照）と決して無縁ではあるまい。

雷電様の信仰が東上州に色濃いのも決して梅田の鳴神山の雷神カミカミ岳神社もこのような背景の上に考えねばならないであろう。祭神が日本武尊ヤマトヒメになっているのなどは何の問題も無いのである。

この賀茂神・三輪神の問題は高崎正秀先生のいわれる「出雲文化の東漸」（『文化以前』所収）などとも決して無縁ではなく、これから解明しなければならぬ点も多いのである。近く稿を改め詳説したい。

以上簡単に述べて来たが、一、二、三などの特徴は梅田地区だけでなくすでに調査した梅田から尾根一つ越えた勢多郡東村の民俗や松井田の民俗とも通ずる面があるのである。ぜひ、ともどもお読み頂きたいと思ふ。

筆者は編集に際しては、採集者の個性と話者の話しぶりを尊重して、

字句を改めることをしなかった。そのため表記法などにいくぶん不統一の点があるのをお断りしておく。(佐藤 清)

一 神社信仰

—石祠・氏神などを含む—

八幡宮

通称忠綱明神様 旧無格社

主祭神 田原又太郎忠綱公

田原又太郎足利(藤原)忠綱自刃の地なり。神木として杉(二丈まわり)四〇〇年のものありしが、昭和二七年許可をうけて伐採す。

特殊神事 従来は球数引きという夏の被行事が行なわれていたという。

由緒沿革

(忠綱公は)建久五年今の飛駒村字皆沢にて自害すと伝う。

一、古平の伝説 忠綱公戦敗して明神山の太木の下に隠れしを、敵の白犬に見出されて敵将某のために山島の征矢を以って射られ自害す。その死骸を土民この地に埋葬す。後義兼朝臣の命によりその霊を祀りて入産間郷の鎮守と崇むと。付記 今も皆沢にては白犬を飼わず山島の羽毛を玩具にすることを禁絶とす。怪我をするといつて忌みきらう風習がある。(栃木県神社誌)より抄録

忠綱明神

栃木県足利市(旧三輪村)松田から逃げて皆沢に来たものといわれ、旧菱村の塩釜神社に忠綱公の首を祀るといふ。松には血の池などの名所がある。(猿石)

忠綱公が討手に殺されたので、胴を皆沢に祀り、首は塩で清めて上菱まで持って行き、塩ノ瀬の八幡宮に祀った。今の塩の瀬神社である。

(皆沢)

忠綱明神の神体 正一位八幡宮に祀られる忠綱明神の神体は木像で、



八幡宮の神体
忠綱明神—天文12年作という(皆沢)
(撮影 関口正巳)

裏に天文十二年と墨書してあるという。安置した箱の裏には「寛政三年亥八月卅日大工大列金藏」と墨書してある。大列は大州か。(皆沢)

白い犬 忠綱明神が追われてきた時に、かくれていたところを追手

の白い犬が見付けてはえたために、ついに殺された。そこで皆沢では明神様への忠義のために白い犬は飼わない。一ノ瀬本家で前に飼っていたら、山でこの春に刈場していた時にいなくなってしまった。(皆沢)

もとは四月と十月の十五日におまつりをしたが、今はつとめの関係

上、四月の第三日曜日におまつりしている。(皆沢)

天神さまの御神体

石鴨の天満宮のわきの小祠は御神体の木像がある。菅原道真の木像で、むかし藤生紀伊守が戦争に背負って歩いたものという伝承で、ひもを通したあのようなものがある。(石鴨)

大杉様の祭り

七月二十三日に、たいこみこしをかたいで、村内を巡る。お獅子もまわった。(馬立)

赤城様

寄日の尾根にあったのが、ある洪水の時、松の根にショイマクラレて



八幡宮の宣旨 享保4年（皆沢）
（撮影 関口正巳）



鎮守八幡宮のもり（皆沢）
（撮影 関口正巳）



八幡宮の祝詞 享保4年（皆沢）
（撮影 関口正巳）



大杉神社神楽殿（後沢）

わからなくなったのを、探して下にもって来たが、それも危険になったので、のち寄日沢の山の神に合祀してしまった。
当時祭日は八十八夜で、各戸から錢二錢ずつの祭り、茶、菓子、酒など買って組内だけで祭った。（萩平）

天王様

八坂神社の祭りは七月二十五日には赤飯をたいて祭る。しかし天王様をまわすようなことはしない。（萩平）

もとは七月十五、六日の農休みに祭ったが、その後二十三日になり、今は八月五、六日の桐生祭りに祭る。飯宮を会館の前で作って飾りつけた。四年前までは御輿を担いだ。（猿石）

二渡神社

もとは猿田彦神社といった。猿石にあり、四丁目全体の氏神である。祭日はもとは四月の十日、現在は四月の第一日曜日。秋まつりは上の原にある八坂神社のおまつりが八月五日であるので、これを秋まつりの代りにすることになっている。（二渡）

天王さまのおみこしが、四年ほど前まで出た。かついだのは青年と子ども（学校へ行っているもの）、夏のおまつりのときに出した。このコースはきまっていた。

天王さま・猿石・忍山・二渡・長泉寺境

二渡神社の氏子の範囲をまわった。一年ごとにまわる順序がかかる。上からまわった場合には、翌年は下からまわるというように。おみこしは現在二渡会館に保管してある。

世話役は青年の親方連（三十才ぐらい）。中学生が出るので学校の先生が二人ついた。

費用は各戸からの寄付（二百円）によった。このほか酒などの寄付があった。

おみこしは各家へはまわらず、道路を通っただけ。まわって行くと近所の人が出ておさんせんをあげた。



山王様(八坂神社)(猿石)
(撮影 関口正巳)



稲荷神社(中央)(橋詰)
(撮影 関口正巳)

に入れてかっいで来た。手んばになってしまった。(橋詰)
大神宮さま

大久保山の出口にあり、もとは森下一家でまつっていた。現在は鳥谷組で、春おまつりしている。(猿石)

山王さま

忍山の蕪丁にある。下の病に霊験があるという。ご神体はサル。おまつりの日は特にない。お願をかけるときには、男根(木をつくった)をあげるからなおしてくださいという。(橋詰)

雷神岳神社

鳴神山にあり、普通タケ神社といっている。祭神は日本武尊、豊受姫、タタハタチ姫。

氏は鍋足、高沢の人達。

元日に登拝するほか、祭日は、五月の第一日曜である。昔は四月八日であった。神楽もやった。

鳴神山には女道メミチというのがあり、それは奥の院に通じていないから、昔は女人禁制であったかも知れない。

もとの神主さんはシンゾウ院といって修験の人であった。

下の賀茂神社から、式年祭に参列してくれなどと通知がある。

宝曆四年とほられた手水鉢がある。

最近の神社は板がはがされてもされたりして、荒れ果てている。(鍋足)

足)

塩釜神社

川向うの麥にある塩釜神社は小島一家の神社であるという。

小島一家の先祖は奥州からの落人であった。兄弟三人で落ちてきた。

三人は、菱村、浅部村(現在の二丁目)、上久方村(現在の一丁目)に

前は世話役の家で、最近は社務所とか二渡会館でおそなえをつくって、それを組長から各戸にくばった。お札は神主がつくったのをくばった。

おみこしは厄病よけとして出したものである。(中居・猿石)

ザンマ(残馬)様(二渡神社に合祀)

忍山(オッシャマ)の奥にある山の名で、天王様(八坂神社)におろして合祀した。二渡神社に合祀したわけである。

炭焼きの人は初午には必ず仕事を休めという。明治の初め頃、炭焼きに山へ行った竹さんは仲間が下ったのに、ひとりで明日は炭の入れ替えだからと泊った。炭がまの前で火をおこして寝ていたら、ザンマ様に枕返しをさせられて、火の方に頭が行って大やけどをした。そして自分の手をかじりながら大門まで出て来たが、痛いのがわからなかった。ザンマ様が離れたら「痛い、痛い。」と狂っていたので、組元の人が草刈り籠



山王の童（居館 日枝神社）
拝殿の神に美事な童の彫物がある。童は日吉の神使
（撮影 今井善一郎）



金沢の大黒天（金沢）
（撮影 阿部 孝）



ウジ神（屋敷稲荷）（皆沢）
（撮影 関口正巳）

それぞれ定住した。
とこでセオイに入れて背負ってまた御神体を菱村に祭った。今でも小島。家でなければ赤飯は炊かせない。そのお宮の門や屋根に家紋をつけるについて、村人と争いがあった。大さわぎをした。問題は郡代のところまで行った。結果は一般の人から迫害を受ける破目になった。それについて文書が残っている。小島一家の署名と血判がある。我々は一致



日枝神社（居館）
（撮影 阿部 孝）



参拝札（居館 日枝神社）
（撮影 阿部孝）

幡様が氏神であった。
谷 氏 森沢の八幡様、谷刑部の守本尊といわれている。

団結してやって行こうという規約書である。
附近の人は神社をシオノミヤといっており、お産の神である。
（浅部）
氏 神
山王様（日枝神社）を氏神という。村社である。もとの一区、今の一丁目が二つに分かれたその一つの氏神。（六門）
一家氏神

峯岸一家（上久方）これは昔八

二 根本山神社

(通称根本山大正院 旧無格社)

主祭神 大山祇命

配神 薬師大神

例祭 一月一日(元旦祈願祭、七草講中代参りたり。)

一〇月五日(土地の奉議会により村祭りを行なう。)

四月一日(四月二日、二日、三日と祈願、養蚕講二四日代参りたり。)

神木または神跡 根本山を神体とす。

崇敬者 二二〇人

特殊神事並びに神賑行事

右の祭神外に土地のもの、十日夜の山神祭を行ない登山参拜する。講中は現在、大正院藤倉家は休講。昔事はつくみの焼鳥を賞美する登山者、さらに昔日には十二山は原っぱであるのでバクチが行なわれたという。

由来沿革

一、下野国誌に曰く。根本山神安蘇郡彦間村の山奥にあり。大山祇神なるべし。近年参詣するもの多しと。

一 社伝 当社は天正元年四月一日の創立で世襲の神地霊場である。旧記を按ずるに往昔役の行者富士山に登り東北を臨みしに瑞雲天にタナビく小山あり。その山を指して至れば雲方に古木蒼蔚として青苔滑に荆棘途を埋めて怪岩地に崎つて奇峯あり。故にこれを根本山と名付けた。後弘法大師飛錫の時登山してこれを神靈擁護の地なり、後世遠近の羣衆参霊場となるべしといえり。

果せる哉。幾星霜を経て中興の法師良西法印桐生川の流れに随ひ登山して相承の秘法を修し、嫡々相伝すること三百年。(栃木県神社誌より)

抄録)

石鴨の天神さんから一里で、奥の院は石宮で、神社にあった釣鐘は、戦争中に供出してなくなつてしまひ、里宮にはこもり堂などの宿泊所もあつたが、江戸時代末には広く信仰されていた。「根本山ひとり案内」という本には、江戸からの道筋や、里程、宿泊などがこまかく記されているという。

井伊掃部守の領地になり、特に深く信仰していろいろ援助してくれ、出開張で江戸に出かけたとき、江戸に着く手前で井伊掃部守が桜田門外で殺され、そのために開張もとり止めになり経費だおれになつてしまひ、その後信仰もおとろえた。

根本山は、この地の水源なので、下流の水車の製米業者や、製粉業者が信者に多く、水に対する感謝からとみられるように多額の寄進をしているという。(清水)

山まわりでまわる山には、よくここまで上げたと思われるような山の頂上にも石宮があるのでおどろくが、根本山の頂上からは、男体山や古峰ヶ原の方がよく見える。ここが分水嶺になつていて、ここから流れ出した水が桐生川になる。(清水)

根本山大正院の信徒

穴切

皆沢

落合・今倉

後沢(閉籠里、御所平、原)

馬立(前原ガイトを含む)

蛇留淵(筑原、葛平を含む)

東原(清水、東上)

覚

年中諸祭礼

一二戸

二七戸

一四戸

一五戸

一五戸

八戸

八戸

(今倉)

御日待定日扣

一月

元日

二日

七日

八日

十日

十二日

十四日

十五日

十六日

廿日

廿四日

二月

一日

初午

十二日

廿五日

三月

朔日

四日

四日

十四日

十五日

十八日

十九日

廿日

廿日

廿八日 不動尊 筑原

四月

朔日

初巳

七日泊り

八日

同日

十日

十三日

十五日

廿四日

十五日

十五日

十五日

廿四日

萩平、馬立

馬立、平、下手

忍山

忍山大川一家中

馬立前原一家中

院内

馬立前原一家中

寄日

馬立前原一家中

馬立

馬立

馬立

萩平、馬立

馬立

風の折禰□□□□、右当日天祭当番宿ニ御札持参ニ而法業ニ参ル事

一同旭弥文治殿江御札十八枚持参

一萩平半治郎殿江御札十八枚持参

一同 葛平

馬立、萩平

(原文七月欠)

萩平、馬立

馬立、閉籠入

九月

鎮守祭、皆沢江行

馬立

清水

同 馬立一家中

十一日泊り 忍山

十二日朝 同

十三日 下手

十五日 馬立

廿四日 愛宕祭 馬立

廿七日 馬立

十一月

高戸山神之祭先方案内有之候事

十二月

朔日 金七五三泊り 馬立

二日夜泊 筑原

三日夜泊 葛平

四日昼 寄日

七日昼 猿石

七日昼泊り 忍山

八日朝 同

十三日夜 十四日朝 下手

外ニ金七五三之儀者別帳ニ有之候

毎年二月天祭、六月土用以前ニ風祭御札扣

卅枚 馬立 十七枚 筑原

五枚 葛平 拾八枚 萩平

三枚 高竹 拾八枚 山地二

三拾八枚石鴨 拾三枚 中組

外御札儀及札數百四十枚

右之通矢念無之(以下破損)

(注)

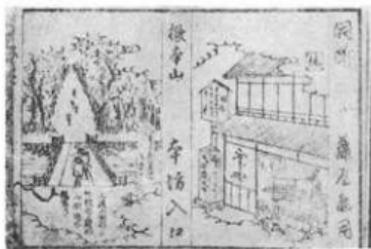
以上は根本山大正院に保存されている巻物によって抄写する。年代不明であるが、この地域の邑邑のさまざまな祭りに、この大正院が関与していたことがわかるし、こうした祭りが、修験の影響下にあったことがわかるであろう。(都丸九十九)

根本山略縁記

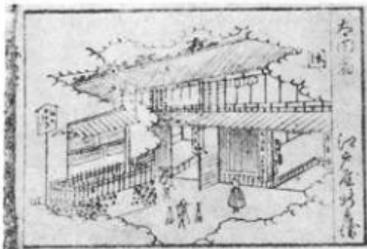
爰に下野国安蘇郡入彦間村根本山神の靈廟は往古弘法大師東國下り給ふ時吾先祖拜請して加持を乞ひ教を受夫より根本山にかかれ暫く石上に休らひたまひ吾祖に告て曰当山は神靈禪護の地也後世に至り山開門遠近の聖登山の靈場となるべしとて別れをなし男体山へ赴給ふ吾祖教を受信仰し時々登山して幣を納めしと。しかれども年磨の久しき其旧記を失ふ先師中興了西師役君の靈夢に依て桐生川の流にしたがひ根本山に至れば昔滑かに古木森々として奇岩靈峰清流異草突に神靈の地也則石苔に端坐し持念する時山中霹靂鳴動し空中より告て曰く汝靈夢に依て来るならん汝が為に秘法を授く身心清淨にして間断なく信仰し衆生を救助すべし我此地に跡をたること年久し汝が至誠に感じて如斯くうとおもひ忽夢の覚るがごとく天晴夜も明ぬれば神徳を仰き拜謝し幣を納め下りぬ是則吾児孫に至る迄的々相承の秘法なり其後信心の輩伝へ聞路を尋参詣せんとするに山鳴雲覆ひ登山すること能ざる事凡二百有餘年に及びり予護も神變大菩薩の流を汲且先師の遺教を継ぎ靈境を開遠近の諸人登山して心願満足せん事を欲し即千日の大願を發起し日々艱難辛苦して晨旦ごとに河水に浴し不動定に入丹誠修法怠慢なし然る故に哉願満の当日より信心の輩登山参詣無難にかへりぬ今において汚穢不淨のもの登山すれば山荒不思議數多あり身心清淨にして参詣すれば病難劬難水難諸難を消除し諸芸愛敬福祿倍盛壽命長延工商利潤心願成就せしむることなる判利の二儀いもしるし別て火難を消除し盜難を避け如意満足ならしむる事眼前世の人の知る所也誠に神徳の靈顯鏡の影をうつすがごとし委くは本記にゆづりて其大概を記す而已

「根本山参詣路一人案内」より抜萃

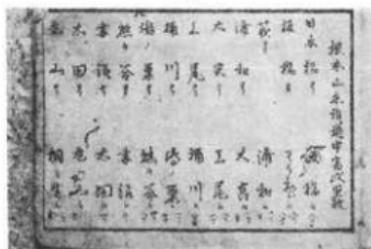
①



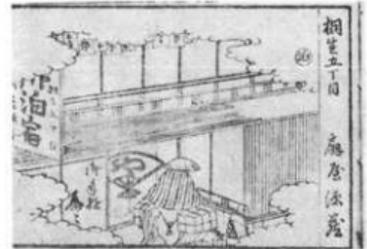
⑦



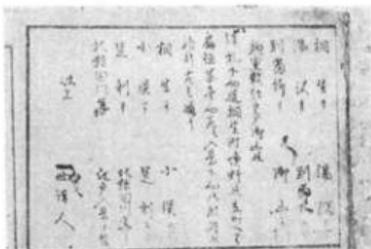
⑫



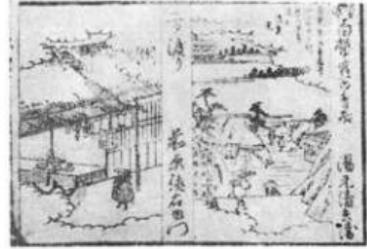
⑧



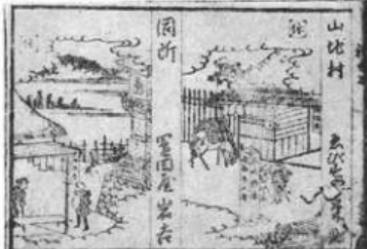
⑬



⑨



⑩





根本山への里程標 居館の民家の庭にある。
この27丁は桐生からの距離(撮影 今井善一郎)



道しるべ(石鴉)(撮影 上野 勇)



根本山の燈籠 梅田一丁目
大門にある(撮影 清水義男)



根本山神社里宮(今倉)



根本山神社里宮の手洗い

根本山神社里宮と手洗い
(今倉)

銘

武州中山道
上尾宿
關主
式守伊之助
天保二卯年
四月吉日

三 山の神と機神様

— 産業 神 —

山の神

山の神はジュウニサマという。十二日はジュウニサマの日なので、山をやる人がお祝いをした。

奥のジュウニサマは二階づくりのいいかげんでかい社殿があったが、戦争中のこと、バカが火をつけて焼いてしまった。(津久原)

三月十六日、十一月十六日の年二回、昔は十二月、一月の十六日も行ない年四回だった。山仕事する家の女が、昼間から集まってご馳走を作った。宿は順番、夕方になると子供も集る。大人は夜酒を飲む。その他は男女平等に飲食する。(芦田谷)

昭和四十年から始まった。その前赤城様(別項)と天王様(別項)のお祭りをしていたが、それがなくなったので、赤城様もこの山の神に合祀して、毎年四月の第一日曜にお祭りをすることにした。(萩平)

山の神の石宮が一つの沢に一つぐらいはある。初午に炭焼きの人が休んで祭る。山の神は火早いので、山火事にならないように祭る。仲間が寄ってパンダイ餅をつく。泊り山でふつうのウルチ米をふかして、手ヨキ(斧)の背で伐り株の上などでついた。今は家で臼を使って餅をつく。今でも農家の風呂たぎなどのマキを作る山仕事をやる人がいる。

(猿石)

神菜(かぐら場)境の山頂に八畳ほどの平地があり、山の神が神菜(かぐら)をした所と伝えられる。桐生・足利の騒音が反射するため、山の神が喜ぶといわれる。山宮があり祭りに商なない店も出た。

(猿石)

山仕事が無事に終りそうになり、ひとくぎりつくくと、沢に入っている

木びき、炭焼き、地車引き、馬方など、グループの者が適当な時に全部集まって山の神を祭った。元じめから酒が出て、米を各自が持ち出す。ウルチ米を水を少なくしてたき、ふいたら火を止めて、しよい梅の底を泥に埋めて米を入れ、棒で突く。つけたらへらで握って串にさし、砂糖ミソを付けて火で焼く。これをパンダイ餅といい、匂いがよくてうまい。最近までやっていた。(橋詰)

日はきまっていない。パンダイ餅(ウルチの餅で、ウスでついではいけな)を供える。パンダイ餅はクシにさし、ミソをつけてやく。パンダイ餅は山小屋でやったし、山仕事をしている人の家でもやった。

(鍋足)

梅田地方は山働きがかつては主生産であったから、山の神はよく祭られた。この地方(湯沢の奥)にも二つ石宮があり、中に幣束が納められていた。お祭りは定期で、三月と十月にあり、いつも丁半があつて、大変賑やかであった。近くに大福餅や煎餅などの店が出た。ゴザを四枚位並べて向き合って坐り丁半をしていた。丁半はサイコロを三つ使っていた。白黒の争というのもあった。

一般には赤飯をたいて子供にやり、大人は酒を呑んだ。(湯沢)

山の神は女だという。山の神の好きなものはパンダイ餅である。これはウルチ(白米)をふかして一つが一合位の玉をつくり、それを一度つき(ヨキの背中などでつき)それを又ふかしてつき返す。家でやる時は臼の中でやる。よく木の切株の上で丸くした厚さ七分位のを木の串にさし、炭一俵位をくべてやく。火がおこしたまわりにさしてやく。砂糖と味噌をまぜたのをつけてやく。人が五合から一升位たべられる。よくつくから粒はなくなる。オカズは漬物位をもつてゆく。(湯沢)

岡平の奥に祀つてある。山神様の祭りは組合が六つあつて順番にお祭りする。これは山仕事する人の神様で、御神酒などよく上る。底抜ビンヤクがよく上つている。(大門)



馬立後沢の山の神
(撮影 都九十九一)



山の神に供えられたオタル
(撮影 都九十九一)

一反(三丈物)を一日半で織れば並の腕である。お燈明を一本芯にして、暗い処で織った。賃バタの方が多かった。中以下の家では十六位になると大体一人前の機織りになった。(金沢 青木タケ氏七六才談)(湯沢)

四 家・屋敷の神

家の中には、奥座敷に神棚があり、そこには大神宮さまがまつてある。茶の間の棚には、えびす・大黒さまが南のすみに北向きに、西のすみに東向きに歳神さまがまつてある。お勝手にはおかさま、台所には米を積んだ上に俵がみさまがかまどには荒神さまがまつてある。

機神様
一戸一人と限らず機織をする人、娘、妻に限らず参加する。一〇〜一五人で、年一〜二回都合のよい日に集まって話合う。参加者は米を各戸一升出し合い、すしを作ったり餅をついてたべる。神棚に幣束を立てて祀る。宿は入飛駒のオフクさんの生家でやる。群馬県側からも一詣りになってやる。(芦田谷)

二渡神社の祭といっしょに四月第二日曜に機神様を祭り、神官が拜み村中(四丁目)集まって直会(なおりい)をした。また七夕(たなばた)には機屋が集まって神官ら呼んで商売繁盛を祝った。もとは朝飯前に水を洗びて身を清めてからお参りした。女衆は朝早く川で髪を洗ってお参りした。朝飯前に機を織っただけで、あとは一日仕事を休んだ。(猿石)

機が織れない、機神社へ、どうぞこの手の 上るよに

七夕の朝四時起きて、二渡にある機神様へ御願をかける。ネプタの枝をかいて桐生川へもってゆき、裸身になって水を浴びる、それから機神様をおがむのである、その頃はチンカリンとヒを投げて手で織った。その朝お百度をふめばいい綱ができるなどといった。夜のあけない中(明星様の出ない中)から夜はおそく(三星様の沈む)迄織った。



屋敷内にまつてある神は屋敷稲荷と井戸神さま。家によっては十二さまや庚申さまをまつている例もある。(大門)



一トボ一口にはられた神札(蛇留懸)
(撮影 都九十九一)

一三峯神社のお札(清水)
(撮影 上野 勇)

神 棚 (萩平・皆沢)



神 棚 (皆沢) (撮影 関口正巳)



神 棚 (萩平) (撮影 都丸九一)



同 上



同 上



カラス 天狗の 絵馬



天狗の絵馬 (後沢)

蘭田豊司氏宅。大杉神社に關係があると考えられる



(撮影 都丸九一)

釜 じ め (萩平)



うまやの神 (皆沢)

土間にうまや跡が残る。(撮影 関口正巳)

五講

(一) 村内の講

庚申講（末尾に庚申縁起二冊を付す）。

石鴨には古くは七組ぐらいあり、その後は五つぐらい、現在は三つになつてしまつたが、さかんだつた。村庚申の日は村中の庚申さまを集めてやつた。その日はみんな水をあびて身をきよめて拜んだ。

庚申の日は、うどんを食つた後、あずきかゆを食べることになつてゐるが、地震がするやうり直しをするることになつてゐるので、掛軸を早く外して納めてしまへといつた。桑原といふところで庚申をやつたところが途中で地震がしたのでやり直しをしなければといふので翌晩やつたところまた地震が来たので、あしたの晩、あしたの晩といふので結局は五晩とか七晩やり直しをやつたとかで、しまいにみんなで一合とかを出し合ひでやつたといふ。

昔は庚申の日には、家中がナマガサを食わなかつたが、今は拜みに行く人だけが食べないくらいだ。（清水）

戦時中の食料不足になつても絶えなかつた。

昔は、秋には家中こぞつて行つて、大ぶくろに入れてうどんをぶつて食つた。戦時中は麦を入れたが、正味五合ずつ持つて行つて続けた。津久原では一月おくれにやる。さんざ食つてゐるゝゝな世間話などをしてオタタラを上げてから、あずきのおけえをつくつて夜食を食つた。

最近では衛生上よくないからといふので考えて、一升のんでからやるよつになつた。（津久原）

庚申さんは、生きてるときは猿田彦で、死んでから庚申になつた。同じ神さまのことで、猿田彦は五穀豊穡の神で、いいことの欲ふか、（いい意味の欲ばり）で、はたらくもんだ。女には余り手を出すな、六本の

手があるように勤勞意欲旺盛で、見まい聞くまい話すまいでよくはたらく、にわたりの声とともに早く起きてはたらけ（チャボが三度鳴けば夜が明けろ）、はたらくにはうんと食えといふので庚申にはうどんをうんと食わせる。（清水・生形豊二郎）

庚申の講は、講員がくじ引きで宿をきめるが、くじをひいて三年間正月の講の宿をすることになつたら、そのときはお祝いとしてもちつきをする。米のとれないところで庚申のもちつきをするのだから大変なことだつたわけで、何回かそつた家があり、ときには町でついできたのもある。（清水）

庚申の晩は、オサメをもらわなければいけない。ふつうに一度食べた後で最後にもう一度、二つとか三つあけさせられた。小若衆で泣いてしまつたのもいる。若い頃、庚申に行つて来いといふので行つてふつうに茶わんを出しちゃあ食つていたところが、ほかの人はもうたくさんとかいって少しづつしか食わねえ、そのうちにオサメだといふので食う段になつたが、さつき食つてるので入りやあししない。これが食えなけりやあウチへ行けねえのでこりたものだつた。（清水）

仕事の早い人を庚申さまのようだといふ。庚申さまは手が六本あるから手が早いのだといふ、作神になつた。

アマンジャク 庚申さまが足で踏んでゐるのはアマンジャクといふもので、あつちこつちとうまいことをいう人のことをアマンジャクなようだといふ、アマンジャクヤロウといふ。

庚申さまの日は女は髪を洗うなといふ。庚申さまのオスガタには、女が髪を毛もつてつるされてゐるからさういふ。頭なんぞを洗つてチノチノナしていちやあならぬ。本気ではたらけといふことだらう。（清水・石鴨）

今でも行なわれてゐる。寄日に二組、いずれも五軒五軒である。北沢でもやつてゐる。年六回のうち、寒申は拜むものでないといつて寒庚申はやらないので、年五回する。

宿はまわり番、庚申様は肉食の神様だかといって、腕に盛ったものは残してわるいといつてみんな食べる。赤飯、酒もみんなで一升ぐらい出る。臭いもの、魚、肉、ねぎなどは食べない。これ等の料理は、むかしは女には手をふれさせるなどといって男だけだったが、今は女にしてみらう。死人があつてもかまわないが、お産があるときは宿をかえる。夜食前に地震がくるとやりなおしをする、ということで、その夜の食事は早くする。その夜の男女の交わりは悪いという。

庚申様は作神だ。庚申様が天から下るときに麦種を持って牛に乗って来た。途中犬はえられて、麦の種は爪にかくして、犬の目を逃れた。それで戌の日には麦をまくな、といわれる。

長い話は庚申様の晩にしる、という。(萩平)

講は中居(細谷戸・中居)、に二組、猿石に四組ある。細谷戸では、以前は三、六、九、十一月のあたり日に庚申待をした。現在ではその月の日曜日になっている。庚申さまの軸があつてそれをかざっておまつりした。夕食時にまつった。食事は酒をだすのでうりである。酒のさかなにてんぶらだした。組によつては庚申講の膳籠をもっている。

猿石では、以前は小豆がゆをして食べた。それを食べないうちに地震がある、まつりなおしをしなければならなかつた。庚申様の晩には将棋をさしたりして一晩中おまつりをした。はじめて組に入る人は、酒一升出した。みよりのものがなくなつた場合には、庚申待に参加しなかつた。宿にあつた場合に、子どもがうまれると宿をかえな、といけなかつた。庚申さまは血ブタをきらつた。猿石では、庚申待にさしみをだした。さかながないと不景気だといわれた。

庚申待に参加する場合には費用は各自負担であつた。

むかしは、庚申待の晩に食えば食うほど農作物がとれるといわれた。猿石では、庚申待は三月彼岸後九月の彼岸前にやるものだという。細谷戸では三月彼岸後、十二月の暮前にやるものだとされている。(中居・猿石)

庚申さまは百姓の神さまである。作神さまである。

皆沢では、講でまつると、皆沢中でまつる場合とある。

庚申講は森下・森島・靱山組の三組あつた。今はしてない、それぞれの組で宿をきめて順にまつた。庚申講は十月のうちにやつた。宿では床の間に庚申さまの掛軸をかざつて、お膳にごちそうを供えた。ごちそうは、イモ、ゴボウ、ニンジン、ダイコン、ミョウガ、キウリ、あぶらげなど七色のものをあげた。

庚申さまの掛軸には、赤い色をしたのと、黒いのとあつた。赤い方の軸をおまつりしている組はお神であるのでさかなを食べてもいいといつたが、黒い方は仏なのでだめだといつた。

宿をすする家で親戚などに死人が出たとき(ブタをきたとき)には、宿をのぼした。この場合、十月になるまでに四十九日すぎればよいとされた。お産の場合にはかまわなかつた。

お庚申さまをすると(庚申まち)世間をひろく人間をつれて歩いて、みちびいてくれるという。そのため、庚申さまは三本辻にまつつてあるという。

皆沢全体でまつっている庚申さまは、神社のうちの三本辻のところにまつつてある。ここには、十五基ばかりの庚申塔がある。年号のあるものを示すと次の通りである。

- 庚申塔 元文五庚申歳八月吉日 皆沢村中
- 百庚申供養 天明七丁未年十月十六日
- 百庚申 寛政二年戊辰八月吉日 入飛駒
- 庚申塔 寛政三辛亥年三月吉日
- 庚申塔 文政十丁亥年八月吉日 皆沢村中
- 庚申 万延元庚申十月吉日
- 千庚(申) 万延元(不明)十月吉(不明) 願主当村中
- 百庚申 明治二年己巳十月
- 庚申 明治八年八月吉日 村中

皆沢では、毎年八月一日に村中の各戸から人足がでて道普請（みちがり）をしている。この日庚申さまのところも掃除した。そのあと庚申さまにおみきをあげてまつった。（皆沢）

組合で寄って庚申様を祭るが、三組合ぐらい寄ってにぎやかにやる。年四回もする所がある。庚申様の掛軸や膳一組があり、うどんを供えて拜む。坊さんが来てお経をあげる。もとは酒を出さなかったが、今は一合ぐらい出すようになった。夜遅くまでしゃべって遊んでいた。しょうぎや碁などをする。（猿石）

年二回やった。寒庚申はいけないというので、寒が明けての二月と十月にやった。三つの組があった。宿は藪引きできめ、一番が当たると酒を買った。（高沢）

年六回、組合で順まわり。うどんを食べる。ナマグサは使わない。腹一杯食べて、その後また食べる。庚申様のお渡りの日には、女の人は髪を洗ってはいけない。洗うと大病みをするとか、死ぬとかいわれている。ナマグサを食べると、庚申様にふんづけられるという。庚申の晩に夫婦のいとなみをしてはいけない。（鍋足）

四方山話をした。

庚申は五穀の神、百姓の神であるという。猿が御眷族である。

庚申の夜の夫婦関係はよくない。片輪の子ができるという。（浅部）

余程以前、梅原で行なっていた。講は六人一組で「カノエサル」の日に祭ったから六十日目にした。掛軸をかけて大人がおがんだが子供もよんだ。子供が一つ一つのお膳に坐って「うんとたべな」など云って、うどんなどを御馳走した。煎餅でもあればいい方の程度であった。

庚申待のお祭の終らない中に地震がすると、たとえ小豆のお粥でも、作り直してたべた。非常に穢れをきらひ、死ブクはいいが、血ブクは悪いと云った。魚の類は食べなかった。（大門）

蛇留淵の庚申の膳箱にかかれた銘

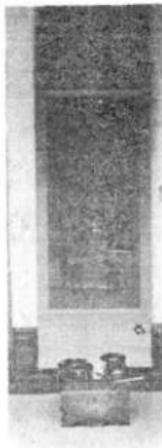
天保七丙申歳正月吉祥日

庚申御辰膳箱
大工前原丈四郎作。

（蛇留淵）



庚申の掛軸（蛇留淵）
（撮影 都九十九一）



庚申様の軸（今倉）



庚申様の掛軸（皆沢）
（撮影 関口正巳）



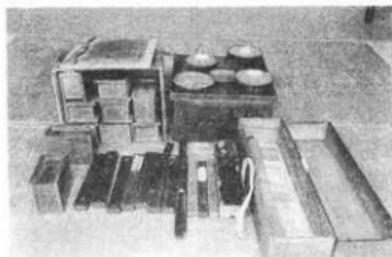
庚申塔（寄日口）



庚申塔 刻字は何もみられない。この地域にはこの種の庚申塔が多い。（今倉）



金沢の庚申供養塔（享保8年）
（撮影 阿部 米）



庚申講の備品 膳、箸、箸箱、枕、庚申の掛軸等



庚申の膳（清水）（撮影上野 勇）



庚申講の膳（今倉）



庚申講当番帳（今倉）（撮影 池田秀夫）



庚申の箱膳（蛇留淵）
（撮影 都九十九一）

村 庚 申

七日二十四日に、昔のヨケゴリもいっしょにして村庚申というのがあ
る。組々の庚申とは別だが、この日は各組のカケジや庚申さんの箱膳こ
と持ち寄りである。いまは川へ入ってヨケゴリはしないが、米を持ち寄
りて煮て、拝んではから食べる。(石巻)

庚 申 縁 起 全 (万室)

○老子三尸経ニ見タリ夜半ノ後南ニ向テ再拜上尸又彭俗青色中尸白色下
尸又彭焔赤色彭侯子彭常子
命児子悉入ニ勤冥之中ニ去ニ離我身ニ三反唱ヘシ
○大宝元年ヨリ正徳元年マテ千九百年ニ成ル也
○当中ノ年マテ千九百十五年ニ成ル也
○庚申ノ縁起

○抑于時大宝元年庚申正月七日庚申ノ日申ノ時撰津国難波之天王寺ニ民
部僧都申沙門ノ所十七八ノ童子米テノタマタ帝釈天ノ御使ニ下給也
夫大日本国雖人多津国天王寺ハ佛法最初諸仏法ヲ弘有寺也彼寺二年
六十余ノ民部申出家是ノ事申伝ヨト帝釈ノ仰依下申也能々聞給テ三界
衆生ニ弘給度申ヲ守ラハ過去現在未来三世ノ徳有先庚申中日ハ心清淨ニ
シテ待申ヘシ沐浴シテ身ヲ清メ精進潔淨ニシテ清衣表ヲ着シ南方ニ向
テ六尺ニ棚ヲ結申時ヨリ出合待可申也帝釈仰ハ彼庚申申事ハ梵天所
聞帝釈天モ衆生思召テ童子ヲ下シ庚申ヲ待人ノ名ヲ書印三条塔ヲ立
是三条ニ組タル心ハ是三界ニテ是庚申ヲ守可待人ハ一条功力ニハ過
去ノ罪滅ス二条ノ功力ニハ現世ノ諸願叶三条ノ功力ニハ仏果ヲ得塔ヲ
楨ナシベシ

サレバ人間ニハ諸ノ悪事多シ
過去ニテイカウノ罪ヲ以テカ今ノ物思イ次シ何ゾ不願人ハナシ是
弘法僧ハ我家ノ願ト思イ國王ハ民思イ天下ハ我一代吉願給エリ身代テ
モ品物物思イゼザル人ハナシ富貴ノ人ハ家ノ宝ヲ子孫伝バヤト思一切
衆生是皆思事有帝釈天衆生感給テ是ノ庚申念載名ニサカイ書付煉魔王宮

申テ今世後生ノ諸願ヲ叶セ給出家是弘給ベキ也夫天竺唐土ニモ是庚申
ヲ用也日本弘事はノ時也南方香爐ヲキ又膏ハ花ヲ立燈明立五穀ヲ備
夜半ハ円物ヲ備焼ニハ飯ヲ備酒ヲ供ジ男女愛別ノ心ナク折念可申是
ノ夜中者悪敷雑談モセズ昔ノ天項弁是庚申ヲ待給功力ニ依テ天項弁
トナラセ給庚申ヲ待察ハ六地獄ノ苦ヲ逃一歳ニ六度也一度待始テ死出
ノ山ノ苦ヲ逃二度待ハ三途川苦ヲノガル、三度メニハ無間地獄ノ苦ヲ
ノガル、四度メニハ餓鬼道ノ苦ヲノガル、五度メニハ畜生道ノ苦ヲノ
ガル、六度メニハ修羅道ノ苦ヲ逃仏果ニ至ル事無疑成亥ノ時ハ三器
五穀ヲ備エ奉子丑時ハ三器ニ円キ物ヲ備エ刀卯時ハ三器赤飯ヲ備赤花
立香タキ油ヲ燈シテ守申ベキ也念様ハ戌亥時ハ文殊ヲ念ズベシ子丑時
ハ不動ヲ念ズベシ刀卯ノ時ハ摩利支天ヲ折念申スベシ嚮ニハ業師文殊
過去七仏號ニ者阿弥陀如来六観音未来ノ七仏ヲ唱可申皆是三世ノ折
禱ト成ル本尊ニハ南無三十三礼一切経ノ中ニ庚申ノ御経ト申経ヲ貴賤
上下至マデ唱待可申ナリ子孫眷屬マテ祈禱成ベシ

○庚申ノ経文曰

彭唯子彭常子命児子寶冥離我身 (後此の二行抹消)

○彭侯子彭常子命児子

○シヤウキヤヲゾイザヤザルノ我ガトコニ

子タルゾ子又ゾ子又ゾ子タルゾ
三返ヨメバ悪鬼恐ラナシタマチンリゾク事無ク疑庚申ノ夜ハ下
屋ノ間ニ居ズ又五辛四足ニ足ヲ前方ヨリ不食随分清淨ニシテ待始二
度メヨリ重ブク成トモイカヤウノ不淨成共ケガラシキヲキアラワズ三年
ウチハ待トマケ可申也三年ウチ能待届十八度也必一切ノ諸願成就ス
ル事ウタガイナシ庚申ヲ待人ハ皆米銭ヲ入テ逆修ニ千僧万僧供養申タ
ル心ヲ過去現在未来マテ助ベキ也富貴ノ人ハイカウニモ嗜ラ入供
養可申一度三器ニ三度宛供物備奉ニセバ現世ノ祈願トモ成ル也是國
中エ伝エ給エトテ彼御使婦給也凡天ニ音有只今彼使能々来也トバワ
リシト也是ヲ万民間付ヲドロキサワグ也民部僧都是レヲ諸國弘メ給

庚申経ニ是文有千返モ百返モ十返モ唱申ベシ

諸行無常 是生滅法
生滅滅已 寂滅為樂

ト唱申也又六八セントテ年々六度宛梵天ニ大法事有是ハ梵天帝釈四大天王諸天明王御祈合シタモフテ是ノ六法事アイタモフ也ハ八セソ二日ノウチニ九月ニ當テ庚申日也皆是諸天三宝明王待給ナリ人間斗待申スナシ仏神モ此ノ庚申ヲ待給也念ズル輩ハ貴賤トモニ供物ヲ備エタシナミヲ入待可レ申現世安穩就中サニ病ヲノガルナリ子孫繁昌親類眷屬マテ三世トモニ成就スル何レ是ノ時ハヒルヨリ心清淨ニ待可レ申供物少シモヲシム心アラバヤガテ火難来テヤキウシノウ也三モ二十八度待申セバ万僧ヲ供養申タルヨリスグル也能々待人ハ三世トモニ叶ベシ庚申ノ夜ハ少シモ子ムラズシヤウ有ル者ハ必心中ニ諸願満足親類ケンソク七世ハ父母マデ仏果ニ至ル事無ク疑者ノ也○歌曰

○ニカジコジタ、シハシラジマワラジ
フサジヤヲキジニサカラジ

○是ノ本書者左野茶本村有

迷故三界城 悟故十方空
本采無東西 何処有南北

役氏

宝林寺
万室

「庚申呪多形信札々々々米佐利

秘密校集記出ル
々々々婆娑詞

大青面金剛真言
唵帝婆業又盤陀阿婆婆訶

スミヤカニヤミヤカニ
スミヤカニ

庚申御縁起 全

○南無大慈大悲觀世音菩薩

○柳庚申ハ大宝元年庚申正月七日同申時拱津國南波天王寺同申期年比十七八歳童子天下我徒是梵天帝釈御使下也其日本雖多國此天王寺者仏法弘通靈地然彼寺住僧依除仏縁庚申由来日本可レ弘教夫庚申者一年有六度先受二人界生者僧俗貴賤各々種冬替事願無人依去當庚申日徒朝清淨六根其日申刻集リ結南棚香華灯明或者奉指上上色供物菓子等三十三度成三礼拜信心僧俗現世安穩後生善処無一疑一切衆生志聞梵天其時信心之輩彼名実書集納三宝藏亦帝釈御前有金札鉄札則此界善惡印札庚申信仰施主金札印不信心者鉄札印炎王御渡給出家ハ為衆生之弘弘佛法為善王子天下百姓施慈悲止三毒十惡ノ心令信心輩依此功德滅過去罪業未來ハ至仏果誠現在諸願可叶御誓願也

柳天王寺住僧受帝釈教庚申待由来ヲ從大唐弘日本此時ナリ庚申待夜僧供養カリソニモ不可惡事相讓偏唱念仏可待是昔天寿菩薩御待始玉ナリ其庚申御本地大日阿弥陀觀音勢至虚空藏普賢菩薩為衆生ノ化度現庚申給也依之當其夜念十方諸仏菩薩庚申功德者出ニ六地獄苦至三沮樂彼岸

「第一無間地獄道」「第二死出山苦」「第三途川苦」「第四餓鬼道苦」「第五畜生道苦」「第六修羅道苦」信仰施主庚申依方便六道ノ苦ノガル亦八專トテ一年六度有此八專一月内九月日庚申日有當此日須弥山梵天王諸仏菩薩米集四天明王法行処其上成大業妙典法華玉也依去於此世界當其日随分改三心不食五辛酒肉三志正可動行亦庚申待之始如何様ノ願有之共三年ハ不可止無疑念其内諸願可叶御誓願此日四天明王御番テ以通力人界色界善惡前金札鉄札印納玉宝藏無疑依去其日ハカリソニモ不可惡事一隠トモ顯亦色々離ウケ

ヨケゴリ

七月の土用入りの前日がヨケゴリの日で、村中一戸一人が出て天神さまに集まり、米を五合ずつ持ち寄りてごはんをたき、天神さまに上げて近くの川の中で水ごりを取り、ごはんを食べた。この日は、一家に不幸があったときは出ないが、ふつうのときはたとえ子どもでも一人は出た。昔は水ごりをとるときに唱え言もあつたらしいが今は伝えられていない。戦時中の食料不足のとき、十七年ごろ止めて、現在は二十四日に村庚申をするようになった。(石鴨)

(二) 他出の講

伊勢講

銭別をもらって伊勢参りをする。お飯屋を道の脇に作った。お飯屋に夢で作った人形をあげておいた。

伊勢から帰るとお飯屋に腰かけて休む。お飯屋に火をつけてもす。

(鍋足)

御嶽講

御嶽参りをする。川に竹を四本立て、シメをはる。お参りに行かない仲間がききおがむ。帰ってくると、仲間でおがんで、行をする。経をあげたり、水浴びをする。

この辺(鍋足)では、細瀬作一さんが熱心であった。寒水を何度浴びたか分らない。穀断ちといって、塩味を一切入れないソバカキだけで何日も過ごした。亡くなる三日前に、奥さんと娘さんにささえられて夜中におがんだ。そして「五十十年の修行終わり。」と、幣束を神前に投げた。その幣束が立った。

御嶽講は、梅田地区全体が一つの講組織であった。大元は桐生、天神町三丁目の笹島さんで、テンズイ院という。(鍋足)

今、六十から八十位でまの人が盛んにやっつた。

「九字は許しても、フツコミを許すな。フツコミを許しても御真法を

許すな。」と嚴重にいわれており、部外者に信仰の内容を話してはいけない。

オウカガイをたてるるとき、次のように並ぶ。



ナカザ(中座)が神がかりしマエザ(前座)がたずねる。

となえ言には、六根清浄、大被、鞆などがある。

普通、神がかりする前には四方がためをし、フツコミをする。四方がためとは、東方のゴ

サンゼヤシヤ明王、南方のグンダリヤシヤ明王、西方のダイト

クシヤ明王、北方のコンゴウヤ

シヤヤ明王、中央のダイニチダイセイ(大日大正)不動明王に対して次のようなとなえ言をする。

「ノウマクサラバタタ ギヤアテイビヤクサラバボウケイビヤクサラバタタラシタ センダクマアガロシヤタア ソクタヤウンタラカシマシ」

フツコミというのは「ビヤクウンバンコラウン リンヒョウトウシヤカイジンリツザイゼン 九万八千キョウマン ボロウン」である。フツコミの中の「リン ヒョウ トウ シヤ カイ ジン リツ ザイゼン」を九字という。

マエザが九字と切ると、ナカザに神がかりするが、両手で持っているヘイソクが上ってしまふ。

ナカザになるための修行は一段ときびしく、ナマダサを一切たつたり寒行(寒中の水あびなど)をよくやつたものである。

御嶽教の位階は次のようである。権測導、訓導、権小講義、小講義、権中講義、中講義、権大講義、大講義、権小教正、小教正、権中教正、

中教正、権大教正、大教正、管長。(高沢)

御嶽講は金沢の岩さんが入っていた。信仰をしている人はいくらもあった。

鳴神様(獣サマ)で御嶽講の人がした。この人達は他所から来た人である。(湯沢)

三峰 講

ムジナツタカリがいたから、むかしは三峰の信仰が多かったようだ。三峰さまは借りて来るので、ショウ(生)で借りて来るときは泊ることはできない。野宿するならよい。このときは三峰さまがついているから少しも淋しくないもので、このときはショウとはいわず、ナミノハナといえと固くいわれていたという。

いまでも三峰さんの社にお参りに行くときは塩一升、米一升を上げる。(清水)

三峰代参講

昔は年三回ときまわっていて、三月十九日、五月、七月の十九日に代参が出かけておこもりをして来た。村の三峰さんに札箱があり、札箱をもつて行って三峰さんで入れかえてもらって来た。往復する間は、ナマダサを食べないことがきつかった。終戦前の十七、八年ころ、食料難で止め、古峰ヶ原などと一緒になり、代参は都合の良い日に行くようになった。いまもごせん米と塩を上げるのをやっている。(石鴨)

古峰ヶ原代参講

古峰ヶ原代参の講は、四月十五日になつていて、代参の者は前日に行つて、昔はおこもりをしたものだったといひ、足尾へぬけて行つて来たが、いまは車で一日で行つて来る。お札をうけて来て、天神さまに集まつてお札をくぼり、ごはんを上げてから食べることをしている。(石鴨)

よそへ出る講には、むかしはコブガハラ、古峰、三峰等があったが、今はしていない。(萩平)

三峰、コブガハラ、古峰等の講があったが、今はほとんど行なわれていない。

講から帰つてくると、寄日の薬師堂の前で一〇〇人鍋で煮こみをつつて村中で食べた。(馬立)

富士 講

川島山田五郎(山田五郎が名であるが、通称ヤマゴロさんである)の御祖父さん、御祖母さんが熱心であった。講中は四、五人いて富士の浅間神社にお詣りをした。

仕事をしながらよく唄をうたっていた。次にその内の幾つかを誌す。

不道子守うた

○親子兄弟夫婦をはじめ

氣の世の勤めでくらしましよう。

(三、四句は繰り返す。以下同じ。)

○主人大事とおもうこれからは

たいぎをたいぎとおもやせん

○家業大事にまもらぬものは

天のめぐみがうすくなる。

○いつわりする氣はまんざらなが

心のまがりが無理をする

○ばくちうつなら掟をそむく

ほんの人ではありやせぬ。

○すがたかたちはどうでもよいが

おやに孝行のつまほしや

○天に氣に入る夫をもとめ

おやに孝行はげみたや

○女郎やばくちと大酒をやめりや

つま子可愛とおや大いじ

○悪と知つたらみなトリすて

やすく気の世の人となれ

○自由自在にするがのふじの

自分で助かるわけしりな

○いきで助かるわけ知るならば

ふじのおしへはそむかれな

○しかと手をくみ考へみれば

どこがわが身の元じややら

○こないやしきわが身のしんか

月日さまかと目に涙

○わたしやしうとのうわさはいはぬ

かはいい夫のおやじやもの

○よめのきげんもようとりまする

かはいわが子のつまじやもの

○たとい上様下賤の身でも

自心の一つがままならぬ

○ほれたよく目が気の世の教へ

あつくなるほどつとめたや

○きれたわらじもそまつにやならぬ

元はお米のおやじやもの

○自心のご恩がわかってみれば

はらはたたれぬたたせまい

○三千世界気の世とかはる

あうんの教へじやまにあはぬ

○人の命かこうくらしんと

なつてたすからふじのみち

浦和県 土持孝心子守唄

○さても明治のご一新

諸国戦争おさまりて

○わが日の本のまつりごと

日々に正しきその中の

○浦和県そのうらに

人足よせむおとりたて

○罪あるものをめしつかい

善をすすめて人間の

○誠の道にみちびかれ

悪をこらしてたちまちに

○曲れる心をとり直し

先非を悔いてその後は

○人なみなみの人になし

農業工商それぞれ

○産業さづけおしなべて

一家の基立つように

○お世話下さるお思召し

海より深く山よりも

○高きめぐみのほどぞかし

そう伝へ聞く人々が

○国恩めうがのおんために

徒場ごふしんのお手伝い

○申したしとの願いにて

明治三年初冬の

○閏十月十五日

女はむりのその日より

○武州その外四ヶ国の

村数三百集りて

○人数凡そ五千人

銘々精進けつさへし

○朝は霜をふみながら
夕べは月を頂いて

○余たたくつみし米銭を
そそつみもたらして

○老いも若きもうちつどい
凡そ三丁四方余の

○堤をほりおほり
はたらく情もむつまじく

○ごふし成就のその上は
よせむ人足もろともに

○天のめぐみを頂いて
いよいよ善に進むべし

○ご恩は日々にあらたなり
ごおんは日々にあらたなり

住居のご恩 子もり唄
○さても尊とや天国の

住居の元を尋ぬれば
○月のうちほし日の照らす

うけいてのびし木や竹の
○いのちをとりて番匠の

すみかねあてて工夫して
○柱となしてたてまいし

玉ねあげやねふきかべをぬり
○戸障子かまどにいたるまで

みな職人のみちにより
○つくりそらいて雨風や

つゆ霜雪やあつさをも
○しのぐか元の父母の

めぐみくまなき恩ぞやと
○人々これをさとりいて

せめて子に伏し寅に起き
○具はるわざの働らきを

夜る昼ととめたまふべし
明治八乙亥念四月四日写之

館林 佐藤近太郎伝へる
高沢村

川島おきんどの
不二道 こまり唄

不 二道 こまり唄
氣明朝来扶桑国

蛭女郎の身まつりは
一切女人の教へにて

しじたけふなのおきふしや
庭のあかりにまゆつくり

てふの形と身を現じ
糸おたまきにくりかへし

あやくにしきとおりいだし
人みなはだへをかくすなり

貴人国司の人々も
この身まつりがなきならば

何をか衣服と定むべし
かほど薄き四つのとく

朝な夕なに忘れなく
信じたまいやおのづから

ふじはこの花さくやひめ
元の二親のちづなにて

月やく日やくのけがれなく
張女郎のその徳を

末世にのこす教なり

明治八乙亥年

三月二十七日様

常陸国河内郡推塚新田

土持孝心

子守うた

すぢの
皇の

ふるきむかしに立ちかへる

御代のまつりは月と日

光の如くあきらかに

高き低きへだてなく

うつり行く世に澄みわたる

不二の教の開けきて

津々浦々に奥山の

野末の里の人々も

国恩めうがをわきまえて

土持孝心くわだつる

頃は明治の八年なる

三月末の七月より

三日の間常總の

合の通路なをさんと

よりつどひたる国々は

下蔵下野下總に

常陸合せてその数は

凡そ一千五百人

かほとたつとき食行の

食の教を万方へ
伝へんために身をせめて

難行ありし代々の

師の高恩一筋に

むくいたまいや人々よ

以上(高沢)

六道陸神

道陸神さまは道の神さまである。道のわるいところにおまつりしてあ
る。道陸神さまには、石をあげて足がくたびれないようにとおがむ。

(昔沢)



寄日の道祖神祠 銘文に「嘉永元十一月吉日」とあり、わらじが供えられていることに注意。

(撮影 都 九十九一)



ドウロクジン(寄日口)
ワラジを供えている。

(銘 嘉永元十一月吉日)

道祖神は道の通りはたにあり、自然石に文字が刻んである。
水神祭、元、共有の水車のあった頃はよく水神祭をした。(大門)

七 その他の諸種の祭

わたごさま(愛宕さま)・わたご精進

村中というのでなく、賛成した人たちが集まって、米五合ずつめしを
にて食って、水ごりをして拜む。無病息災の信心で、特にカゼをひかな
い、悪い病気にかからない、と信じられた。

月の二十四日にやる。(石鴨)

大久保山というところにわたごさまの石宮がある。これを猿石と中居
で交代で世話しておまつりをしてい。祭日は四月三日(お節供の
日)。世話役は、細谷戸・中居・猿石の上組・下組・東間谷戸・宮谷戸の六
組が交代でやっている。六年に一度ずつ番がまわってくることになる。
以前は、村中から寄付をあつめておまつりをしたが、現在では当番
の組だけでまかなっている。

子どものほうそりがみである。四月三日のおまつりの日に、組合の各
戸で、赤飯をつくり、おみきをもって山までおまいりに行く。(中居・
猿石)

四月第一日曜に、愛宕山の頂上の石宮に赤飯を持ち寄り、子供たちに
分けてくれた。中居から二渡までの範囲でやった。(猿石)

天 祭

村中ではなく、組々でやったので、五軒とか七軒の組でエサン——オ
テントサンのカケジをもち、まわり番でやった。エサンをかけてオミキ
を上げ、手をはたいて拜んだ。仏に關してれば酒は出ても有が出ないわ
けで、肴が出たのだから仏ではなかった。その日に行くとき金を包んで
行くので、昔は十銭くらいだったか、子どものころ行ったのでおぼえが
ある。いまはそのカケジは城山の方へ持って行ったり(上藤生)して他

はなくなっちゃった。(石鴨)

毎年二月十二日、三月三日などに行なった。特定の神社でなく、各組
合ごとにした。酒一升。宿はまわり番で、根本山の神主からお札をこし
らえてもらってこれをくばる。むかしは神主が宿に来てくれたが、今は
来ない。この時のお札をしのの先にはさんで畑にさしておいた。

作神様の祭りである。(萩平)

三月十日ごろ、または第一日曜に組合の者が宿に集まって、材料を持
ち寄り飲み食いする。天道様に感謝して一年間の天気を祈る農作祈願の
行事である。上ノ原組合では長泉寺の頂上にボンデンを立てる。(猿石)
三月の第一日曜にやり、部落の懇親会みたいなものである。宿があつ
て、その床の間に、おしとき(米の粉を練ってゆでないもの)を供え
る。(鍋足)

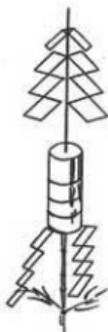
三月第一日曜にやる。朝早く当番の家に集まり、鉄砲ぶちにいって兎
をとったり、川で魚を釣ったりして、それらを肴にして一杯やった。作
ったウドンを腹さんざ食べて、余ったら膳のはじに盛りつけて、それを
食べきらなければ帰れない。(後部)

三月三日に二組が一膳になってお祭をする。一方の組の者がうどん粉
約二十六キログラムでうどんを作り、ハンギリという入れものに入れて
おき、他の組の者はお客扱いとし、むりに沢山食べさせる。普通十二は
い食べる規準の外に食べさせる。食べきるまで帰さない。最後に食べさ
せる分をオシイブンという。

食べられない時はすもうなどをしてまでも強いられる。人数は三十人
である。終ったあとで雨乞に様名、赤城神社に代参に行く人を決めた。
十年に一回位行った。(大門)

梵天祭(天祭り)

また幣束納めともいう。現在では四月三日。馬立・筑原・台・当夷
平・大州・皆沢等各地区の分を根本山の藤倉氏がつくる。桐生紙で一帖
(四十八枚)今の紙で大判十二枚で梵天一本できる。もっとも戦前まで



は村の人が梵天をつくり、これを持って来て藤倉氏は拜むだけだった。

しきなどでしょってゆき、さらに村人一同で山頂に持って行って木のの上などに立てる。そして酒となる。またおミキの方はオタルという竹筒に入れて梵天のところに供える。

天災をよけるため、雹雷除けともいう。これに出るのは一戸一人、今では女子でもかまわないが、以前は女はいけなかった。(今倉)

風祭り

風の又三郎を祭る。風害よけ、馬立の山上に高い高い竿の先に草刈り鎌を結びつけて立てる。

落合では、オフトラ(お飯屋)をつくってこれを担ぎ、五色の色紙で旗をしのの棒につけて持った村人が、列をつくって太鼓を叩きながら村中をまわり、最後は落合の川の岩の中島に行つてオフトラを川に流して終る。(今倉)

星祭り

十日夜の夜行なう。エトの上からその年に生れた人が藤倉さんを頼んで押んでもらう。とくに厄年の人がよくやった。(今倉)

ルスンギョウ祭り

旦那さまのいない留守に、近所の女衆が寄って何かごちそうをこしらえて食べることをいう。もとは神無月に神々が出雲に集まる時、えびす様は年寄りで行けないので、神様の留守にえびす様を祭ることをいっただ。かま神様は別に祭らない。(橋詰)

細谷戸の感謝祭

十年ほど前から十一年二十三日に細谷戸だけ(十七軒)で感謝祭といふのをしてる。係のものが中心になって世話をし、費用は各自負担。

宿は広い家にたのむが、くじびきでできる。二十三日の夜、庚申さまの掛軸をかざって、とり入れ感謝のおまつりをしてる。この日のごちそうは、前は赤飯であったが、現在ではうどん。(細谷戸)

お日待

一軒一軒で、御先祖さまや皇太神宮を始め八百万の神々をまつる行事である。(今倉)

春夏秋冬の四季に、法印様が来て拜んでくれた。暮のお日待には、へいそくを切ってくれた。お日待は家内安全のために行なう。(萩平)

八 仏教関係

白雲山碧雲寺

現在大州・台・当実平・落合・皆沢・穴切等に檀家にもつ。根本山大正院の女衆の檀那寺でもある。(今倉)

滝沢山長泉寺

寺の後の山には蛇がたぐさんいるので、「竜の沢山」といい、竜沢山の山号になった。寺のわら屋根を替える時に大蛇のぬけがらがあったが、足にはける大きだったという。この大蛇を見た人はいないが、その分かされて蛇の子がいっぱいいるといわれる。(橋詰)

高園寺

十七世 石橋梁和尚に東沢寺本尊縁起という文書がある。この人はまた境内の宝経印塔を延享二年に建立している。鐘撞堂も作っている。次のような文書がある。

一、大鐘 式尺五寸
一、鐘楼 寛延二年己秋石橋建立
金五両川鳥甚五兵衛手伝来ふきかへの勞をはぶかんため
下に石櫃仕入たり。

昭和三十八年に、鐘楼を新しくした折、掘り返してみたが何もでてこなかった。十八世の大蓮仙和尚の建立した万霊塔が境内にある。宝暦三年とある。寺の附近にフタジシという所がある。これはむかし高園寺の尼寺であった福寿庵のあとといわれている。寺の裏山に石祠がある。天照皇大神を祭る。石祠に糸井という姓がはられてある。年号は分らない。むかし寺の世話役に糸井という人がいたと聞いている。(高沢)

地藏 様



西方寺の六地藏 (右) (大門)
(撮影 阿部 孝)



西方寺の六地藏 (左) (大門)
(撮影 阿部 孝)

毎月の二十四日が桐生の今泉にある日限り地藏の縁日で、よくお参りした。ここはいつと日をきってお願をかけるのである。お願がかなうと、願はたしと行って礼に行った。(大門)



西方寺の六地藏
(撮影 阿部 孝)



子安観音 (寄日口)
前にチガヤで作ったショウリウゴモにヤクボトケに供えたものを盆送りで送り出している。

子安観音 (寄日口)
右側
天明七丁未年
正月二十五日
普門品供養
為諸亡靈供養
入彦間
山内
兩村講中
左側
(銘)

薬師 様

寄日沢の入日口に薬師様がある。祭日は、むかしは九月十九日だったのを、寒いからとて繰り上げて九月九日にする。この日をオタンチという。各戸から団子、にしめなどをお堂に持ち寄って飲食した。(萩平) 桐生館の跡にある。今は広沢の神主前原寛臣氏が来る。昔は部落全体でやったが今は希望の人だけが祀っている。元は賑やかであった。眼の悪い人が願かけて絵馬が沢山上っていたが今はない。(大門)

馬頭観音

細谷戸に馬頭観音がある。毎年八月十六日に、馬をもっている人たちがあつまっておまつりをした。村内のものが主であったが、馬をもっている人たちがおまわりに来た。(猿石)

百万遍

厄病神がはやる時には寺から珠数を持ち出して百万遍をやった。夏の日にはぼ決っていた。皆沢では盆の十七日にやっている。

むかしは各戸をみんなまわった。座敷で珠数をくってナムアミダブツを唱え、その後台所へひきおろそうとする者と、そうさせまいとする者とが争って、さいごはひきおろしてお茶にした。

いまでは辻だけにだしてそこで辻念仏をするだけになっている。(今倉)

念仏講

村中一戸一人、春秋の彼岸や不幸の生じたとき、その夜或は翌日の夜行なう。念仏が終ると主人がご馳走する。「何某がなくなつて何年たつので」といって頼む。もとはカネ、音頭取りが二、三人(今は鈴)いて念仏を進めた。(芦田谷)

梅原には土用念仏というのがあった。でかい珠数があり、皆丸くなくて坐り、中央に音頭とりがいて、ナムマイダ、ナムマイダと鉦をたたき、まわりの人は一斉に念仏をとなえながら珠数をまわした。今は桐生館の跡の薬師堂にしまつてある。(大門)

病人の生きるか死ぬかの時に、よけたのまれて、このナムマイダブツをした事がある。しかし大概の病人は死んだ。(大門)

天正山西蕃寺十一面観世音御詠歌 春ばるとのぼりて見は萩だら板も大悲の光がやく。(萩平)

靈魂の行方

死者の靈魂は寺へゆくと考えられている。一般に男の場合は本堂へ、女の場合は勝手へ行くという。ガタンとか、バサツとか音がする。又障

子をあげるような音のする事もある。

ある時お勝手(西方寺の)で大きな音がしたので女のしらせと思つたら、それは男であった。次の日、居館の男の人が死んだ。

今の和尚さん(西方寺さん)の来ない前、寺にいたら、障子のあく者がした。その時は起きて茶を飲んでいたら威勢のいい音がしたが翌日葬式があった。(高木ソメ氏談)

清水のGチャンのなくなった時にガラス障子に顔が見えた。トボグチの外からのぞきこんだ。(大門)

春日不動堂前の石碑について

次頁写真 ①の銘文

(向つて右側面)

天明七丁未年

普門品供養

正月二十七日

次頁写真 ②の銘文

(向つて右)

①と同じ

(左側面)

山地 兩村講中

入彦間 為諸亡靈供養

為諸亡靈供養

(左)

山地 兩村講中

入彦間 菟坊弾強

菟坊弾強

右は天明の飢饉年後の供養ではなかったかと思われる。飢饉に備えての伝承のあることも関連があらう。(郡九十九一)



寄日薬師堂前の石碑の①側面
(撮影 都九十九一)



寄日不動堂前の石碑②
(撮影 都九十九一)



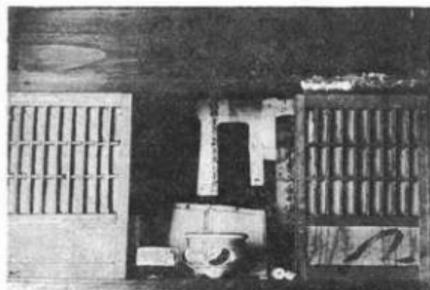
寄日薬師堂前の石碑①
(撮影 都九十九一)



湯沢 神社境内所在
弁天信仰の対象物
(撮影 今井善一郎)



念仏石 梅田一丁目梅原館跡後
これは倒れている。この文字から
みると特殊の念仏者(徳本の系統)
が入って来ているらしい。
(撮影 今井善一郎)



仏 壇 (栴沢) (撮影 関口正巳)

九 湯沢のキリスト

湯沢には明治の頃盛愛社という染織の会社があり、これがニコライ系のキリスト教を会社の社員の信仰としていたので沢山の信者があった。しかし、その会社が解散すると自らキリスト教信仰もうすれ、社主の青



クリスチャカネームの墓（湯沢）
紋章ハリスト正教のもの（撮影 今井善一郎）

木氏もこれから離れていった。しかし旧社員の中には熱烈な信仰をひそかに保持する人がいて、小人数ながらもその伝統をつたえていた。しかし年月の経過と共に信仰者が死亡していった為次第にその数を減じ、これに従い、昔教会にあり、又個人の家で大切にされてきた聖像の類も、甲から乙へと次第に移されながらも結局信者の数の減ずると共に同一カ所に集まり、今では唯一人の信者姪間タマ氏（六十二）方へ集まってしまった。

十 行屋と精進屋

行屋

金沢にある。ずっと以前の事だが二十才三十才位の人が堂に集まったり行をした。白装束で頭に白布を巻き、大きな法螺の貝を鳴らした。夏の土用に大きなボンゼンをかついで歩いて村中を廻って歩いた。夏負けした人や、カクランをしたという人を拜んだ。ボンデンで突いてやっった。

行へ入る事を行へオリルといった。大きな鍋があり、米なり、野菜なりを持ち込んだものは捨てられない。皆煮て食べてしまう。捨てられないようなものを持って行った。前が川で堰を作り、懺悔々々六根清浄と云って、人々殊に村の人が行って水をかけて貰った。一週間御籠りをした。行屋から十五町位上に権現山というのがあり、そこが信仰の神様だった。



行屋あ（金沢）と
（撮影 阿部 孝）

食べ物は大きな鍋でお粥みたいにしたのを一回一回残さず食べた。

話者（向田又藏氏七五才）は酒屋をしていたので、法螺の貝に酒を一杯入れてやると、それを飲みまわして行者の人達がのんだ。

サンゲサンゲ、六根清浄、オシメハツダイ、金剛童子、ボンゼン帝釈、サンゲサンゲ六根清浄。

といった。これはコウチの行事であ

った。食物は精進で、肉はたべない。

大きな珠数があり、昼間若い者がよると、これで念仏し、行者も加わった。

行屋には二体の不動神があつたが後に盗まれてしまった。

行をやる人は云わば素人で、きまつた行者ではなく、段々変つた。死んでも普通の人と同じに葬つた。

引田の兵さんという人が（七十年位前）越後の入り口で火渡りをした。この人は浅間様を信仰していた。火渡りといつても燃える中を渡るんじゃない。大凡黒くしてから渡る。それでも普通じゃ渡れない。日露戦争前の事だ。（以上向田氏談）

精進屋

今倉では不動様にあるが、他には大杉様の堂、はしばの薬師堂、蛇留淵の観音、石鴨の鹿島堂などである。男が一日集まつてお精進をしたと伝えているが、実際にやったことはない。（今倉）

神道裁許の書状

森嶋伊勢守に対し神道裁許の状が享保十年十月二日と、同十一年三月十一日、嘉永二年七月十四日と出たのが残っている。（皆沢）

民俗知識

はじめに

民俗知識の項目であつた内容は次のとおりである。

- 一、しつけ
- 二、民間療法
- 三、卜占・まじない
- 四、気象
- 五、数理
- 六、俗信

内容・分量、あるいは地域的に不統一である。調査者の関心のもち方、時間的な関係等によって、このような結果になつたものであり、ここにまとめられた資料そのものが、この地域の特性を示しているものではない。

これらの資料の中で、特にしつけと数理関係の資料がすくなかつた。一人前の仕事については、農業関係、山林関係とも報告が二カ所だけであつた。

比較的多く資料が得られたのは、まじない関係の資料であつた。これを大まかであるが呪的療法とその他のまじないに分けてまとめてみた。この中で、特にこの地域の特徴を示すものはみられないが、マムシ（ヘビ）に関する資料がやや多くみられたのは、山村生活の反映といえようか。このほかに、皆沢の百万遍念仏供養や、橋詰の長泉寺境内にあ

る六三大師に対する信仰が注目される。

俗信については、信仰の項目に入れないで、ここにまとめてみた。特定の神仏に対する信仰とは別の、靈異現象とか、日常生活の中での禁忌に関する事例を主にしたものを一括しておいた。その中で、禁忌関係の資料についてみると、農業に関するものは、イヌの日の禁忌にみられるように、畑作地帯としての特色を示しているといえよう。山林関係についてはわずかで、特に目立つた資料はえられなかつた。

なお、他項目とその内容上ダブっているものもあることを付記しておくことわりしておきたい。（井田安雄）

一 しつけ

子どものしつけ

むかしの子どもの教育は、父親が中心であつた。朝おきるとまず顔を洗い、そのあとご先祖さまをおがんでから両親にあいさつをする。

ここ（皆沢）は学校まで行くのが大変だったので、小学校三、四年生までは、学校へ行くだけが大事だつた。大休、小学校四年生のころから、家の手伝いをした。いそがしい家では、小学校一年生のころから、風呂をたてたり、戸のあけたをさせたりした。敷え七つ八つのころはふとんのあげさげぐらいであつた。

一番はじめの仕事は、はきそうじぐらい。女の子の場合は、十二・三歳になれば、お勝手仕事の手伝いをさせられた。

早い人は、小学校六年で学校をやめて奉公にされた。むかしは、子どもの数が七、八人というのがふつうであったので、早くから奉公に出されたものもあった。

一人前の仕事を高等小学校をやめてからとされた。

お客のお土産はまずご先祖様にそなえてから食べるようにしていた。

子どもの名前は、出世した人とかあたまのいい人の名をつけるのが例であった。(皆沢)

昔はずい分子供に無理な事もさせた。兄弟の多い家では大事(おおごと)だった。

掃除、庭、台所、掃く、ふく等、昔はランプであったから毎日その掃除があり、石油の入れかえがあった。買物の使、女は御飯たき、糸くり、くだまき、男の子は地車を曳いて山へもや、炭などの運搬に毎日やらせられた。

父への尊敬は絶対で、返し言はしていけないと云われ、食べ物は父につけてからたべた。

親の起きない中に起きる。

目上の人には必ず挨拶する。

出すぎぬ様にする。「亀の子は甲羅を見て荷を背負え」という。これは富貴をうらやむなという事である。

道具、百姓の場合は農具を大切にしておいてはならぬといわれた。(大門)

二 民間療法

(一) 民間薬

薬用植物

ヤマカブラ 家伝薬として使うが利尿剤となる。

センブリ 腹痛などのいためどめによい。
ジャタロ(さくろ) 実の皮を煎じて飲ませると、子どものヒキツケ、ムシのくすりとなる。

オトギリソウ 女のくすり

ゲンノショウコ 下り腹に効くもので、医者の薬よりよい。(清水)

民間薬

気絶の時 ヒルダマをのませる。又雪の下の葉を飲ませる。

カタラン 蓼、胡瓜の種を足のひらにはる。

腫れもの ドクダミをむしてはる。

毒ぬき 蕪の根をつかう。

大腸カタル 赤痢草(ゲンノショウコ)やセンブリをのませる。(大門)

こぐそ(蚤糞)のうち、二・三眠のころのものは高血圧の薬になった。(猿石)

(二) 呪的療法

みみだれ

道陸神さまにおねがした。なおれば、石に穴をあけて、道陸神さまにおそなえた。(皆沢)

めかいご

めかいごになったときには、箕を半分井戸にみせ、なおれば全部みせるといふ。皆沢には井戸がないので川へもって行って、このまじないをした。(皆沢)

メカゴのマジナイ

メカゴをなおすには、ミをもってきて井戸に半分見せ、「直してくればみんな見せる」といふマジナイをする。高竹のところに小さな井戸があつて、そこでやった。

また、新しいカゴをかぶるとメカゴができる、ともいふ。(石鴨)



さま 師安雄
薬師田井
の居影
中居影

薬のミノを呪文を唱えながら、目カイゴの前で結える真似をしてもやす。(大門)

眼病

西方寺の六地藏の水をつけるとなおるという。(大門)

マムシの生き目を針かたにかでほじくりだして飲むと目のわるいのいい。(清水)

中居に薬師さまがある。目の病いにいいといわれ眼病の人はこちらへおまいりをした。

イボ

イボタガエルに小便かけることができる。これはヤスグモの

クモイズを巻けばなおる。

キユウリでこすって、アマダレギワの見えない土の中へいけておくとなおる。(石鴨)

鳳仙寺にエボ地藏という実際は薬師の石像がある。山芋の粒を珠数にしてあげるとエボがなおる。昔、エボ地藏に小便をかけたものがあつたが、その人は顔中エボだらけになつたという。(大門)

(ヘビのぬけがらで、人の見ていないところで、エボ(イボ)をこするとおちる。(清水)

ね小便

馬という字を書いてさかさにしてねている子のねどこの下に入れる。

(皆沢)

こうで

障子のめどから手を出して、白と黒のぬい糸で、その家の相続人にし

ばつてもらう。なおれば、同じように障子のめどから手を出して、ありがとうといって、糸をほどいてもらう。(皆沢)

しびれ

しびれたときには、ひたいに三回つばをつければなおるという。(皆沢)

やけどの治療

ウメズとウドン粉をこねてつける。ウメズだけぬってもよい。

じやがいをすりおろしてつけるのもよい。

イボガエルの卵をびんに入れておいてくさらせ、とけたのをつけると直る。

ムカゼ(むかで)の油もよくきく。(清水)

火もどし

村にやけどをしたとき火もどしをしてくれる人がいるが、唱えごととは他人には教えない。何か小さな声で口の中で唱えごとをいながらやけどあとを吹いてくれるが、こうしてもらうと熱いのが熱くなくなつてくる。いたみがとれた。そこへ何か薬をぬってくれた。(清水)

カクラン

道ろく神さんにオガシヨをかける。デツケエ声でやれば直るというので大声でやって家へ帰ったら本当に直つちやつた。

直るとズキンをつくつてかえす。(石鴨)

菅笠をかぶせて水をかける。(大門)

アツケ(カタラン)にかかったときは、すげ笠を病人にかぶせ、みのを着せて、ひしゃくで頭から水をかける。本当のあつけなら、すげ笠が水を通すという。それでもなおらなければカタランではないという。

(皆沢)

バヒフ

バヒフ(ジフテリア)のまじないには馬馬と書いてさかさにはる。バヒフにかからないためのまじないは色紙に馬という字を三つ書き

て、さかきにしてとぶ口のところにほる。あるいは、その紙をねている子のねこの下に入れる。(皆沢)

パヒフはジフテリヤのことで、紙に馬馬と書いて、門口や道に張出すとパヒフがうつらない。(今昔)

風邪

風邪の時は、荒神様のお後を天神町三丁目の前原重夫さんの家から貰って来て、豆を半紙に包んで三本辻へサン俵の上のせておいてくる。その時うしろを向くと風邪がついて来るという。(大門)

かぜの神さまをほらい出すといって、三文(むかしで三銭)と、大豆をいくつぶでもいって、それを紙につつんでおひねりにして、家のものが体をなせてから三本辻へおいておく。それを拾った人が、あとの風邪をひくという。(皆沢)

流行りカゼ

大正のことがカゼが流行したとき、ミコシをかついでカゼノカミ送りをした。シモの村境からかついで練り歩き、鉄砲のある家では空鉄砲をうちながら歩き、上藤生の奥の方の人家から離れたところの勢多東へ行く道が分れるところまで行っておいた。だからその土地はいまもよび名をカゼノカミオトリという。(石鶴)

(鍋足)

かぜの神送り

年越の晩に年だけ豆を白紙に包み、一、二銭(今は一、二円)の銭を入れて、三本辻におく。豆を入れないで、銭だけのこともある。(居館)

疱瘡おくり

植え疱瘡の時に、赤い幣束とごちそうをサン俵の上のせて、三本辻へおく。(居館)

オカマサマ

お正月さまの松かざりをつくるときにオカマサマをつくる。これはつくるときにはしごをかけて前年よりワッカを小さくしてゆくもので、年々小さくなってゆき、毎年のものをとっておき、重ねてゆくもので、今年の方が大きい方がカカア天下という。オカマサマのハナは他のものを片づけなくてもこだけとはらずにおき、子どもが魚の骨をのどにひっかけたときには、このハナでなぞてやるとよい。(清水)

うるしかせ

妊娠中の人

妊娠中の人が、火事を見たときに体をなざると、そこに赤いあざができるという。また、死人をみたときには青いあざができるという。これをふせぐためには、他人に知られないように、ふところに鏡を入れておくという。(皆沢)

安産

先祖の位はいをくるんできて、さんしの背中をなぞる。これは、さんしに気づかれぬようにする。どうした難儀か、もんでやるぞといながら、「ご先祖さんすみません、どうぞ産者にこの世に出してもらいたい、おねがいします。」と五回、心の中でご先祖さんにおねがいする。こうして、十五分後には必ずうまれるという。(皆沢)

あとばらがやめるとき

お産のあと、はらが病めるときには、さんし(産婦)が気づかないように、さんしの寝床の下にもさしを入れるといいという。(皆沢)

弘法の水

皆沢の弘法の池から水をくんできてのめば、お乳の出ない人も、出るようになるという。(皆沢)

三 卜占、まじない

(一) うらない

夢

夢はサカサにかえるという。

マサユメ、考えてもいないことを夢にみる。

マクラユメ、苦勞して神経を使っているときみる夢。

クサユメ、疲れたときにみる夢。(石鴨)

とぶ夢はいいという。

大水とか水におぼれる夢はわるい。

火のもえあがる夢はいい。

金をひろった夢はわるい。

きられた夢をみると、金が入るといふ。

死んだ父親の夢は、病気のしらせという。

夜あけの夢はマサユメという。

悪い夢をみたときは、十時前に人にはなせ、夢がきれるという。いい

夢は人にはなすなという。

へびの夢

へびの夢はいい夢だ(清水)

春へびの夢をみると、その年にふた月たないうちに金もうけができるという。(皆沢)

朝茶

茶

朝茶をのむとその日の難をのがれるという。(皆沢)

茶

茶柱がたつと縁起がいいという(皆沢)

一杯茶

一杯ものはイヌでもまぬとって、お茶は二杯のむものという。

(皆沢)

ホタル

ホタルの多い年は伝染病が多いのでいやがる。この辺はホタルの多い

ところであるが、年によって多少のちがいがあつたが、多い年というの

は気象が伝染病によい条件があるからだつたかも知れない。(石鴨)

半夏むし

半夏むしというのがある。その虫は半夏になると尾を上にしてはう。

虫でさえこれだから(体を上にして休んでいるのだから)まきものをし

てもむだという。

半夏こしてまくんじや、のうくるけえってねてろといつた。これは、

まきしんをおくれたことをいつたことば。(皆沢)

からすなき

カア、カア、カアとないてひと休みしてカア、カアと二回なく

のをシニガラスといつて、人の死ぬ前兆だという。

うるさくなく場合は、なにかがおこる前兆だという。

あつはつはつはとなくときは、わらいがらすといつて、いいことがあ

るといふ。(皆沢)

くものうらない

朝ぐもは縁起がよいといつて、ふところに入れる。夜ぐもは縁起がわ

るいぬすつとぐもだからとて、殺してしまえという。(皆沢)

へ

へびが右から左へ横ぎると、先へ行って目上の人に叱られるという。

左から右へ横ぎると先方へ行っても用事がたりないという。(皆沢)

は

はな

出かけにはなながきれると、縁に来て一、二年の若い嫁は夫にきらわ

れるという。だから、よそへ出かけるときには、はなのおきれない丈夫

なものをはいていけという。(皆沢)

ホクロ

首にある人は着るものに困らない。

ホッペタにあるのはホッペタダイジンという。

目の下にあるのは泣きぼくろ。

口のところにあるのは食いしんぼうのしるし。

上藤生のおばあさんは、何かが灯明の油をなめていて油が焼きついて、それがホタロになって生まれた人についたと、見てもらう人にいわれたという。(清水)

金がたまる話

マムシが玉になったのを見るとウンがつき。金がたまる。それをとっちゃあいけないのだという。

藤生勇さんは、山の杉の下刈りに行き、一本の杉の木の枝の葉に一匹のマムシがたかかっていて、はねるようになっていると思つて遠くから石の上の上つてみたら、その木の足元にも何匹か見えて十四くらいマムシがからまり合ひ、その後金がたまった。

ある人は、魚つりに行ったところ川の石の上にマムシが玉になって、それがみんな頭をもちやけていて、まるで宝珠のように見えていた。これを見てからシンシヨウがでかくなり、近いうちに今度家を建てかえるという。(清水)

養蚕のうらない

この地の養蚕は、シモの方から桑を買つてやった人も多いので初午の日数によつて桑の高い安いをうらなうことばがあった。

正月の初午が十二日になるが、正月の一日は桑の葉一枚ずつにあたり、正月十二日ところが午の日で、二月の初午が十日前なら二月の一日は葉一匹に相当するので桑が安いといい、正月の午が早くて二月の初午が十日すぎになると桑が少なく葉が多いから桑のねだんが高くなるという。(石鴨)

(二) まじない

虫封じ

北小学校の西、岡公園の下に寂光院というのがあって、虫封じの呪いをしてくれた。子供の夜泣きや、いじいじしている時、子供をつれてゆくと和尚さんが本堂の真中に坐らせておがんでくれると、なおる。何かお札様のものまんに虫という字を書いた物をくれる。

川内の小倉に東禅寺というお寺があり、そこでも虫封じを出す。本尊様におがんで、血脈位の包をくれる。それを家の中心の柱に打ちつけておき、虫が起きると釘をしめるとなおる。

居館の小島みつさんは虫の子供が来ると、その手を洗い、虫という字を書き咒文を唱える。その手の乾き際に、白い虫が爪の毛穴から出て来る。目にみえる。(居館)

やくびょうよけ

戦争前は、春と秋のおまつりのときに、村境にしめなわをはり、わらじをつるした。やくびょうがみがたまげてちかよれないようにという意味からであった。(中居・猿石)

悪病神送り

悪病がはやると、村中で出て、ワニグチのような鏡をたたいて、村境まで送り出した。(清水)

八丁注連

夏の初めに流行病のはやらぬように、八丁注連を作り、村の入口にはる。(居館)



安産のお守にある梅の葉を出す梅 (撮影 清水 義男)

楠

一丁目の日枝神社に大きな楠が数本ある。楠の北限(?)など云われている。その葉が安産の呪になるという。(大門)

念仏をする時

葬式の出た後やる。昔は年会の前の晩にやった。

七日ざらし

病人の着ていた物を、七日間醬油の空樽などに入れて水につけた後、家の背後の目につかぬ所にかけておく。これは願はたしの意ともいふ。

不淨送り

三本辻にはいろいろの物を送り出す。死者のあった時、家の中を掃き出して、其の後枕団子を作るが、その灰をとっておいて、サン俵の上に灰と、団子たいた時のシヤモジと、御幣束を立てて三本辻へ出す。(居館)

百万遍念仏

皆沢では、毎年八月十七日に、百万遍念仏供養をおこなっている。この日は、盆がらで、各家から主人が一人ずつ出でおこなった。

昭和十九年ごろまでは、各家をまわっていた。この日各家では、一部屋のたみをあけて板の間としておいた。家の中を掃除して、ごちそう(すいか、につけ、菓子などをちやぶだいの上にわにしておいた)をつくって、お茶の用意をしておいた。

大きな珠数があって、それをもつ人、太鼓をたたく人二人、かねをたたく人一人がいて、太鼓をたたくもの(だれでもかまわない)が音頭をとった。家の中に入ると、まずお茶をごちそうになり、そのあと、「なむあみだんぶつ」と唱えながら珠数をまわし、「そら」とかけこえをかけてかねと太鼓をたたいた。一軒の家に大体三十分ぐらいいいた。はじめはおとなしく、しまいはあはれたという。

まわる順序は、村のかみのはずれから、しものはずれまで。朝の七時ごろから夜の七時ごろまで、日いっぱいはいしていった。

いへごみまわるのは、いそがしいし、不経済だというので、村の中を上・中・中つかわと三つに分けて、それぞれ組の中に当番(お茶当番)をきめて、その家で念仏をする形にした。この形で三年か四年やって、そのあとは辻念仏の形をとるようになった。村の中を三分して、次の場所で念仏をやっている。

○かみぐみのはじ(木戸場)

○なみくみのはじ(おくのはずれ)

○庚申さまのわかされ(三本辻)

あつまつて来た子どもたちに、お菓子をやっておしまいにしている。

百万遍念仏は、盆がらにしている、魔よけ、はやり病気がはやらないようにというのでやっている。

むかしは、飲まず食わずの大病人、よくもならず、死なずという大病人がいる場合には、その病人を座敷の真中にねかしておいて、身内のものや、近所のものもあつまつて、そのまわりで百万遍念仏をとなえた。百万遍念仏を申しきると同時に息をひきとつたものもあつたという。珠数には一つのふさがついていて、これがくるくるまわる場合には、病人は丈夫になるといい、たすかない病人の場合には、ふさが身内のものところへくるとひかかってまわりにくくなるといわれている。

珠数は、むかしはがんどろく小屋においたが、今は神社におさめてある。(皆沢)

お百度まいり

病人が医者にもみはなされて、あぶないという時に、親戚とか近所の人たちが出て、神社の鳥居から拝殿までの間を百回、行ったり来たりして、お百度をふんだ。べつにたのまれなくとも、これは大変という時に昼間でも、夜でも出た。場合によっては、社のまわりを百回まわったこともあつた。右まわりである。(皆沢)

六三大師

現在は長泉寺境内にまつられているが、もとは作樂にあつた。現在地



士大六三の六三のサクアミ
六三除けに酒を供える (橋詰)
(撮影 関口正巳)

かけるものは、なおして
くれれば酒をあげますと
いっておがみ、お願生は
たしに竹筒に酒を入れて
もつてきたり、絵馬をあ
げたりする。
三月二十一日が、ご縁
日、本堂の前で長泉寺の
和尚さんが、般若経のご
祈禱をする。
六三よけをたのみにく
る人には、木版ずりのお
札を出す。
医者にはなされたよ



長泉寺の六三大士 六三除
けに酒を供える (橋詰)
(撮影 関口正巳)

にうつした年代は不詳。
むかし、酒の好きな和尚さんがいて、酒をかけてくれればどんな難病
でもなおしてやると遺言してなくなったという。
六三除けの霊験があるとて、この近からおまいりにくる。お願生を

うな場合におまいりにくる。

作網の六三さまは、作網のコーチの人十一軒でおまつりしている。
(橋詰)

四丁目の長泉寺の境内に六算除大師があり、祈禱師が種々の病気をな
おした。古い和尚が、わしが死んだ後、酒をあげればなおしてやると
いったという。(大門)

六三は「一、三足、四腹、六胸、五、七が肩、九デッペン」という。
六三様は長泉寺の境内の小さいお堂にある。昔はさかたつたものである。

オガンシヨをかけ、なおると線香とお酒を持ってお札参りに行く。六三
様は酒好きであるといつて、竹筒一對を紅白の水引きでゆわえて供え
る。(浅部)

庚申塔

浅部の二丁目のお宮の前に庚申塔がある。米一升、水一升供えて祈願
すると病気がなおる。

近衛前久に関する古い伝えがあり、地頭も乗馬とがめをされる。(大
門)

ガンカケ

ここの人だが、奥さんの産が重かったのでここから荒砥の産泰さまま
でハダシ参りをした人がいる。桐生の光明寺にもあるが、荒砥の産泰さ
まにゆくと、ひしゃくの底をぬいて上げる。軽くできたお札というわけ
である。

初子のときは不安なのでやる事が多く、主人が兵隊に行つて頼る人
がないときにオガンシヨをかけたという。(清水)

火難よけ

大正のはじめごろまでは、正月一日に、屋根の上へ手おけに水をすこ
し入れてあがつて、ぐしへ水をまいた。一年中の火難よけのためであつ
た。(皆沢)

近所に火事があるとき、お稲荷さまを焼かないようにと、お稲荷さま

に水をかける。(中居・猿石)

ねずみたいじ

ねずみたいじにはカモサマのへビを借りてくる。借りてくるとへビが姿を見せるといふ。だから借りて来たときは、へビは殺すわけにはいかないので、殺せぬえ、追えぬえからだんだん閑々しくなつてきて、だんだん家の中に入つてくる。(清水)

蜂をとるまじない

右手の親指と薬指と小指の先を押さえ、人さし指と中指とで蜂をとる。その時の呪文

イチンバイバイ、イチンバイバイ、イチンバイバイと三回となえ、右手をプツと吹きつけながら顔の前を三回まわす。また、吹かずに三回まわしてつかまえる。(居館)

蛙の卵

蛙の卵は、これを乾かして、風上の方からふらせると、相手の目がくらむという。

卵から生えたオタマジャクシのことはカエロンゴといい、オタマジャクシとはいわぬ。(清水)

カワバタガミサマ

ミミズにシヨンベンかけるとオチンコがはれる。ところが、「カワバタガミサマゴメンナサイ」といってやると平気だった。

むかしは杉の苗木を用へひやしておいたので、水が増してくると上げなければならず、そのときはいそがしいから小便もたれながしてやらねばならず「カワバタガミサマゴメンナサイ」といってやった。(石鴨)

へ

神社のまわりにいるへビは、神のお使いだからとらない。

桑原庵太郎さんの家では、白いへビがでてはカギ竹に上つてしかたないので、へビ地蔵をつくり、墓地に上げたら出なくなつた。へビがからんだ地蔵さんがいまでもあるという。

青大将 青大将の尻つぼつ切れは家の主だといつて捕らない。たしかに風がいなくなる。

しま蛇 しま蛇は一番強い蛇で、まむしを呑んでしまうという。(橋詰)

へビのマジナイ

へビを殺したとき、何もしないでただ埋けるとタタルので、「パンゲバケルトカジャノムスコニタノンデ、ナタトカマデプツキルゾ」といつてから埋めると、さつぱりしてタタラナイという。(石鴨)

まむしにあわなまじない

家を出るとき唱えごと

わがいくさきに にしまだらの虫あらば やまとひめ(大蛇のこと)に おうて語らん あぶらおんけんそわか(三べんとなえてふつと前をふいて行けばいいという)。

山へ行くとき、先祖さまへ二本ずつ線香をあげて行くものもある。

(皆沢)

へビをよけるには線香をたてる。(居館)

カチクルミ

兵隊にゆくときは、カチグリとクルミをお守りにもつてゆく。カチグリはその名のとおり 勝ち栗であり、クルミは、来る身(帰る身)で、勝ちて来る身、すなわち無事の帰還をねがう気持ちに結びついたものであった。(石鴨)

シオダチ、五穀ダチ

生形豊二郎さんのおばあさんは、主人が日清日露の両戦役に出征したので、シオダチ、五穀断ちをしたという。シオダチは、五日目ごとにやるもので、五穀だちも同じことで、米、麦、アワ、ヒエ、キビを五日ごとにとどれかたらなかつたという。日清戦争のときには、もし主人が帰つて来ないときは、籍も入っていないので追い出されるかも知れないというので、より熱心によつたのだという。(津久原)

はずかしがりや

よそへ行ってはずかしがりやの子どもは、ぞうきんで顔をふくとなおる。(中居・猿石)

うなされること

胸に手をあてていてうなされる時は、手をとってやるとなおる。これは、指の先はへびのあたま、胸がカエルであると考えられているから。

(皆沢)

初もの

初ものをたべると七十五日生きのびるといふ。

初もぎりした野菜・果物などは、仏さまにお供えする。キュウリの場合は、天王さまと仏さまにあげる。(皆沢)

失せもの

いろいろのかぎつるしをしばって、三日のうちにはみつつけてほしいとお願いをする。(皆沢)

四 気 象

天気のうちらい

ごはんをたいて、天気のとときは真中がふくらする。天気が悪いときは、真中がへっこむ。(皆沢)

春は雨が晴れていれば上天気、秋は北が晴れていれば上天気という。これを春雨に秋北という。(皆沢)

月が赤くなっているときは晴、かさをかぶっているときは雨になる前ぶれという。

朝やけは降り、夕やけは晴。(皆沢)

天気のいい年はアブが多い。(石鴨)

雨の前ぶれ

北に雲が出ると雨になる。雨がえるがなくなると雨になる。

東がくもれば雨、西がくもれば風という。

へびが木にのぼったり、道のふちなどに出ると雨が降るといふ。家の土台石(ちちょうの石)がしめると、翌日は雨という。(皆沢)

風の前ぶれ

足のあかざれがいたむと風になるという。なべずみがちかちかする(なべ火事という)と風になる。いろいろの中でつむじがまくと風になる。(皆沢)

あらしの前ぶれ

アリのすじがつかぬがる(アリの行列の出来ること。これを先祖まいるという)とあらしがくるといふ。

岩ツバメが沢山でくると、あらしがくるといふ。山へ行っている人が、ハチの巣が木の下の方についているとあらしがくるといふ、高いところがあれば大丈夫という。(皆沢)

かみなりよけ

雷をよけるには、「桑原、桑原、桑原、遠くの桑原」ととなえる。(居館)

かみなりが鳴っているとき、「くわばら、くわばら」と唱えごとをする。また、仏壇に線香をあげる。

としりの豆をとっておいて、初かみなりのときに家人に食べさせれば、かみなりよけになるといふ。落雷のあった場合には下水をかけろといふ。(皆沢)

雷がひどく鳴る時には「遠くの桑原、遠くの桑原」と唱え、線香を縁側にあげる。魔除けの呪いである。(橋詰)

カマド神のお松を下げないでおく家もある。初雷の時にもやすとよい。(皆沢)

かみなりのこと

かみなりの大きいのがなるときには、お線香をあげて、かやの中へ入っていた。

かみなりの多い年は、豊作だという。

初雷のとき、としりの豆を食べると、かみなりよけになるといふ。

(井戸谷戸)

赤城の方、石のくぼから来る雷は早くて、表東三ばかりの間に合
わぬ。うんまけるほど降る。日光からくるのは早くて、音ばかりで
余り降らない。(猿石)

この土地のかみなりは二カ所からくる。赤城からくるのはアカギサン
バといい、表を三把ほど束ねる間くらい早くやってくるもので、もう一
方の中禅寺の方からくるのはおそく、ほとんどがそれてしまつて降らな
い。

かみなりは山の木に落ちるので谷間の家には絶対に落ちることはない
から心配ない。

ちよつと昔の人はオカンダチ、オカンダチサマといい、オカンダチが
オチルという。(津久原)

風をきる

大風が吹くと鎌を結えて風の向きによつて、北風の時は家の北、南風
の時は家の南へ立てる。風をきるといふ。(大門)

大風のとき

鎌の刃を上に向けてさおの先にしばつて、庭先の風の強いところに立
ておく。(皆沢)

地震のときは、「万歳菜、万歳菜、万歳菜」といふ。(居館)

ひょうのとき

ひょうが降るときは、オカマサマのハナ、松に火をつけてトボウから
庭に出すと、ひょうが向うへよけてゆく。唱えごとはない。

藤生イツクでは松がないのでハナを使うが、生形は両方あるから両方
使う。オカマサマのものなら何でもいいのだらう。(石鴨)

赤城神社、榛名神社に、毎年八十八夜前に、三月三日天祭の時決めた
二名が代参に行き、雹乱よけのお札を受けて来る。宿は伊香保の石坂恵

重郎氏の家と決まつていた。道すじは、大間々、みよ沢、赤城、伊香
保、榛名が普通であった。お札は、桑の木に結びつけるとその木が枯れ
るほどききめがあった。お札は大正三年頃赤城神社榛名神社ともに一枚
三円であった。(大門)

地震のうらな

三つ四つ雨に、八つひでり、五七が雨に、九はやまい。

これは、三つ四つの時刻に地震があると、その日のうちに雨になると
いうように、それぞれの時刻に地震があれば、雨とか、病気になるとい
うこと。(皆沢)

雨乞

猿石上組の弁天さまは、上組のイタサバというところ、桐生川の岩の
上の石宮である。水不足のときに、この弁天さまに水をかけると雨がふ
るといふ。長い間雨が降らない場合に、村の代表(五・六名)が、赤城
山まで雨乞いに行った。赤城神社の神主におがんでもらつて、竹筒に水
をいれてもつて来て、弁天さまにかけた。竹筒はあとでかえしに行つ
た(神主へのお札をもつて)、こうすると三日以内に必ず雨がふつたと
いふ。(猿石)

大正十三年は一カ月もつづけて雨乞をした。天神様の境内に集り鐘と
太鼓をたたいて、火をやし雨雲を呼んだ。「あれかかる雨雲、これか
かる雨ぐも、雨ふれんどごどん」と寝ずにさわいだ。

大正十五年には荒神山で行なつたが三日も降つた。一粒でも降れば
やめることになつてた。但し土用になつてからは雨乞をするものでな
いといわれていた。(居館)

春先の干ばつとき、根本さんに雨乞いにゆく。部落中から一戸一人
総出で出かけるもので、大きく農業をしているわけでもないの、サク
バほどの大ききはないが、水を浴びてから拝むといふことである。

(清水)

三十年位前迄は天気がつづくとも雨乞いをした。樽を太鼓にして叩いて

まわった。荒神山や雷電山へ行った。

アールの雨雲 雨降れ

ドンドコドン ジャンジャカジャン

昔の雨乞は赤城山から水を買って来て途中で止ってはならない事になつて居り、まつすぐ帰つて来た。

雨がふり過ぎるとその雨水を赤城山へ返しに行った。(大門)

石尊様(養村)や板倉の雷電様までお参りに行く。たしか大正十三年だったと思うが、雷電様まで一升ビンで水をもらいに行き、その水を田圃にまいたが雨が降らなかつた。土地の人がさわぎだし、ホチフチをかえることになつた。かえると降るといわれている。村中総出でやつた。鉦や太鼓で騒ぎながらやつた。四分ほどかえたら降り始めた。(高沢)

弘法の池

皆沢の森島弥佐市さんのはたけの中に湧水があり、一坪たらずの小さな池になつている。これを弘法さまの池といい、ひでりがつづくときにこの中へ、石をなげこんだり、かきまわしたりすると雨がふるといわれている。(皆沢)

五 数 理

(一) 一人前

一人前の基準

年令でいえば、十五歳から六十二歳のころまでを一人前の仕事のできるものとした。終りの年令については、あまりきびしくはいわなかつた。村仕事(道ぼんとか道草刈りなど)については、十五歳以前のものは出さないようにしていた。

女子の場合は、男子と同じ仕事ができるとはしていなかつた。

杉のうえつけ―場所によつてちがうが、一日二百本から二百五十本ぐらいが一人前。

山の下刈りは一日一反歩

はたけうないは、強い人で一日一反歩、ふつうは五畝ぐらい。

田植は一日五畝が一人前。

妻ぶちは、一日でさなの高さまで実がつけば一人前とされた。

炭焼きは、木をきつたり、焼いたりして四貫匁のものを一日に四俵焼ければ一人前。

木をきる場合は、一日できつた木をつみかさねて長さ六尺、高さ三尺のたなができれば一人前。

はたおりは、三丈ものを二日でおれば一人前。一日に二丈おれる人は腕の強い人。

半天半日はとけさま。ひとえもの一日赤ん坊の産着という。これは、

これだけの日数では不十分だということであらわしている。(皆沢)

炭やきの場合は、むかしは十三・四歳から山仕事をやらされたが、

五・六年たつてから一人前の仕事ができるとされた。炭やきがひとりできて、一人前といわれた。

一日に四俵やければうでの強い方とされた。(猿石)

(二) 単 位

おや指と中指をひろげた長さ大体五寸とした。

なわは、両手を左右一杯にひらいた長さが一ひろ、二十ひろで一ぼ

一駄は物によつてちがう。草・麦・かやの場合は、三尺三寸のなわで

まるいたものを一把とし、それを六把で一駄という。桑の場合、もぎぐ

わは四十貫で一駄、木ぐわは三十五貫で一駄とする。米俵は二俵、炭俵

は十二俵で一駄。

一かというのは、馬にびくを二つつけた場合にいう。堆肥などをつけ

る。(皆沢)

はたけの広さ

はたけの広さをあらわすのに、この辺では○升まきといった。一升まきというのが大体一畝のこと。(皆沢)

六 俗 信

(一) 憑霊・靈異現象

死への途中(死からの生還)

村の人が病気にかかり重くなった時、その人の話に、暗い処を長い道中歩いた。ようやく明るくなったら門があり、お経の声のようなものが聞えて来た。門をくぐろうとしたら鴉が一杯いた。

気がついて眼がさめたら何時の間にか気を失っていた。(大門)

生まれかわり

桐生の六丁目のギオン寺のズベ(こじき)がやけどで死んだとき、おしょうさんが「今度はいいところへ生まれかえって来な」といって手に字を書いてやったら、それが二丁目の横町カキアゲの酒屋の孫に男の子として生まれってきた。字は消そうとしても消えず、養子にやるとかどうとかいってさわざもあつたが、その後はどうなつたか知らない。墓の土をとつて来てこすると字が消えるという。昭和の初のことだった。(清水)

亡くなった子供が白痴で、可愛想だという親心から、又次の世には立派な人間になって長命するようになって、子供の背中に文字を書いた。その子が書上へ生れかわつた。

Dという馬鹿だが人には嫌われず、幾つだといえはいつも十と答えた。しかし四国の金毘羅の祭とか、出雲大社のお祭りの日を知つていて。小谷戸のMという家の子であった。(大門)

口 寄 世

他所から定期的に来た。仏がのりうつつて喋る。高木氏のイトコで茨城から来ていた人が、母が出て来て「死んでも何のしるしもねえ」といつたので、手紙をやつてみたら、「その家では位牌も何も(大水か何かで)流して何もないと返事だったという。(大門)

女。箱を持って来て、それを前に飾っておいてうらなう。この口寄せ女に、迷っているようなことをいろいろ聞く。死んだ人のことを聞くと、いろいろ答えて、草葉の陰で迷っているなどといった。口寄せ女は生きている人のことは青葉を用い、死んだ人のことはわらの穂を使って、答えていた。(秋平)

人 魂

子供の頃人魂を見た。高木さんの墓(一丁目西方寺の近く)のそばで赤い玉が六尺位の青い尾をひいていた。(小堀肇作氏談)

岡平のOさんの死んだ時は沢山の人が人魂を見た。(大門)

カネダマ

ヒトダマに似ているが、赤い色で、前から向つて来るときには胸をひらいてふところへ入れちやええ、運がいいという。イチマツサンがこれに出あつたときは両手をあげたぐれえ大きかつたという、胸に入つたときはジャンと音がしたというが、本当はおっかねえので胸はあけなかつたという。見ただけだったのが本当だそうだ。(清水)

入 道

二丁目入道窪という処がある。そこは大入道の出た処で、今九十位の人が二十五、六歳の頃見た話で、一人や二人でなく沢山の人が見た。

火 柱

湯沢の元盛愛社のあつた処に火柱の立つた事があるという。(大門)

ネギ 仏

一丁目青木清氏の持つ柿の処にあつた。これはイタズラをすると祟るといわれる仏様だった。

カンク口稲荷

カンちゃんが生れる前に稲荷様の夢を見たので建てたという。昔は石塚の上にあつたが今は小さくなつた。紙の旗などが上げられていた。初午の時に御参りがあつた。(大門)

山の神のお神楽

炭やきをしていて都合で夜やいたので、ちつちえなべをもつて行ってまんまを煮ていたところ、いっしょに行つていた子どもが明るくなつた明るくなつたといつているのでみたところ、でっかいのがとんだので、何か来べえと思つていたらその太鼓を叩いたり笛を吹いたりしたというが、山の神がオカグラあげたのだといひ、かげの声しか聞えないのだが、ムジナにだまされたのだらう。昔はムジナの方がりこつた。(清水)

(清水)

ツキモノ

オサキツキというの話だけは聞いたことがある。

ムジナツタカリは、明治時代までの話ではよく出てくる。

キツネツキになつたときは、秩父の三峠からオイヌを借りて来て、願をかけたならそれがきつかけでたちまちなおつた。それと同時に縁の下の板に毛がついてた。これは、つかれた本人だけでなく、そのつれあひの人も信じていた話である。(石鴨)

狐つきやムジナつきというの昔あつた。(大門)

ヤマイヌ

ヤイヌはミツミネサマのお使いで、山でミツミネサマを見た人がいるという。二匹いて、あつちへ行けあつちへ行けといつたら見えなくなつたという。ミツミネサマは一人目をはなすと見えなくなつちやうものだといひ。

兵隊じぶんお参りに行くと、塩だとか米を入れとく箱をかじつちやつていたが、清水の下のサンパンのところに岩かげで見た人もいるが、ミツミネサマは、オイヌサマだ。(清水)

ムジナ

ムジナがたかつた、ムジナがたかつたといふので、秩父へオイヌサマを借りに行つたといふ。そのときは肉も何も食わず、途中どこにも寄らずに帰つて来たといふ。いまいきをしたよといつたら、オーツといふのであるたけだつたといふが、そうしたら起きたといふ。(清水)

たまには名人の人がつて、えり巻をつくつたようで、そういうのは見るが最近は見ることがない。(石鴨)

ひき目

青木一家は盛愛社という染織の会社をしていたが、それを解散して三家に分れた。その時熊太郎氏の家でも別の工場をやる事になり、各々希望の職工を引き取つた。新しい工場へ家移りの晩に皆臥こんでしまつた。それは稲荷の神木を使つたので、番頭も機織も一晩にキツネがついた様になつた。しかし主人は何ともならず、一週間ヒキ目をした。そして一人でも欠ければこの家はつぶしてしまうといつた。

その後熊太郎氏は名古屋の宿屋で死んだ。糸買いにいって病氣になつたといふ。流行病であつたので、宿屋に迷惑かけたといつて全部建てかえてやつた。(一説に京都に織物の視察に行つた途中とも云う)。(青木タケ氏談)

オコジ、オコジ、オサキはこの辺にはいない。夜、茶碗をたたいてはいけない。何か来るといふが、何が来るか不明。(橋詰)

(一) 禁忌

農業関係

イヌの日に麦をまくな。犬にちらかされて、生えないといひ。

麦まきの時期は、カズの木(これでむかしは桐生紙をつくつた)の葉がもとの方からおちて、しんばが三つになつたらまけといつた。こうすれば、ただまきつばなしでも、十二日目にははえるといつた。(井戸谷戸)

麦まきはイヌの日はしない。この理由はわからない。(中居・猿石)
イヌの日に麦をまくな。食わないものができる。(今倉)

あるとき、六郎がわきぐにから妻のたねをもつて来た。シナの方から
麦穂が珍しいというので足のうらとかにつねもつて来たともいう。そ
のとき、その家のイヌがほえた。その家の主人が出て来てあやしんで、
その六郎をしらべた。ところが、どこをしらべてもあやししいことはなかつ
た。その主人は、イヌが、今までそんなき方をしたのでない。今日
にかぎって、そんなき方をしたのでおこつて、そのイヌを殺し
てしまった。

妻はそんなわけで日本にふえたが殺されたイヌの供養にというので、
イヌの日には妻のたねまきをしないのだという。この日まくと食わない
ものが出るという。(皆沢)

タツの日には田植をしない。(中居・猿石)

半夏の日には田植をしない。半夏の日に、半夏坊主が田のくろで倒れ
たからだという。(皆沢)

まきのこしのさくやひこさく(途中でできたさく)はつくるもので
ないという。なにかわるいことがあるという。(皆沢)

ひこさくをつくと、くわもないものができるといつてきらう。(中
居・猿石)

北さくはさくするものでない、子どもが北むきになって、友だちと背中
あわせになって、出世できないという。(皆沢)

三月半ばは食べないものができるといつて、旧の三月には牛ぼうの
種まきをしない。(皆沢・中居・猿石)

北ゴボウはつくるな、食わない人(死人)ができる。(今倉)

禁忌作物

井戸谷戸の辺では、麻をつくつてはならないという。たとえ自然に生

えたのもいけないという。麻をつくると、その家にまがさすという。

(橋詰)

皆沢には榎山姓の家が五軒あるが、榎山姓の家では、ハウセンカとア
サガオをつくつてはならないという。つくと魔がさすといわれている。
(皆沢)

皆沢の氏神さまは八幡さまである。そのために白い犬を飼つてはなら
ないといわれている。それには次のようないふたえがある。

八幡さまは足利忠綱という人である。あるとき、忠綱の主人が出陣す
ることになった。主人は留守を忠綱にたのんで行った。その主人が帰つ
てみると奥方のおながが大きくなつて来た。これは、足利の織姫神社の
近くにある井戸の水を奥方がのんだところ、ひるをのみこんでちようま
んになってしまったためである。ところが主人はこれを誤解して、忠綱
が奥方に不義をしたというので主人の怒りをうけた。忠綱はにげた。主
人からは忠綱を討てという命令が出され、追手がさしむけられた。一
方奥方の腹をさいてみたところ、子どもでなくひるができてきた。これは
大変、忠綱をうちくびにしてはいけないというので、主人は家米をつか
わした。しかし、その前に忠綱は岩田というところであつた。忠綱は
白い犬にみつけどだされて、殺されてしまったのである。

忠綱は、弓とりの名人であつたのでふつうの矢ではだめであつた。そ
こでくだ矢を放つて忠綱をうちとつたという。

皆沢ではそのために、忠綱に忠義だとして、白い犬と白い馬(追手が
のつてきた馬が白い馬だったので)を飼わないという。

忠綱をまつたのが、皆沢の八幡さまである。(皆沢)

皆沢の市之瀬家と榎山家(両家はイツケ)では、暮のせちもちをつか
ない。その理由としては、つぎのような話がある。これは、前記の
八幡さまに関係していることである。

暮でせちもちをついていたときに、八幡さま(忠綱)が主人に追われ

てきて同家に立ちより、金のつばをくれて、追手には自分の来たことを話さないでくれといった。そのあと、追手がきて小判をくれて忠綱のことをきいた。ところが八幡さまからは口どめされていて口ではいえないので、もつていたきねで、忠綱の逃げて行った方向をおしえてやった。そのため忠綱は打ち首になってしまったというので、八幡さまに申訳ないとして、それ以後両家では、せちもちをつかないことになったという。

年があげればついていいといわれているが、十三日まではずかかないという。もらってたべるのはさしつかえないとのこと。(皆沢)

養蚕の禁忌

わらをはたいてはいけない。

ヨメゴといってネズミというな。

油を使つてはいけない。使うときは外へ出て使え。

タバコはいけない。(清水)

山仕事関係

汁かけ飯 山へ仕事に行く人は汗かけ飯を食べちゃいけない。けがをしないように。まちがいができるとおごごだから。(橋詰)

初午の日

炭をやく人などは、初午の日には火をあつかう仕事は休めといった、火にたたるという。(井戸谷戸)

初午の日は、山へ行つてもよいが炭やきはしない。火早いのでこの日に炭やきをして火事になったのは、記憶にあるだけでも二、三回ある。

その日でなくても、その人が火元になって火事を出した例もいくつがある。(石鴨)

マ ド 平

のびていって出合つてくつつき、下が窓になったような木をマドギといい、こうなつた木は切らない。しかしくついてもその先が一つになつたり、分かれたのはしない。イタヤ、カエデ、モミジができやす

い。

三又の木

三本に分かれている木は、山の神さまの木なので切らない。特になら

の木の場合は絶対に切らない。(石鴨)

枝が三つに分れている木は切つてはならない。山の神の休むところという。(皆沢)

三またになつている木、山の神近くの木は、むかしは伐らなかつたが

今ではかまわない。石鴨では窓木を伐らない。

愛宕様の木を伐ると病気になるといわれる。(萩平)

(二) その他の禁忌

仏 滅

仏滅には仏のことはかはやらない。(皆沢)

葬 式 の 日

友引の日と、とらの日はわるい。とらの日は死んだものがかえるというのでせらう。戦争に行くときは、とらの日をえらんだ。(皆沢)

さる の 日

さるの日はかちらされるといって、大事なものはなし、いいはなしはしない。たとえば、よめ・むこのはなしはしない。(皆沢)

門 松

前原家では門松を立てず、餅もつかない。(馬立)

餅

入飛駒字落合の大川家では、昔は餅がつけなかつたが、明治初年のこと、十二月二十八日に相鏡人の孫が生れ、誕生祝餅をついた。それから誕生餅の名でつくようになった。また正月にはつけないので近所から餅をもらい、お返しに正月十五日につく家もある。(馬立)

櫛

くしをひろうと苦をひろうといつてきらつた。若いころのうたに、く

しは縁切りかんざしはかたみ、指輪は当座の縁つなぎ、というのがあった。(皆沢)

火あぶり田

伝説の項に述べた火あぶり田はその持主にいろいろの不運を齎している。(皆沢)

染屋の大將が買ったら、雷に押しつぶされた。お寺へ上げたら、和尚さんが急死したので返えされた。ソナ馬鹿な事があるかと買った人が又運がわるい。今の人は妻の人だが買って間もなくソリで怪我をして死んだ。今は家ができてはいるが、その家を建てた人が又運がわるい。今のところ晴々とした生活はない。昔から雷で死んだ人が二人ある。(大門)

赤城と男体山

昔から赤城へ行った年は男体に行く。男体に行った年は赤城には行くなといわれる。

大昔、日光の神さまと赤城の神さまとが戦争をしたことがあって仲がよくないので、同じ年に両方の山へは行ってはいけないという。(石鴨)

イボタガエル

ひきがえるのことをイボガエル、イボタガエルの両方を使い、蚤を食べたりする悪役といわれる。

イボタガルに小便をかけられるとイボができるという。突きいにはできたことがない。(石鴨)

弘法大師とほうそう

あるとき、弘法大師が諸国をまわっているとき、ある大尺の家へたかよった。その家のおはんしが弘法大師にごはんをやった。するとおかみさんがおこった。弘法大師はほうそうを病んでいて、じゃひつつらになつていて、ところが弘法大師がきたなげなふきんで顔をなげればきれいなになるといつて、顔をなげた。すると、見ちがえるばかりにきれいな顔になつた。おはんしは弘法大師からそのふきんをもらつて顔をふいた

ところが、じゃひがなおつてきれいな顔になつた。それをおかみさんが聞いて、ふきんをおれげにもかしてくれろといつて、かりて毎日顔をなげたら、じゃひがうつつて、おかみさんの顔はじゃひつつらになつたといふ。(皆沢)

その他の禁忌

掃を座敷においてまたぐな。女の人はお産がおもいという。(中居・猿石)

ごはんの茶碗をたたいてはいけない。子どもに注意をする。(井戸谷戸)

なべずみ・かますみは、人通りにかきおとすものではない。人にのぼつてあるくと火事になるという。(中居・猿石)

うさぎを食べるとみつくちの子どもがうまれるという。(皆沢)

旅へ出て、七日がえりをするなという。(皆沢)

嫁は子どもを里で生んだとき、三月がかりをきらう。(皆沢)

煙出しのない家 入飛駒にある。この家は昔渡辺綱が鬼退治したとき、鬼の腕をとつたのをとられたので、それを取りにヤグラから出入りした。そこで昔から家を建てるとき煙出しをつけないうという。(馬立)

一軒のうちに、み・とら・さるどしものものがいると、まがわるい。(井戸谷戸)

たねまきをしてから四十九日目の日には田植をしない。(皆沢)

郷土芸能

概観

郷土芸能は最初の子備調査からも、発表された文献や研究資料にもほとんどなかったで、こんどの調査においてもそう大きな期待をもっていなかったのが実情であった。一つ山脈を距てた渡良瀬川の谷に属する勢多郡黒保根村には、清水の人形、湧丸の人形、前田原の神楽など、かなり郷土芸能がのこされているが、梅田地区は、機場の桐生市街の後背地であるために、古いものは少ないという推定はされた。実際に調査してみたところ、やはりその推定はあたっていた。わずかに太々神楽がのこっているだけであったが、思いがけないものとして、歌舞伎舞台に使用した大道具の襖一式や、下座（組立式）の一式、引幕などが発見できたことが大きな収穫であったといえよう。

民謡については、従来一しょに含めてきたが、今回から別に調査者ができたのですべてそちらに譲ることにしたので、本項では取扱わないことにした。

桐生地方にも、かつてはいろいろの郷土芸能が行われていたことは、操り人形の製作者がいたことでも明らかである。県の重要文化財に指定されている前橋市下長磯町の操り式三番に使われる三番のカシラには、墨書で、「安永九丑五月吉、桐生下久方、細工人、永山熊蔵」とある。このカシラは、淡路の人形富（でこみ）とよばれた名人の作品によく似ていてなかなかの名作である。永山熊蔵はよほどの名人だったらし

く、いま一つ前橋市下増田の北爪秀直氏が所蔵する能の「翁」に使う白式尉と黒式尉の面にも、「上州桐生下久方、永山熊蔵作」（黒式尉）「蓮上、寛政五丑二月吉日」（白式尉）と刻銘朱入りで銘記されている。この翁の面は、一文字あごのものであるが実に立派な作品である。こういう面飾がいたのであるから、桐生一帯はかなり人形芝居や能の翁が行われていたにちがいないと思われる。しかし、ほとんど現在みることはできないのである。

今後さらに、広沢地区、川内地区と調査の手をのばしていくことが絶対に必要なである。

一 浅部の歌舞伎舞台の襖

浅部の観音堂の増築したお勝手場所に、大きな白木造りの箱があった。その中に歌舞伎舞台の大道具の襖類が完全に保存されている。このことを知ったのは、浅部の村上家へゆき調査しているうちに、観音堂に芝居の舞台に使ったというフスマがいくつもあるそうだということを知り、ちょっと聴いた。現在もあるかどうかかわからないという。甚だたよらない話であったが、これを聴きのがしにしたら、これから記す発見はできなかった。たとえば、襖が一枚のみから見たら、ということ現場へ急行したところ、まず右のよけな次第であった。襖の長持はあまりきいていないだけにめづらしかった。屏風はよく長持に蔵われるが、襖絵が長持に入る話はいきいていない。舞台の背景や上・下に使用した襖は全部で



浅部の舞台用背景襖 (三番叟の出しものに使う)
(撮影 萩原 進)



浅部の舞台用襖の部分(2) (牡丹に唐獅子)
(撮影 萩原 進)



浅部の舞台用下座の部分
(撮影 萩原 進)



浅部の舞台用襖の部分(1) (牡丹に唐獅子)
(撮影 萩原 進)



浅部の舞台下座の部分
(撮影 萩原 進)



浅部の舞台襖の裏側の図
(撮影 萩原 進)



浅部の舞台下座の格子
(撮影 萩原 進)



浅部の舞台用引幕
(撮影 萩原 進)

三組ある。

(一) 牡丹に唐獅子の襖

全部で十五枚に分解されており、これをつなぐと完全な図柄となるようにできている。おそらく、舞台の御殿の場などの奥の背景に使われたものであろう。絵は唐獅子が何匹もおり、牡丹に狂うもの、池の水辺で水を飲んでゐるもの、滝の上になうずくまるもの、大地をのし歩くものなど、獅子の姿態がそれぞれ違つて配されている。豊富な緑青や岩絵具を使い、地には金箔、金粉を散らしたみごとな絵である。あたかも桃山時代の障壁画における狩野永徳の名作をほうふつとさせる「牡丹に唐獅子」である。惜しいことに作者名がどこにも記されていない。県下各地に歌舞伎舞台に使用した大道具はのこされているが、これほどぜいを尽した豪華なものはない。製作年代も全く不明であるが、長持の一つに「天保十五年甲辰七月吉日、奉納天満宮」と小さな字の墨書がある

(二) 波上旭日の襖

これは、三枚で一組のセットになっている背景で、図は大きな朝日から或いはこのとき新調したのかも知れない。もしそうだとすると、江戸時代の文化・文政の奢侈の時代を経て、天保の飢饉となり、上州地方もかなり深刻な様相を呈したあとに、水野忠邦の天保の改革が行われ、ことに歌舞伎などは最も先きに槍玉があがったときにあたる。県下における資料からも、天保の改革で、地方の歌舞伎舞台(芝居小屋)が破却を命じられている。このとき、県内では相当数の舞台がこわされたようである。水野忠邦が失脚したのは天保十四年であるから、その翌年にもうこれだけの豪華なものは買収したものを作ったとすれば、本県の芸能史上においても非常に貴重である。唐獅子の牡丹の図は、狩野派の筆法そのままであることから、おそらく永徳あたりのものを模したものである。そして筆者は、桐生織物に下絵師あたりではなかつたらうかという推定もできる。幸い保存がよいのでほとんど損傷していないので、今後の保護が望まれる。大きさは、縦六尺、横二尺ほどであるから十五枚を組合わせると三十尺、ちやうど五間になるから、少くも間口五間以上の舞台があつたことはまちがいないであらう。

表の牡丹に唐獅子の裏がまた完成した絵になっている。これは「松鶴図」であつて、松樹に群鶴を配したものでこれもみごとである。色彩は牡丹に唐獅子と全く趣を異にし、色の数も松の緑、鶴の翅の白、丹頂の朱といった変化に乏しいものである。しかし、全体の構成がうまくまとめられていて、背景としては傑作の部類に入る。おそらく時代物の館(やかた)の場などに使われたものであろう。表裏がいわば、「濃」と「淡」、「艶」と「朴」の対比をみせている。その点でも、表裏合わせたこの襖は芸能史の資料としても立派なものである。かつて、この襖を背景として演じられた歌舞伎の舞台はさぞかし立派であつたらうと思う。

これは、三枚で一組のセットになっている背景で、図は大きな朝日

が、今や大海原の上に躍り出ようとしている図である。波は葛飾北斎はりの波頭であつて雄渾な図である。おそらく、これは芝居の最も最初の舞台上に演じられる三番叢に用いられたものであろう。やはり二尺に六尺である。このときの舞台はおそらく、背景の奥には無地の幕を引き、二重のところにこの背景を立てて三番叢を演じたものと考えられる。庶民のなかに、こうしたすばらしい芸術への関心があったということ自体が興味もたれるが、それにしても、作者名のないのは惜しまれる。

二 浅部歌舞伎舞台の組立式下座

舞台の右の袖のところに、義太夫語りとテヲボが難し方として座るところが下座である。多くは一間四面の字型に出来ており、スタレを下げた中で太夫が義太夫を語るののであるが、定舞台（固定舞台）では下座は固定しているが、おなじ定舞台でも観覧席が屋外につくられる舞台だけの建築の場合はその都度つくりつけるようになっていた。

浅部の観音堂の下座は、本堂正面左の奥につくりつけられた戸棚の中に大きな箱（長持のようなもの）に収められてあつた。明らかに組立式舞台か、ステージだけの地方歌舞伎舞台に用いるために、使用しなくなつたときには分解して収納したことを示している。県内では、下座の立派なものを持っているのは、赤城村三原田の歌舞伎舞台、利根郡新治村羽場の日枝神社の歌舞伎舞台、佐波郡境町などに遺つているが数に少なくはなっている。

浅部の組立式下座は、人手が不足していたため、今回の調査ではついに組立てて完成することはできなかったのは惜しいが、一式ほとんど部分が揃つていたので、復元はやさしいと思う。県内のこうした下座の多くは、神社建築の大工の手によって彫られた透し彫りの裝飾が多いように、浅部の下座の彫刻も立派な透し彫りである。ちゃんと彩色も遺され

ている。前面の棧戸四枚、勾欄の衝立は松に鶴の透し彫りで二対、破風のところに下げる懸魚にあたる彫刻も鶴の透し彫りである。柱の昇り竜、下り竜をはじめ、腰板などまで完全に保存されている。おそらく組立ててみれば立派なものになるであらうと思われ。屋根の破風にある人型の軒板も遺されている。彩色もそう剥けていない。前記の襖とおなじように、浅部において地方芝居の舞台の大道具として利用されたものであることがわかる。

三 浅部の歌舞伎舞台引幕

下座の収納箱の中に、舞台の引幕一張が遺されている。藍染のタテ縞があるだけの素朴なものであるが、左の端に、これを寄付した「高沢村」の三字が染めぬかれている。おそらく、浅部の芝居を共同で上演したか、組合村のようになつていて、一緒に興行したか、そうした縁でこの幕を隣村の高沢村が寄進したものであらうと思う。古い引幕で立派なものは県内の各地に遺っているので、この引幕はそうした中ではあまり立派とはいえない。吾妻郡六合村入山で見た引幕は秋の野に鹿を描いてあつたし、その他の地方にも絵をいばいに書いたものが多いが、こののは、葬式ときに使うクジラ幕とおなじ模様を黒の代りに藍で紺色にしたものである。実はこの幕の図柄は歌舞伎では古い時代から用いられたものでその意味ではやはり注目される引幕である。

四 浅部の芝居

これほどの地方歌舞伎舞台付属の大道具一式が遺りながら、地元では掛け舞台のことも、定舞台のことも伝承されていない。しかし、あとになって、浅部にも芝居の舞台があったそうだという話をきくことができた。しかし、それが何時頃まであったかについては全く不明である。

買芝居は大正から昭和のはじめ頃までの頃に、栃木県飛駒村の「飛駒芝居」が来てやっていたのを覚えていというだけで、地芝居の痕跡は確認することができなかつたのは惜しい。果して、浅部には地芝居が行われ、常設の舞台があつたのであろうかという疑問をのこさざるを得なかつたのである。

五 浅部の神楽

浅部にはまた神楽がのこされている。八月十九日夜、公民館で実演してもらつた。中心になっているのは岩森仙太郎、大川武治、内田茂八の三氏であるが、踊れるものは岩森氏ぐらゐとなり、ほとんど座絶一歩手前である。幸い、現在もし伝承する者があれば、笛や大鼓、小鼓などの囃子がやれるし、舞の方も全部ではないが再現できそうである。

系統は里神楽である。伝えによると、桐生市賀茂神社の荒神さまの神楽から教えられたものだというのが、荒神さまの神楽が絶えてしまつたのでその先きの経路は全くわからないということである。荒神さまから教わつたのが八十年位前だつたというから明治二十年前後ということになる。全部の曲目



天の岩戸の猿田彦の舞
(鈴木正三氏 写真)

見ることができなかつたので、くわしい考察はできなかつたが、県内に多い俗にいう「太々神楽」の系統に入るものである。

(舞の曲目)

翁の舞 芝居でも三番叟は翁の舞であるから、能や芝居などの影響が見られる。この曲目は普通の神楽には少ない。

四方舞 「四方差し」ともいう。獅子舞などに多い「四方固め」とおなじ意図の曲目であらう。舞台を清浄にする浄めの舞である。

金山彦の舞 これは里神楽に共通している曲目の一つで、鍛冶屋や鉱山の職人信仰の神金山彦が、ヤツネを相手に剣をきたえたといい場面である。

夷の舞 「エビスさまの鯛釣り」として一般に知られている曲目である。これも里神楽に共通している。

天の岩戸舞 神話の天の岩戸を演じるもので、これも里神楽に多い。天手力男命、天照大神、猿田彦、天の鈿女(うずめ)が出る。

大蛇退治 これも、八岐の大蛇退治で知られる里神楽の曲目である。スサノオの命、クツナダ姫といった役が登場する。

以上が最近までやれた曲目である。しかし、それ以前には次ぎの曲目もやれたという。

種播き 農耕の豊饒を祈念する曲目でイナリに使白狐が播種、収穫、餅つきまで、二人のもどきを使って面白おかしく演ずるもの。

棟上げ 匠(たくみ)の舞ともいい、工匠(大工)が家を建てることを祝う曲目である。

玉取姫 竜宮伝説に出てくる玉取姫の曲目である。この曲目のあるのは神楽として例が少ない。

剣の舞 破邪頭正の舞曲である。「白刃の舞」とよぶところもある。獅子舞に多い。

弓の舞 剣に次ぐ武神の舞である。以上が、浅部神楽の曲目であるが、実演は天岩戸の舞だけであつたが

舞にはさして特長は見られない。
 次に、囃子方の曲であるが、いま伝わっているものは、次ぎの諸曲である。

出の曲

乱拍子

三つ拍子

平舞（ひらまい）

荒舞

道化舞

狐の舞

夷の舞

以上の八曲だという。囃子の曲を舞の曲名と一致させたものと、本来の曲名との二つの系統にわかれる。おそらく便宜上このように分けたも



神楽面（前列中央が白式尉と黒式尉）
 （鈴木正三氏 写真）



大太鼓の囃子（鈴木正三氏 写真）

のと思える。各地の里神楽に多い「岡崎」とか「聖天」とか「鎌倉」といった名称は消えている。乱拍子と三つ拍子が、本来の囃子を表わしていることが注目される。

舞い方はかなり荒々しい鎮魂形式で、六方踏みなどはそのよい例である。ほとんどパントマイム（無言劇）で、わずかに八岐の蛇で、「八雲立つ、出雲八重垣、妻ごめに、八重垣つくる。その八重垣を」という、古事記に出てくる歌をスサイオの命がいうだけである。

カシラと装束はよく保存されている。カシラはそう古くないようである。一個だけ面の裏に横棒を入れてくわえるようになってはいるが、全部紐で結えつける形式である。作者銘などはない。

大劇の一つの胴部の内面に「昭和四年新調」とあることからみて、現在使用している大劇はきわめてあたらしいことがわかる。装束の方も比較的保存がよく、トリカブトなども一式揃っている。

このほか、皆沢には飛駒村の人が幾人か組んで「太々布子」に歩いたりしてよくやっていた、というが、最近はまだ見られなくなった。

六 八木節踊り

八木節踊りは、もとは盆踊りであったから、盆踊りとしての調査を進める方がたしかである。現在の八木節踊りはステージ向きに工夫改良を加えられてきたもので、高いやぐらを組んでそのまわりで円舞する盆踊りとは全く様相を一変してしまつた。

山地での調査に拠ると、八木節のことを「口説き」とよんでおり、いわゆる八木節が口説節の系統である痕跡をよくのこしている。口説節は、文字どおり「口で物語を説く」もので、説話文字が江戸時代にあたらしい芸能として行われるようになった産物である。明治時代などに流行した書生や芸人がバイオリンをひきながら



盆踊り (手踊り) (撮影 萩原 進)



盆踊り (手拭い踊り) (撮影 萩原 進)

めずらしい社会のできごと、事件などをすぐ歌にしたのとよく似ている。心中とか、殺人事件とが発生すると、瓦版でニュースが流されるが、これを脚色して読み上げるように歌ったものが口説節であった。たとえば、山地で語ってくれた「おしも福次」は、埼玉県下が発生したおしもと福次の心中事件を内容としたものであった。この「物語」を音頭取りが歌うと、それに合わせて踊り子(参会者)が輪になって踊り明かしたのが盆踊りであった。この盆踊りの歌曲の方が大きく変えられ、彌込源太という個人の流儀になり、現在の八木節調が生まれたと見てよいであろう。したがって、新田町木崎の木崎音頭、佐波郡境町の赤梶節な

どは、古い時代の盆踊りである。しかし、その盆踊りがやがて八木節となるのである。

盆踊りは、第一に手踊りが主である。両手を振りながら、同一の動作をくりかえすものである。山地で園田ヨネ(70)と佐瀬セン(77)さんの二人は、娘時代に踊った盆踊りをやってもらったが、大きな特長は、両手を肩より上へ上げないで、肩から下の位置で踊ることであった。これが木崎音頭になると、両手を頭より高く上げる大振りの手踊りである。おそらく、古い盆踊りはこのように肩より下を基準の手踊りであったらうということがわかる。その肩から下の腕も真つ直ぐに伸ばすということはほとんどなく、上はく部は体につけるようにして「くの字」型で踊る。要するに、伸び伸びとした踊りではなく、小さく縮まった踊りであったことがわかった。

手踊りに次ぐのが「手拭い踊り」とよばれるもので、首に巻いている手拭いを利用してわずかに変化をつける踊り方である。腕の位置、踊りのテンポなど全く手踊りと同じである。

古い踊り方は、この二種類しかなく、そのあとから「スゲ笠踊り」とか「傘踊り」がはやり出した。スゲ笠が花笠となり、花笠も、南ヨーロッパのタンゴなどで使われるタンバリンよろしくなってきたのは近頃のことである。こうした素朴な踊りはほとんど消えようとしている。しかし、山地の踊り方は最も古いかというところではないらしい。多野郡万場町や勢多郡富士見村などにある石を拾っては投げけるかつこうに似ている踊り方のもうこのころにはなかつた。万場町の踊りなどは、ここからみればさらに古いものである。しかし、いずれにしても、八木節踊りが、野外からステージに上がってしまふにつれて変化した踊りの一つの原型がのこっていたことはやはり注目してよいであろう。

石鴨の盆おどりは、大正十二・三年頃からやり出したもので、別に「くどき節」「八木節」ともよんでいた。「お吉清三」「鈴木主水」などがよくやられた。お祝いのときには、酒一升とか、銭とか「ハナ」を出

したが、「ハナ」は表示するとき倍に書くものとされ、これを「おかえし」という。倍に書かないと本当のおかえしをしなければならぬ。

七 そ の 他

越後のゴゼ

この地方には越後からたくさんのゴゼが入ってきた。大ていの部落にゴゼの泊まる家というのがあり、そこを定宿とした。好きなものは、夜その家に集まって、ゴゼからいろいろの歌などを教わったものである。

門付芸

ゴゼのほか村へ来た門付芸は「猿使い」「万才」「虚無僧」「祭文」などいろいろあった。皆沢部落では正月の一枚曆(大小)は売りに来なかった。春駒もほとんど知らないという。万歳と豆蔵も毎年来たものである。万歳も宿が部落ごとにきまわってそこに定宿とした。豆蔵小僧がやってくる、俵かますで呉れてやれ

とか。

豆蔵小僧が来たときは、

アワの餅より米の餅

と歌いはやしたものである。(大門)

民謡・わらべ唄

酒 井 正 保

(一) 追分け節

梅田の芸能の多くが、新潟の影響を受けたものが多いように思われるが、特にこの追分け節は越後追分けの影響があると思つたが、然々別で、碓井追分けの類歌である。曲のわずかな部分に、古く歌われた馬子

唄の曲節がぞいでいる程度で、駄賃付けに歌われた唄の唄ではない。馬子唄(追分け節)の相違は歌う者の職業によつて相違が判明できよう。馬唄の唄、プロである駄賃付けの馬方のうた、農民の草刈馬子唄など三つに分けて考えられる。

梅田の追分け節は駄賃付けの馬方の唄の系統である。もちろんその当時はもたぬ、街道筋の宿駅の「出女」などによつて酒宴唄とされ、三味線などの伴奏を加えられ、流行うたに化し「追分け節」となつたものが梅田で歌われている。

しかし梅田でも追分け節を酒宴唄としてではなく、こ荷歌といつて、馬の背に、すみやまきなどを積んで運びながら歌つたもので、鈴や尺八を伴奏にしてなど歌つたものではないが、おぐら峠など越しながら馬の口をとらえて、自然に聞まれてゆう大に歌つたものである。

曲は自由拍子でまったく自然に歌われている。その大きな特徴に、音を伸ばして歌っている唱法に、音程を越えてころがしながら伸ばす部分が多くみられるが、昔からこれを「コブシ」などといっているが、これは西洋音楽にみる、ビブラートとは違ふ。追分けの中に見られる音を伸ばして歌う唱法は前述した通り音程を作つての「ゆれ」(メリスマ)である。これはめずらしい唱法であるが、こうした「ゆれ」の入っている音楽は自由拍子の曲が多い。歌手が自分の気分によつてゆったりと歌っているのである。だから今歌つた追分けと同じ曲を次に同一の人が歌つても同じには歌えないのである。ここに追分け節の拍子記号をつけるむづかしさが残されている。(楽符の中に拍子記号が入っているが、数回歌つたものの中からけん討して付けてみた。

梅田の追分け節には、三味線や尺八の伴奏付きのものがあった。

○よくよ染めたよ馬唄さんのゆかた、かたにやかげ馬 背中にや千両と書いてある、千両欠くよじや白歯が過ぎない。

ああ畜生めどこころ、真中とりやがれ、やな田の宿だぞ、おじよりに笑られる、百に三升の銅をくい、なにが不足でへをたれる。(業譜！)

(四丁目)

(一) 木挽うた

山にとり囲まれた梅田には、木挽うたは多い。しかも各谷津にそれがある。現在は木挽はほとんどみられないがうたは残されている。梅田に定着生活を営んでいるために特に同じような生活環境にあつても山に入つて広々とした谷間で生活するのでこれがうたの中にも特徴もつている。しかし、外国の遊牧民が広々とした原野で自由自在にうたつているのと同じように、梅田の木挽うたも谷深く入り一人でえんりよなく広々とうたうのである。労作業うたとして考えられて来たが、実際にあの大きな鯛の形をした超大型のノコギリで、大木を製材しながら今の木挽うたをうたうことは不可能なことである。特に木材をノコで切つことは全身をつかい重労働なのであるから、かつての木挽うたはもつとゆつたりとした、そして広々と自由にうたわれたものであろう。作業をとまなわず、素手でこつした労作業うたをうたうたと自然にテンポもはやくなり、民謡のもつ、しぶさと自然さを失ひ勝ちになる。梅田の木挽うたばかりでないそのうたの持つ附帯見の失ひ変形されていく民謡は各地に多い。

かつて原始林を伐さいしてそれを製材にする木挽たちも仕事の最中にうたつたり、また、その仕事の休みをこうしたうたによつて疲労をとるためや自分の考えや心をうたで表現したものと考えられる。木挽うたの旋律がごく自由でゆつたりとした速度とテンポで流れるのも以上のような意味からと考えられる。曲の終りにある相の手に「ズイコン、ズイコン」というノコギリの音が表現されているが、この相の手が梅田の各地それぞれ異つているのが興味深い。

木挽うた

ねずみと木挽は

挽かんじや

くえねえ

ズイコン ジイコン。

木挽するなら

やな田の土手で

小ばちたたいて

乞食する。

木挽は三角でも

けつめどは丸い

それがうそなら

野ぐそみる

ズイコン ズイコン(馬立)

きれたふんどしや

将棋の駒よ

角かと思えば

金が出る

オーメンクラツテ

オー足ファンバリ

ジイコン

ジイコン

切れたふんどしや

お寺の御門よ

ときどき坊さまが

出てござる

(相の手右と同じ)

めでたいのは
くるみの花よ
長く咲いて

すいまくる

(相の手右と同じ)(今倉)

(三) 機織り唄

現在は機織りはみられなくなつて来た、かつては相当盛んであつたことがわかる。機織りに従事するものはほとんど婦女子である。一反織るのに一昼夜で織りあげる程の者が多かつたようである。賃機といつて家庭内で織るのと、製糸工場のようなシステムの所で集団でこの仕事に若い女子が働きながら、仕事の苦しみや、望郷の心や、恋など機織り女の生活を唄の素材として歌われているものが多い。

梅田の機織り唄も、労作唄の中に入れて考えられるが、チャンカラ、チャンカラと賃機を織るのに合せて、現在残されている機織り唄を歌うのは少々むづかしい。相当ハイテンポでかつては歌われていたのであろう。現在歌われている唄は仕事に合わせて歌うものではない、ゆったりとしたテンポでうたわれている。

機織りをするために、でなく現在うたわれている唄は、目的がなく本物の芸術性がある。

仕事に結びついているから価値があるという観念から脱皮して他から音楽性をみていくべきだと思ふ。梅田の紙すきに関する音楽が残されているのではないかと、さぐつてみたが、その仕事をしながら、「くどき」を歌つたり、当時流行の唄を歌つたことがわかつたが、機織唄でも、その律動に合わせて、さまざまな機織りの感情を歌つたものであろう、つきつめれば、それによつて機織り仕事の能率を促進したり、そこで働く者の疲労度を少なくするために歌つたものだとそうした原理も考えられないでもないが、もっとその当時のそこに働く者の感情を唄で表現し

たものと考えたい。

その感情を性にゆだねてユーモアに表現し性につきものの笑いを湿っぽくなく心から笑える乾いた健康なもので表現している。庶民の本当の笑いなのであろう。

賃機織りも苦しい仕事で、一日一反織る人もあれば、三日がかりで一反織つた者もあつたという、当時一反の機が二十五銭位だった、機織り機械の足ぶみが二本の物と、数本もあるものもあつたという。この足ぶみのリズムに合せて、チャンカラ、チャンカラと織りながら歌つたので、足ぶみの数によつて歌のテンポの変化も少々あつたようであるが、ほとんどの唄が同じような曲想で歌われたようである。

○機が織れない機神様よ

どうぞこの手があがるよにアアシャカトンシャカトン(葉譜2)

x x

○だれかきたよだ おさなの外に

だれもきやせぬ犬ばかり

アアシャカトンシャカトン(五丁目)

○一丁目二丁目が川ならよかる

かわい主さん船でくる

x x

○可愛王さんにた山がよい

おぐら峠がなけりやよい(四丁目)

○わしと主さんはご門のとびら

朝は別れて晩に合う

チャカコ、チャカコ

○わしと主さんは羽織りのひもよ

かたく結んで胸におく

チャカコ チャカコ

○しまえ頭だよたんずみどこだ

けんちよばなれをしたばかり(忍山)

○かわいあの子はにた山がよい

おぐら峠がさびしかる

○田中はたやほご殿の桜

お手はとどかぬみたばかり(今倉)

○チャン チャン チャンカラコ、山なか、山中のこげなやろめを、
だまして金とれ、その金どうする、おかわい、おかわい、彼氏の長半、
ちばいち、じよろかいもと手をチャンカラコ、チャンカラコ。

○かんま、ひこま(地名)のいもほりやろに、二朱や五百でだきねされて、
足をからめの手をさしこめの、枕をはずせのよいきのやれの、ほん
につとめはつらいものチャンカラコチャンカラコ。(大門)

○産で死んだら 血の池地獄 流れ灌頂立ててくれ。

○何でそんなに 疑ぐり深い 廻る吾気(りんき)の車井戸

○五月節句にや 朧モギに萬蒲 私はあるあなたに のぼり竿

○私はあなたに 火事場の馬れん振られ乍らも 熱くなる

○主に太田は 八月八日(縁日) 今宵一夜は 返さぬ気

○私は太田の 金山育ち 外に気はない松ばかり(大門)

逢はれないから来るなというに

来ては泣いたり 泣かせたり(大門)

○長い年期を 一枚紙に 封じ込められ この務め

○早く日が暮れ 早や夜が明けて 早く年期があげりやよい

○早く行きたい この山越えて 娘来たかと いわれたい(大門)

○やだ おかちやんはたやの年期 夜が十時で朝が四時。

○おまえどこへゆく、かげはちまきで もとの在所へ種まきに。

○やだおかちやん畑のいもは、かぶり振り振り子が出来る。(居船)

糸は千本切れてもつなく、あなたときれたらつなげない(馬立)

四 糸ひき唄

機織りをするのに用いる糸をとる仕事に「糸ひき」がある。まゆをにてそれを細い棒でかき廻し、糸口をみつつけそれをその棒でゆう薄しなから「ざくり」にからむ仕事である。

糸口がみつからなかつたり、「ざくり」にからみながら糸が切れると手間がかかる、糸が上手にひけないと機織りの能率にも関係する。この糸ひきをしながら歌われた唄に

○糸よ切れるなまいよく立ちな むらのないよに ひけるよに(馬立)

五 糸あげ唄

昼間糸とりをして、夜中に「糸あげ」をする。糸あげ仕事はざぐりにからんである糸巻きを、織る場に運んだり取りつけたりする仕事である。夜なべ仕事として糸あげをしていると、近りんの若い衆が集まって来てひやかしたりする、重労働の作業であっても、若者のロマンと、ユイモアの感情がこの唄の中に表現されている。

○ヒヤカシヤたんときな

よなべしまえば だいてねる (馬立)

○かいこあがれば沼田の城下

つれていくから、しんぼしな (馬立)

(内) まりつきうた

まりつきは、今のまりつきのように地面や床にまりをはづませてするのでなく風船つきのように空中でついたという。ゴムまりの出はじめ以前、まりの芯に山の岩ごけをほして入れたり、またやつ頭いもの茎を入れたりせんまいの毛なども芯にしたという。それに糸をむらなくつき、まりが横はづみにならぬように糸まりをつくる。ゴムまりよりはづまないので座ってまりをつく、座りまりつき頭は、歌詞が比較的ながい。遊び方は数人の者が向い合ってまりをつき合う、規定の歌詞が歌い終るまで突くと一貫相手に借すことになる、曲によっては一貫、二貫、三貫という具合に借すのがどんどんふえる。

明治のはじ頃、ゴムまりが出はじめたという、村でも持つ人は少なかった、ゴムまりはよくはずむので立つてつくようになった、ゴムまりつきの歌は歌詞が短いようだ。

○向う山で白猫が、

あしだをはいて木のぼりだ

あしだじゃあぶない

じょんじょがよい

じょんじょの鼻緒が切れたのだ

赤い鼻緒で たててやられ

一月、正月来たなれば

お母さんの前でも手をついて

お父さんの前でも手をついて

ながながおせわになりました

まずまず一貫かしました

ひうふうからくり からいつは

二十八ひろに また八ひろ

合せて三十六のひろ

今朝のあらしでみなちいけた

まずまず二貫 かしました

そこどんぶらやの

みちやのていし (亭主) は

へびにいのちをとうられて

そのへびはどこだと聞いたら

からたちやまの青大将

木にからまれ

やなぎにからまれ

うちのぼたんにかあらまれ

まずまず三貫 かしました。

○天神様よ、天神様よこの手をあげて、

下さるならば、一梅針ものを

五つとこ六とこ

長い長い 両国橋を

お馬でこそか、おかごでこそか

お馬も、おかごもいやじや

十七八年で手をかしょ

これで一貫借しました。(馬立)

○向う山でわらび摘むのは

人のよめか娘か、娘なら門によびよせ

むこなら入りむこ

いりむこに ひしやく取らせて

しゆうと様のさかづき

そのさかづき、だれにくれよと

お菊じよろしゆにくれよと

お菊じよろしゆは、ここにいないもの

東街道にいるもの

東街道じや、水がふえて

名王様におし込んだ(忍山)

○天から落ちた五郎八つあん

茶がまで あんこついで

しらじで、もちついで

おれにもくんねと

じやまするじやまする

ますます一貫かしました

つきました。(皆沢)

(七) 唄風船つきうた

子どもの遊び用具を売り歩きながらそれを商売としその遊びにちなんだ唄を各地に教え歩いた人々がいる。これがわらべうたの流行を広めた者である。この風船つき唄は風船売りが広めた者ではない、越後の葉売りが、葉のサーブスに紙風船をくれる、形は四角のものが多く各面に葉のこう能書きなどがしるしてある。

この風船つき唄は、葉売りが教えたものであろう、遊びの様式は、まりつきのように、曲を最後まで歌い終るまで風船をつくと相手に一貫借すことになる。相手は借りを返すために熱心につき合う、お手玉のように空間に打ちあげた時重くないので少しの風向きによっても風船は流れつきはぐつてしまう。風船が軽いためこの唄はゆっくりとしたテンポの曲である。なおこの風船つき唄は県内でもめずらしいものと思われる。

○一の木 二の木

三の木板 桜のもとに

おひめとじよろと

べにかねつけて どこえござる

お江戸へござる

お江戸のみにち

羽根の生えた鳥と

羽根生えええとりと

ぎちぎち、ばさばさ

十ついちや一貫よ(皆沢) (葉譜3)

(八) 子どもりうた

梅田の子もり唄も各地にみるような、子どもをねむりにさせようための唄と、子どもを遊ばせるためのものとある。

ねかせ唄の方のものは、江戸で宝暦、明和の頃歌われたものの「ねえんねえんねんねこよ、ねんねのおもりはどこへいた」の性格をもったものが多い。

子もり唄

○ねんね山の白ねこが

足だをはいておてくる

足だじやあぶないジョンジョがいい

ジョンジョのはなをが切れたなら

赤いはなをでたててやれ

白いはなをでたててやれ

ねんねんねんころねんころり。(皆沢) (葉譜4)

遊ばせ唄も諸々みられるが、代表的なものは、月をみて歌ったものがあげられる。古くはこの唄は、手まり唄や、ただ月を觀賞する時にうたわれたようであるが、この唄も古書近松作「賀古教信七墓廻」(元禄十五年)に子もり唄として出ている。梅田でもこの唄は、月をみながら子も

りが子どもを遊ばせるために歌われているようだ。

(ハ) 遊ばせ唄

お月さん幾つ十三・七つ

まだ年しや若いね

若子を生んで だれにだかしよ

おまんにだかしよおまんはどこ行つた

油かいに行つた

油屋の前で

すべつてころんで

油一升こぼした

その油どうした

次郎どんの犬と

太郎どんの犬と

みんななめてしまつた

(ヒ) 悪口うた

子どもの遊びの中で相手に向つて悪口をいうのにそれを歌で表現する、子どもの悪口は、相手に対して真に悪意をもつて歌っているのではない、遊びの抑揚でもあり、遊びの継続のアクセントのような性格をもつているようである。

(イ) 通行人に向つて

○おじやんどこだい石鴨かい

商売なんだい すみやきかい

どうりで顔が真黒だ(四丁目) (楽譜5)

(ロ) あけびの花で遊ぶ

○ジジ、ババねてろ

よめは起きて機織おれ

次郎は起きて山へゆけ

太郎は起きて草をかれ

この唄は、むらさきのあけびの花をとつてそれをみなながら、この唄を歌うのであるが、あけびの花の形が年寄りや、親しくねているような形をしているところからこんな発想がなされると思われる。また、あけびの花を引用して、更に成人の生活(現実)を歌っているのである。

○ジジ、ババねてろ

よめは起きて機織おれ

むこは起きてタメかつげ(四丁目)

このように同一の目的をもつた歌であつて、同じ地区(せまい)であつても、歌詞の内容が変り、その詞(ことば)のアクセントのちがひにより曲も少々変つているものもある。

(ハ) 馬方に向つて

○野峰山から、

ダンゾウが家みれば

ダンゾウの

かかあ

日なたで しらみとり(馬立て)

この地区にダンゾウという馬方がいて、山からダンゾウが馬をつれて里にやつてくる。ダンゾウはユーモラスな性格の人で、出会う子どもを片しから、しつこくからかった。子どもたちは、ダンゾウに対抗するの、この唄を歌つた。

ダンゾウは細心な人で、子どもがこの唄を歌うと、真けんになって怒り、子どもを追いかけたという。

子どもたちは、これをおもしろがつて、ダンゾウが見えるところの唄をダンゾウにあびせかけ、常に子どもとダンゾウとの間に、ユーモラスな

トラブルがあったとのことだ。

この唄のように、附帯目的と附帯物が現実の身近にあり、その地域で数人の者によって創作された唄であることが判明しているとき、どのようにしてそれが創作したのかという近くまで考えられるような気がする。

現実には絵書き唄など、子どもの中に、次々と新しいわらべ唄が創作され、あみ出されているが、このようなあみ出されていく現在の新しく、創作されていくプロセスを調べていくことによって、過去に古から歌われてきた、こうした日本の伝統音楽のあみ出された周辺の解明が出来るのではないかと考えられる。この唄も附帯目的は悪口唄ではあるが、日本の伝統音楽を解明していく手がかりにもなる。

(四) うらないうた

一月十四日、まゆ玉をつくる。まゆ玉をゆでた水をバケツに入れ、柿、桃、栗、ゆずなどの果樹にその水をヒシヤクでかけ、なる木せめの唄を歌いながら、ナタで水をかけた部分を切るのである。こうすると果実がその年に豊作になるというのである。新年に果実が、その年によく出きるようにと子祝するうたである。

○なるか、なんねえか

なんなけりや

ぶつきるぞ。(馬立)(楽譜6)

(五) 動物のうた

夏になると はたる取りは盛んであった。山あいを流れる美しい水と、新鮮な草木にかまされて昔は、はたるも多く、家の中にまで飛び込んできた程だったという。麦藁ではたる籠をあみ、うちわや、木の枝、しの、竹ぼうきなどで飛んで来るはたるをそとと打ち落してとったという、はたるかごの中に入れたはたるが光ると、飛び回っているはたるが近よってくる。はたるが来ない時はこのうたを歌ったという。

○は は、はたるこい

やんぶしこい

あんどの光で

飛んでこい

あつちの水はにがいぞ

こつちの水は甘いぞ

は は、はたるこい。(四丁目)(楽譜7)

動物に向って歌う唄の中で、カラスに向ってのものは多い、カラスは人間の生活する近くに生息する、「墓のダンゴをカラスがたべる」とか、「カラスなきが悪いから、死人ができる」などのたとえは梅田にも多く残されている。

夕暮になると、昼間里でえさをあさったカラスが、鳴神山などにその地域のカラスが全部一か所に集団で集まり、それからねぐらに帰る一匹でもカラスが集まらないと帰らないという子どもは、これらのカラスに向って、この唄をうたう。

(六) カラスカラス

○からす、からす

かんがらす

おめえのうちがやけるぞ

早くけえつて

水かけろ

水がなけりや

タメカケろ。(四丁目)(楽譜8)

からす、からす

かんがらす

にしが(お前が)

うちがやけるぞ

早くやえつて

しようべんかけろ

しようべんなけりや

タメかけろ。(馬立)

(四) とんぼのうた

○油かい、茶かい

油一升かてころ。(楽譜9)

とんぼをとるのに、鬼ぐもの巣をとつてばをつけてそれを練る。ねばってきたのを木や、しもの先につけてとんぼをとる。とつたとんぼの尻に小さな花をつけて飛ばしてやる、このときにうたう唄である。とんぼを捕えるのにこの外のやり方もある。草ぼうきなどでも捕える方法もある。

(四) テツコバツコ(ありじごく)のうた

○テツコバツコ。

にしが山がやけるから

早く起きて水かける。(楽譜10)

納屋の乾いたやわらかい土のところや、山のくずれた乾いたやわらかい土の所に小さいありじごくの巣がある。

この中のあり地ごくを捕るのに指で少しずつ、てっこばつこの巣をこわしていく。このときこの唄をうたう。捕えたとつこばつこは、小さいびんなどに入れて、てっこばつこ同じけんかをさせてたのしんだり、乾いた土を入れて、てっこばつこに巣を作らせたりする。

(四) 十日夜のうた

十一月十日、朝はうどんを作る家もある、夜はもちをついて食べる。

子どもたちは、わらで薬鉄砲を作り家々の軒先や、近くの畑のあぜを薬

鉄砲でこの唄を歌いながら打って歩く、薬鉄砲がよく鳴るようにと、薬鉄砲の芯にやつがしらの葉柄(いもがら)を入れなわをまいて地面をたたく。

蒔いた麦をモグラや野ねずみに荒されないために(特に蒔きつけた麦をモグラが持ちあげて麦を枯せられないために)薬鉄砲を打つのだという。

○十日夜、十日夜

薬鉄砲で

ひつばたけ。(楽譜11)

あとがき

梅田の伝統音楽はすばらしい、しかし、祭はやしや屋台が現在みあたらないのが残念である。古老はかつて芝居も屋台も盛んであったといっているが、おはやしの姿がみられなかったのは誠に残念だ。日本の伝統音楽の代表である祭ばやしはかつてこの地でも脱演など行われたのではないだろうか、また盆踊り唄にしても、歌い手だけが細々と残っているだけで、その伴奏者である。樽も、笛も、鉦も出来る者はすでに消えていたことが、かえすがえすもなく残念なことである。あと数年したら、八木節の原流であったと思われる、梅田の盆踊り唄の歌い手も、それを伝えることなく永遠に消えてしまうことであろう。

子どもの遊び唄にしても、テレビ等の進出もあつてか、子どもの遊び方もまったく変り、遊びをともなつた唄(わらべ唄)もぐんと少ない。歳事唄にしても、歳事そのものが行なわれなかつたり、また、変化したりで例え、十日夜唄なども実際に薬鉄砲を作つてはやらないが、古老の方々が思い出したように歌つてくれた。梅田の伝統音楽も、今五十才以上の成人の方々の心の中に細々と残されているだけで、この方々の次の世代の伝統音楽のことが、淋しく思われる。

1. 梅田追分

ゆったりと

よくよ—そめ えた—よ —

ばくろさんの —ゆ か — た — か

たにや— か げ うま — すそ

には く り — げ — せ な

かにや せ んりよ と —

は や か い て あ — る —

※ (あいの手)

あ ちく しょめ どこ とる まん なか

とりゃがれ やな だの しゅく だぞ おじよろに

わられる ひやく に さん じよの えさ をく

い なに が ふそ くで へを たれ る

$\text{♩} = 80-100$

2. はたおりうた

はたがおれ な— い は た が— み

さまよ — どう ぞこの手 が あ がるよ— に

4. 子もりうた

♩=80

ねんねん ねやまの しろねこ が
 あしだを はーいて おりてく る
 あしだじゃ あぶない じよんじよが い
 じよんじよの はなおが きれたな ら
 あーかい はなおで たててや れ
 しーろい はなおで たててや れ
 ねんねん ねんころ ねんころ り

タツペの唄(忍山)

♩=92

次 郎 太 郎 タツペの 子
 タツペが たつたら ふんげえ せ

7. ほたる来い

♩=72

ほたる こい あんどの ひかりで
 やんぶし こい
 とんで こい あつちの みずは
 にがいぞ こつちの みずは
 あまいぞ ほほほたる こい

8. からすからす

$\text{♩} = 100$

からす からす かんざぶ ろう
 おめえの ろちが やける ぞう
 はやく けって みずかけろ
 みずが なけりやあ ためかけろ

5. 悪態うた

$\text{♩} = 72$

おじゃん どこだい いしがも かい
 しょうべは なんだい すみやき かい
 どうりで かおが まっくろ だい

11. 十日夜

$\text{♩} = 80 \sim 92$

とう かん や とう かん や
 もぐら でっぼうに まける な

10. てっこばっこ

$\text{♩} = 88$

てっこばっこ に しが やまが やける
 から はやく おきて みずかけろ

9. 油かい茶かい

♩ = 96

あぶら かい — 茶 かい —
あぶら — 升 かって て こい

6. なる木ぜめのうた

♩ = 92

なる か なんねえか なんなけりゃ ぶっきるぞ

3. 風船つきうた

♩ = 76~88

いちの木 二の木 さんの木 さくら
さくらの もとに おひめと じよろと
べにかね つけて どーこえ ござる
お江戸へ ござる お江戸の みちに
はねのはたと とりと はねのはえねえ とりと
ぎちぎち ぼさぼさ とう ついちゃ いつかんよ

ぞうりきんじょきんじょ(馬立)

♩ = 92

ぞうりきんじょ きんじょ あたまが たんぐりたんぐり
はしもと よーじん さいたか さかぬか いまさき
そろばん みょうみょう くるまで あらすけ こすけ

人の一生

はじめに

妊婦に対する予兆、呪術、禁忌、安産祈願、虚弱児や厄年子に対する捨児などは、県内一般にみられるものであった。然しケガレに対する忌みの観念は、かなり濃くみられた。そして納戸での坐産を、何のくつたくもなく語る老婦の顔も、産後の食事については、そのきびしさをかみくだくように語っている。

袴着、帯ときの祝いは、最近の七・五・三の観念とは違つて、より厳粛な意識があつたようにみられる。

古い形の若衆組の姿は既に見られない。然し若衆も明治の中頃までに生れた人は、夜遊びを楽しんでゐた。大正期に入つて、青年集団が近代化し、目的をもつた一種の学習集団となると、夜遊びもなくなつていく。

他の項目でも述べられているように、この地域は一部栃木県安蘇郡田沼町飛駒(旧飛駒村)で、近年桐生市に分村合併しており、古くから行政区域は別々であっても、生活圈は同一地帯という関係にあつた。従つて県を別にしても婚姻圏は同一であつた。次で勢多郡東村との交流が濃く、桐生とは意外に淡かつた。然し戦後も社会、生活の変化によつて離農者が増加し、桐生との交流が急激に増加した。それに伴つて婚姻も多くなつてゐる。

恋愛ということも殆どなく、或は見合ひさえなくて、若くして親同志

のいつとはなしの話し合いで結ばれてゐたものが、現代的な恋愛結婚に変わりつつあり、その際の親の立場も次第に弱まりつつあるようである。

次にタチガタムとアシレが同一化しているようにみられる。そしてアシレしたあとそのまま婚家に止まつたり、一、二日で実家に帰る後日あらためて結婚式をあげたり、その形式は一定してゐないが、いわゆる「足入婚」としての意識はみられない。

葬制については、この地方にもコオリトリやお百度まいるの習俗がみられた。本県北端の利根郡片品村で最初の総合民俗調査が実施されたとき、この習俗が注目され、爾來十二回、東端のこの地域でも同様である。人間が生と死の境におかれたときはげい願いのあらわれである。

清水部落で、仏を棺に納めてからアクマツバライのマクリダシを行なつてゐるが、これが山地附近では、葬式の出たあと臼を転がすことになつてゐる。何れにしてもケガレを払い出す現実的な所作であり、埋葬が終つてのキヨメでいろりをきよめ、火を新たにする習俗がかなり丁寧に残つてゐること共に注目される。(池田 秀夫)

一 誕生

(一) 妊娠・出産

腹帯 一丈の布を五尺と七尺に切つて、それをぬつて、五カ月に入つ

ての初めてのイヌの日に、産婆が腹に巻いてくれる。安産祈願。(萩平)
葬式のとときのハタでしめると安産する。葬式があったときなど、はら
んでいいる人がいねえかなどといったことがある。

とうちゃんの六尺ふんどしをしめると安産する。(清水)

妊娠子兆 双子の場合は四角張った腹になる。(萩平)

妊婦の顔が特にやつれていると男が生まれる。(萩平)

妊婦の腹の右側で胎児が動くと男、左側で動くと女だという。また腹
の中で荒く動くと男、細かに動くと女だという。(萩平)

妊婦が右足で敷居をまたぐと女、左足でまたぐと男が生まれるという。

長男或は長女が赤坊のとき、モモにクビレが二つあると次は女、一つ
だと次は男だという。(萩平)

妊娠呪術 お産が重い場合、水を神様にあげそれを下げて飲むと安産
する。(萩平)

妊婦が鶏のヒヨコの初卵を飲むと軽くなるという。(萩平)

帯をしめたらゆるめないようにすると、胎内で小さく育ちお産は軽
い。

ヒシヤクを買ってきて、底をスポンと勢よく抜いて神様にあげると軽
くなる。(萩平)

大胡の産婆様からユビワを受けてくる。産気づいてからこれを指には
めると軽くなる。(萩平)

妊娠禁忌 妊娠したら漬物石など重いものを持ってはいけない。また
高い所に手をあげてはいけない。(萩平)

仏様をみてはいけない。見ると黒いアザの子が出来る。どうしても見
ねばならないときは、両面鏡をふところに入れてみる。(萩平)

火事を見てはいけない。赤いアザの子ができる。或は火事をみたとき
手を触れた所にアザができるともいう。(萩平)

兎をたべるとミツクチの子が生まれる。

産後一週間はイルリの火をいじってはいけない。火がたるといふ。

一週間目におばあさんが赤坊を抱いてきて、イルリの四隅に塩をあげて
きよめる。(萩平)

産後二十一日或は一カ月、橋を渡ってはいけないという。(萩平)

カマドに薪をくべるとき、薪のものの方から先にくべるとお産が重
い。ウラ(木の先端)から先にくべると逆さ児が生まれる。(萩平)

二十一日とか三十一日以前に井戸へ行くと水が穢れるといった。又、
二十五日前には橋を渡らない。(居節)

妊娠中に死んだ人を見ると黒いアザができる。(清水)

妊娠中に火事を見ると赤いアザができる。(清水)

やむを得ないときは、鏡を帯にはさんでいればよい。(清水)

うさぎの肉を食うとミツクチになる。(清水)

産婦は宮参り前には橋を渡ってはいけない。(猿石)

妊婦が馬のカナダツをまたぐと、十二カ月胎内にいるという。これを
ウマッコという。馬は一年胎内にいるからである。(萩平)

男のツワリ

亀ヤンという人は、奥さんが妊娠したりすると、ふしぎと食事が進ま
なくなってしまう、その反対に奥さんの方は腹がへってしかたがないほ
どで、かまのふたなどをとればほんとにいいにおいがしてきて早く食べ
たくなるのだという。

(清水)

安産祈願

上蓋の塩の宮神社の
お札を受けて、子取り
ばあさんが産婦にくれ
た。(皆沢)

山王様は産の神様だ
から、よくお百度詣り
をして安産を祈った。



子育て地藏(石鶴)
(撮影 阪本英一)



子安地藏 (後沢)
(撮影 池田秀夫)

乳の出ない時は桶の葉を買って、セシジのむ、百度詣りは裸足でやった。鳥居と拜殿の間が百間ある。一人でそこを百往復しなければ価値なし



子育観音 (寄日入口)
(撮影 池田秀夫)

りで、このときは二人でゆくもので、ひとりずつ上げても連れに行ったり人が下げていいことになっていて、食べるのはどちらが食べてもかまわない。

上げるも信心、

しという事になっていた。(唐館)
他所の信仰産泰様から腹帯を借りて来た。これは勢多の荒砥(現在前橋市)。他に小俣の弘法の池、岡平のお茶の水、理趣文の水等は買って来て、まわりの人が神棚へ上げておがむ。その水を産婦に飲ませると、早く片づく。(唐館)

お産のときにたちあう神さまというのは、赤ん坊が生まれたときにごはんを上げる神さまをいうのだらうから、ウブスナサマだらう。小さいときの赤ん坊の無心の笑いは、ウブスナサマが笑わせたという。(石鴨)

根本さまのところにあるウブスキさまにオガシニョをかける。ジュウニの向う向きのものがウブスキサマだ。オガシニョボタンには、一升でも二升でも、ひとりずついたものを全部上げてやるのがさま



子安観音堂 (湯沢) (撮影 今井善一郎)

下げるも信心、という。(石鴨)

子育観音

下湯沢にある。毎年一度八月九日(十日がお祭り)お米を出し合って団子を作り、翌日和尚さんが来ておがんでくれる。ローソクが小さくなると、近所の赤ちゃんの生れる予定のある家では、その燃え残りをもってゆき、産気づいた時、それをともすと、ローソクの終らぬ中に安産する。その為か下湯沢には難産の人はない。(湯沢)
湯沢の接松寺の跡にある、赤ん坊を懐に入れてる。その赤ん坊を借りてゆくと安産する。(大門)

安産

にわたりのハツウミ(初産)をのませると安産する。
ママにはたらくと安産する。(清水)

お産

実家へ行って産むことはほとんどない。世話はシユウトサンがやる。シユウトサンが弱いときなど、できればサトカタから母親が来て一週間ほど手伝ってくれたこともある。

現在は病院で産むのが多くなった。(清水)

トリアゲバアサンはいない。近所のきょうな人がやってくれたもの

で、あるおばあさんが死んだとき、トリアゲでお祝いにももらったものを全部袋に入れてもつていたといひ、葬式ときには何十人という人が来てくれたので、その子どもたちの名を書いた帳面が残っているという。

(石鴨)

第二子以後は産婆でない近所のオバアサンにたのむ。家の年寄りが取上げることもある。

お産は、神様の居ない部屋、ナンドでした。畳をはぎ、コモを敷いて、古布からうすい布団を敷き、東向きになって、坐産でそれも最儀一俵を買ってそれにつかまって産んだ。或は腰のすじがひきつれたので、立つて人におつかかかって産んだ。このとき年寄りがついているが、仰向けになつて産婆がついていて産んだときよりも、坐産がずっと楽だった。

(萩平)

お産の重い人は天井からつるした力づなになつてした。

障子のさんが一本一本見える中はお産にならないとされていた。又お産の軽い人をイヌバラミといわれた。(大門)

お産は八、九分は婚家でやつた。今は産院が多い。(猿石)

産の姿勢 昔はうつぶしてお産をしたが、戦後は仰向けになった。その後、伏して産んだこともある。(猿石)

産部屋、暗い部屋、納戸など、昔は畳をしなかつた。(居館)

納戸でたたみ上げて、そこにわらをして、背にわら束を当てて、お産をした。二十一タビリ(わら束の数)を当ておいて、産後一日に一タビリづつはずしていった。(大門)

針仕事はしてはいけなさとされてた。肩を使ってはいけなない。(居館)

一つ棟で二人が同時に産むと勝負があるのできらつた。猫と人の場合も同じであった。(大門)

お産の場所は納戸に移つてした。平素とちがう寝室で、薄暗い部屋である。畳を取りわらを敷いてその上でお産したので、昔は「わらの上か

ら育てる」といった。(猿石)

産の形、昔は坐つて、コタツヤグラかなにかによりすがつて産んだ。

(居館)

昔は薬束によりかかつて坐つてお産した。納戸でした。産婆は近所の年寄(経験者)がした。今は勿論産婆をたのむが此の頃は病院が多くなつた。(大門)

むかしのお産は座産で、自力で産んだものだ。近所の産婆のおばあさんをたのんで、腰のあたりをさすつてもらつた。

お産をしてからは、直徑二寸ぐらいのわらの束を二十一つみあげておきそれによりかかつて、二つ折りにした布団の上にすわつていた。脚気にならないようにとすわつていた。一日にそのわら束を一つずつとつていった。二十一日たつと、はじめて横になれた。それまでは横になれなかつた。(橋詰)

昔は麦つ俵にかじりついて産んだ。四布ぶとんを巻いて、ひもで固くしばつてこれにおつかかかつて産んだ人もいて、大きい枕をつくとサンシの枕のようだとつた。

産婦が寝ているのをみて年老りが「あんな馬が寝そこなつたようなかつかう」していたら産めまいというので俵をもつて来てくれたら、これをまくじつてアオで産んだら、半分ぐらいいしお腹が痛くないといつた。(石鴨)

産 婆 一 生心づけをする。死んだときは見送りをする。トリアゲ

バアサンという。

庭野喜平次ジイサンは男でも取り上げた。その外は近所の女の人が産婆をしてくれた。(居館)

取り上げ婆さんの碑

産婆の制度ができる前に、地元に取りあげ婆さんがいて、近在の人々のお産の面倒をみていた。大正七年にその取りあげ婆さんの世話になつ



桑原勢喜子頭影碑
トリアゲバアヤンに産子が感
謝して大正7年建立(橋詰)
(撮影 関口正巳)

た人々が
募金して
石碑を建
立したの
が残って
いる。
桑原勢
喜子の像
老婆者

嘉永元年十月十日生栃木県安蘇郡上彦間村長沢権次郎氏の三女慶応二年六月二十五日群馬県山田郡二渡村四十七番地桑原吉五郎氏嫁質性温厚柔順而 泰家事之整理側仕夫貞節也或日有所感而為社界欲尺常念頭於不離遂産婆之仁術領得爾來其与恩惠者枚舉不遑然令 壯齡而老於養齒 其功績偉大依而其功於表彰其勞於 籍剛答与有志共相計鑿石像於建設表意者也(猿石)

トリアゲ孫

お産をとりあげた子どものことをトリアゲ孫といい、お七夜、オプヤキ、誕生などの祝いごとに招んだ。その子が嫁にゆくとときや、ムコをもらうにも招んだ。

病気の見舞いにも、葬式にも行った。(石鴨)

ケサガケ鬼、ヘソの緒をたすきにかけて生れると、オシヨウのケサガケで生れたという。(萩平)

ヘソの首に巻いて生れてきた子は三本辻に捨て、坊主に拾ってもらう。(大門)

袋 子 この場合口の部分が動くので、そこをすばやく切らないと窒息する。袋はゴサンと一緒に亭主がお墓に埋める。埋めた上を通った動物(それが犬でも毛虫でも)を子供がこわがるから、通らないように埋めた上に棒を立てる。(萩平)

ヘソの緒 (ヘソの緒はティツソク(大人の手で一握り分)に切る。そして長男の分だけは、或部分とっておいて、麻でしばって洗って干しておき、熱さましに使う。長男以外の者の分は屋敷稲荷に納めた。ヘソの緒はいつまでたってもかびないものである。

ヘソの緒をしばった麻の余りで母親が髪の毛をしばると、頭に血が上らないという。また女の人のコウデのときに、鉄瓶のつるをくぐらせて向う側から、シマイッコ(末子)に男の子が生れたときの麻ひもでしばってもらうと治るという。(萩平)

生後一週間ぐらいたつとヘソのおは自然にとれる。生年月日を書いた紙に包んで取っておき、生まれた証拠にする。大きくなると本人に渡した。(猿石)

稲荷様の下へ上げた。お七夜に頭の毛を一寸切って、それと一緒に稲荷様に上げた。(居館)

ヘソの緒は、しまっておくと遠くに行っても必ず帰って来るといので、多くの家で屋敷裏へしばっておいた。かやぶき屋根なのでなくさないようにしておくわけだが、いまの孫どもは、おいなりに納めちゃった。

目が悪いときに、ヘソにお湯をかけ、この水で洗ってやるとなおるとい。(石鴨)

後産 後産がなかなかおらない時は、下駄と草履を片ちんばにはいて、家の周りを三回廻る。従って普段は片ちんばにはいてはいけな(萩平)

人にふまれるほど、またがれるほどよいとされ、敷居の下に埋めた。(大門)

ノチ産はぼろ布で包み、油紙にくるみ、かめに入れて方角を見て埋めた。汚れ物もアキの方に穴をほって埋めた。(猿石)

エ ナ トブグチの跡いで入る処へ埋けた。又親が最初に踏んだ。(居館)

流産 ナガレゴというが、流産した児でもまだ形をなしていない児はミズゴという。形があると墓地に埋め、坊さんに供養をたのむ。

(萩平)

墮胎 昔は胎児をおろす方法として、ホオヅキの根をさし込んだりせんでのんだ。また生いかをたべた。或はさつま畑をマクレルと転がって流産しやすかったという。(萩平)

(二) 生児儀礼

マクリ 生まれるとマクリを飲ませて胎便をおむつに取った。砂糖湯をくれておき、母乳が出ると飲ませる。(狼石)

赤ん坊には生れると間もなくホーズキの根のしほり汁か、マクリをのませた。虫切りといった。(居館)

産湯 取りあげばあさんは胎児が無事に生まれると、肌着に包んで置き、まず産婦の始末をする。そのあと生児に産湯をつかわせる。産湯はお産で使ったものを洗っておき、家の裏の方へ棄てる。庭先へは棄てない。二回めからはお風呂の湯と同じことで、どこにでも棄てられる。(狼石)

うぶぎ 生れてとりあげるとすぐとりあげたばあさんが着せた。これは前もって準備しておく。男が生れるか女が生れるか判らないから、普通無地のもので、さもなくば麻の葉の柄のついた、袖口、紐、すそを、うこんに染めた着物を着せる。このとき着せながら「うこんのすそは何故つける。うこんたれてもわからぬように」といった。この着物は本来ならしゅうとが買ってくる。(萩平)

子どもは生衣に、六尺の布で一枚とれるきもの。男は青、女は赤の麻の葉模様。素性よく育つように、またしらみとのみがつかぬように。その家で作る。(馬立)

生まれるとすぐ、もめんの肌着を着せて取り上げた。その後、麻の葉の柄の着物を着せると丈夫に育つという。(狼石)

産の生家より

子どもが生れるとカツオブシ一本とカンビョウ。初子の場合オボギ、よい家では紋付を届ける。(馬立)

初産 初産のときには、里方からおはぎをもってくる。また里の親は、産婦のところへ米とかつぶしをもってきた。(橋詰)

ウブタキ 赤ん坊が生れるとマスカツキリ(一升)の米を、お産に手を出さない人がたいて、(荒神様はウブ一血)を産うからで、普通でも女性が月経のときは荒神様に手を出不さぬ)産婦のたべられるものをそえて神様に供える。これをウブタキという。一升たぐの一生くえるようにという意味である。神様に供えた残りのご飯は、手伝ってくれた人がたべる。(萩平)

ミツメ 生後三日目、豆を煎って砂糖をつけ、産婆、近所の人に茶菓を出す。ママに育つようにというわけである。(萩平)

オビチヤ 生後一週間。この日名前をつける。それは三本のくじを神様にあげて、長男の場合は祖父又は父親が、次男の場合は長男がひいて命名する。次で年神様に名前を書いてあげ、報告する。寄った人には赤飯を出し、嫁の生家、兄弟、近所の人、トリアゲバアサン等にも贈る。

また赤ん坊の額に、紅で「犬」という字を書き、仲人が作ってくれたお祝いの着物をかけ、トリアゲバアサンが抱いて、隣三軒の便所を廻る。このとき水引きで結えたオサゴ、オカシラツキのゴママ二匹にカヤの箸を持って行き、オサゴ、オカシラツキは便所の神様に進めてから、便所の便をはさんで赤ん坊にやる真似を三回する。これは犬になって廻るからである。(萩平)

子どもはひたいに「犬」の字を書いてじょうぶに育つようにと願った。理くつと効果はつけ方でどこにでもつけられると笑う人もあった。(大門)

七日目にする。三つの名を紙に書き、一升ますに入れて、屋敷いなりにお供えておき、一つを取り出し、その名をつける。(大門)

生まれた子の顔に「犬」の字を墨で書く。犬のように丈夫に育つようにとの呪いである。(猿石)

生後お七夜には、生児を産婆が抱いて屋敷稻荷や便所を回る。近所の便所も一軒ぐらゐ廻り、オサゴを上げてくる。(猿石)

七日目を七夜といひ、隣近所三軒の便所へ赤ん坊を連れていった。この日に又、赤ん坊の顔に犬の字を墨で書いた。犬はうんこをたべても生きていくという。モロコシの箸で便をたべさせるまねをした。(唐居)

生まれて七日目、お七夜にオヒヤマイリをする。自分の家の便所に行くもので、オサゴと、親の食べていた箸を紙で包み水引きをかけたものを持って、子どものひたいには紅でも赤ちんでもいいから「犬」と書いてゆく。この字がヨコタ(横の方)にまがっているとコンジョウウカカリになるといふ。このとき箸で食べるまねをさせる。

これから帰るといふりに連れて行き、右まわりで四隅にあたらせて、下の家、上の家のいりりと三軒のいりりにあたらせ、やけどよけをする。(石鴨)

子供のお七夜には産婆を呼び、近親者を招いてごちそうした。便所回りもした。(猿石)

命 名 名を付けるには暦を見て姓名判断などしてもらう人もいふ。好い字の名前を三つぐらゐ選んで神棚に上げておき、子供にタジをひかせて、ひいた名を三つつける家もある。(猿石)

女の子ばかり或は弱い子ばかりという場合「アグリ」と命名する。(秋平)

産婦の食事 昔の産婦の食事は、オカユ、ミソ、ミソヅケ、カツツシのみで、オカユも二杯までだった。それで一週間は寝ていなければならず、ナンドから出してもえなかつた。この間はお粥、あとは麦飯で、甘い物は一カ月位、辛いものは二カ月位たべない。油物は百日ぐらゐられなかつた。(秋平)

切餅を食べると出血がある。四日目ぐらゐに一切れならよい。食べて

いけないもの、やつがらし、とろいも、そば、油もの。(大門)

産婦の食べ物は極度に制限されていた。かつぶしに焼き塩、梅干し、みそ漬け、見舞にもらつた干びようぐらゐのもので、油気は百日たなといふと食べてはいけないとされた。パンなども食べると母乳が出なくなるというので、食べられなかつた。今の人は何でも食べられるが、母乳の出ない人が多い。(猿石)

昔は産婦は、梅干、塩ぐらゐで、オカユをたべていた。(唐居)

産婦は三十日位は、おかゆとかつぶしと味噌ぐらゐしかたべられなかつた。かつぶしのないときには、やき塩をなめていた。百日位は油物は全然たべさせられなかつた。大根、人蔘、里芋などをたべていた。ねぎは自然の毒になるからとて、切つてはならないといわれた。このようなので産婦は頭の毛が抜けてしまった。髪の毛をとかすと毛が抜けて、かもしができた程であつた。(橋詰)

産婦の食事はミソとオカユくれえで、だから髪の毛がいつぱいぬけたんだらう。

今の子は夜泣きしないのも栄養がいいせい、昔は乳が離れると泣いたもんだつた。

足を出しているると乳が出ねえといれたたりした。(石鴨)

うぶ毛 うぶ毛は一旦剃ってしまう人もいふ。一、二回剃ると毛が濃くなるというので、女の子などは年寄りが剃つてやる。(猿石)

お宮まいり

生後二十一日目にお宮まいりする。神社へ行く。女の子の場合には鳥居のところまで行く。男の子の場合には鳥居の先まで行つておまいりする。このときお供えするものは、赤飯(重箱に入れてもつていく)、おみき、きんぴらなど。おまいりしてから、これを近所の子どもたちに分けてやる。(皆沢)

子供が生まれて二十一日目には、赤飯を重箱に入れて明神様のお参りに行く。生児が女の子の場合は鳥居をくぐらないで、手前で待つてい

る。赤飯を神様に供えてから、集った子どもたちの手ツピラに少しずつはさんで分けてやる。(皆沢)

オボヤキ。生後、男は二十九日、女は三十日、(入飛駒は男が十九日、女は二十日) トリアゲバアサン又は親戚の者が抱いて、お稲荷様(屋敷稲荷)に詣る。このときの着物は、母親の実家で作つてくれる。

この日チンゲを残して頭髪をそる。そった毛は紙に包み、お稲荷様に供える。チンゲは鼻血が出たとき一本でも抜くと止るといふ。(萩平)

男の子は二十一日、女の子は三十日目に氏神様日枝神社にお参りする。(大門)

男は二十一日目、女は三十一日目が生部屋明といった。(居館)

生後三十日にウブスナ様(二渡神社)にお参りした。親戚をお祝いに呼んでそろってお参りした。ここで氏子入りになる。産婦はこれまで神参りではできないし、当日も行かない。(猿石)

血ブク 産婦と夫は三十日間ぐらひは、よそのお祝いにも遠慮して行かない。親たちならかまわないのでかわりに行く。

丈夫な産婦は三週間たてば仕事をやる。(猿石)

クイゾメ 生後百十日。赤ん坊のお膳茶碗等を買ってきて(これらは一式セットで売っている)、川から小粒の石を拾ってきたのを茶碗に入れ、石を赤ん坊にやる真似する。こうすると歯が丈夫になる。このとき一番先に御飯を一粒口に入れ、すんなりたべる者は大食になるという。

(萩平)

百十日目に食い初めを行なう。膳の上に石二つ、ごはん、汁を供える。石は固いものでも食べられるようにと願う意がある。(大門)

膳の上に青石をのせる。(居館)

男女とも生まれて百十日が食い初めになる。初子るときはやって、二番目からは略されちゃう。

その日、新しいお椀などを買って来て用意し、川から真石を拾って来てオサイにして、箸ではさんで食べさせるまねをする。石でも食えるよ

うな歯が生えて、丈夫に育つようにお祝いをする。下の子は食わしてくれないも自分で食うわあ、といって略されるわけである。(石鴨)

生れて百日たつと、子どもの膳を一揃い作つてごちそうを盛り、食べさせるまねをする。その時に、庭先の小石をきれいに洗って膳の上に置き、子どもにめさせる歯が丈夫になる。(猿石)

(三) 育 児

もらい乳 母親の乳が出ないとき、いきなり濃い乳を飲ませると下痢する。或は目やにが出たり赤くなるので、もらい乳をした。乳をもらうとその最後のとき着物、下駄、帯を買って乳母にお返しをした。昔は乳母の子供とは、大きくなるまで兄弟づきあいをした。(萩平)

チンゲ

生まれた子は、もとはお七夜にきれいにすつてやった。すつた毛はイナリサンに上げた。

大きくなってチンゲを残した。ころんだときオカミがひつばつておこしてくるからだといわれ、鼻血止めにもなるといつて残した。年老りのいた家では最近までやった。学校へ上るころとつた。

いまは生毛は百日前にすると見えない小さな傷が百つつかからいけないといつてすらせないし、チンゲも残さない。(石鴨)

小さい子がいろりに入りそうになるとき、チンゲをひいてとめてくれる神がいる。(清水)

香電坊主 大正十年ごろまでは、七つまでの子を香電坊主にした人も

いる。弱い子供を健康に育てるために、太田の子育香電様に願を掛けてやるもので、学校へ上がる年にまだやっていた子もいる。後に少し毛を残したが、ぐりぐり坊主にした子もいる。(猿石)

捨 子

生れつき弱い子は名前をとりかえる。例えば正子を正夫、正行、正治などとし、後者は戸籍上の名でなく、呼び名とする。こうすると丈夫に

なるという。

また三本辻に寒くないようにして捨て、あとを振返らないで帰ってくる。子め話合っておいたお婆さんがその赤坊を拾ってきて、あらためて捨てた人がモライッコにして育てる。このとき名前をかえる。

父母の厄年に生れた子も一度捨てて拾ってもらう。そうでないと弱くてなかなか育たない。これをヤクドシッコといい、大きくなると特別に役に立つといわれる。

こうして拾われた子は、必ず拾ってくれたお婆さんの家に行つてトシコシをする。誕生日、盆、暮には出来たものをもってお婆さんに届け、死ぬと葬式に参列する。即ち親としてのつきあいをするのである。(萩平) 四十二歳の二歳子は三本辻に捨てる。拾ってくれた人をヒロイ親として一生盆暮には物を持って行く。(大門)

身体の弱い子は外に棄てて子をするまねをして、すぐに拾ってもらつたり、名を取り替えたりした。正式の改名でなくオカミナ(お上名)に對して呼び名を替えた。(猿石)

厄年っ子は一度道ばたに捨てて、あるたのんでおいた人に拾つてもらう。拾い親という。(居館)

オニツバ 生れたとき歯が生えているとオニツバ、六カ月の赤児で歯が生えるとオニバという。こういう子は親の面倒をみないようになる場合が多い。別居したり親が死んだり、いわゆる親にウスイという。(萩平)

子どもが腹にいるときに、親があんまり栄養をつけると、腹の子に栄養がついて早く歯が生える。そんな子を鬼っ子という。いまの子は栄養がいいから目が見えるのが早かったり、夜泣きをするのもいなくなったように思われる。(石鴨)

初誕生 餅をついて塩あんを入れ、お祝をもらった全戸や親戚などに、重箱に五ヶ入れて配る。甘いあんであると甘くみられるとして作らない。また餅でお供えをつくり、風呂敷に包み、紅白の水引でしばつて

赤坊にしょわせた。しょつたまま箕に入れ、それから遣い出させる。

(萩平)

嫁の実母が子どものはきものを贈る。力もちという、一升のタンジョウモチを背負わせる。(居館)

子供の誕生日には紅白のお誕生餅を作って、親戚や世話になった人に配る。餅は直径二十センチぐらいの大きさに丸め、あんこは塩つばくする。お産見舞をもらった家にその餅をくばる。家にはお客を呼ばない。(猿石)

餅ついて背負せる。二足でも三足でも歩ける子は丈夫になる。(居館) 誕生日にはもちをつけて祝う。あんこのもちをつくるが、甘いのは塩味のもの二通りにするが、塩あんはアマクミラレネエようにつくる。もちを五つ子どもに背負わせて、みの中にはいこませ、みの中から歩かせる。早生の子はこのころまでに歩き出すもので、誕生までに足袋とぞうりを三足ずつはき切ってしまった子もいるが、これほど早いのは珍しい。(石鴨)

初節供 生れて初めての節供には初節供といって、親戚から贈り物をする。女の子は三月節供でヒナ人形を贈られ、お返しにおコワやスルメや酒に桜餅をつけてやった。男の子は五月節供にノボリを贈ったが、贈る家と贈られる家の紋章を入れた。こいのぼりを贈ったが、吹き流しはほんにと力のある人からもらう。この飾りの出し入れが大変だった。お返しはおコワやスルメに酒をつけ、拍餅を作つてやった。今の方がはでになった。なお、大正年間に座敷のぼりがはやり出した。(猿石)

オトモリ(子守り) 他所からやとつたオトモリッコはなく、兄姉やおばあさんがやる。ネンネン ネコノケツイ(へ) カニガ ハイコンダ イツビヤダト オモツタラ

マタハイコソダ

オサンハドコイッダ

アブラカイニ チヤカイニ

アブラヤノマエデ

スベッテコロンデ

アブライッシヨウ コボシタ

ソノアブラ ドウシタ

タロウドノ イヌト

ジロウドノ イヌガ

アブライッシヨウカンナメタ

ボウヤノコモリハ ドコイッダ

アノヤマコエテ サトイッダ

サトノミヤゲニ ナニモラッタ

デンデンダイコニ シヨウノフエ

子守唄

ねんねネコの穴にカニがはいこんだ。一匹だと思ったら二匹はいこんだ。(これ以後数をふやしていく。)

なくとながもちしよわせるぞ。

わらうとわらじをはかせるぞ。

ねむるとねずみにひかせるぞ。

子守り子

赤子は一年もたつと子守りっ子におぶわせた。彦間の方から子守りっ子に来る子が多く、機屋の臨時の手伝いもやった。年寄りのいる家では

おばあさんが子守りをした。(猿石)

おもち 生児のおもちはガラガラやおしやぶりだった。おしやぶ

(石鴨)

りは長さ十センチぐらいの木の様で作ってある。(猿石)

子供の病氣 子供がバヒフ(ジフテリア)にかからないように、赤い色紙に墨で馬の字を三つ書いて、トボロにさかさにはっておくと、病氣がはいらないという。(猿石)

夜泣き 子供の夜泣きをとめるには、稲荷さんにお参りして油揚げを供える。また、物知りのおばさんに呪ってもらった。今でも虫封じのお札が柱に貼つてある家もある。夜泣きがとまらぬ時には、それに釘をぶちこんでやる。(猿石)

夜泣きがひどいときには、おらを叩く槌棒にひもをつけて、ダンナ様が家のまわりをひいて歩くという。ある人は一晩中まわったという。

(石鴨)

夜泣きのときは、屋敷いなり様に願をかける。治ると赤いごはん(赤飯)に油揚げを供える。(大門)

△ シ

神主さんのところへ(子どもの下着)をもって行って拜んでもらった。

いなりさんにオメカキ(おかけ)をつくつて上げる。

子育て地蔵にオガンシヨをして、そのオメカキを借りて来てかけさせ、直ると新しいのをぬつてなす(返す)。(石鴨)

ドウロクジン 石宮である。正月のドンド焼きはやらない。足の痛い人はかねのわらじを供える。

子供がエボル(ぐずること)ときは、根性がねじれているのだから、ねじれた木を切ってきて供える。

穴の病氣の人は穴のあいた石を供える。(萩平)

ホーソー神さま

ホーソーをすると十二日間ホーソー神さまをまつり、十二日間たつと送り出した。

ホウエンサマに赤い色紙を切ってもらって、サンダワラの四方をつる

してカイドに下げた。毎朝オシラキに入れてごはんを上げ、ホーソー熱のさめるまで上げて十二日で送り出す。

(ハシカはイノチサダメ、ホーソーはキリョウサダメという。)(石鴨)

齒 抜け 下の歯が抜けると屋根にあげ、上の歯が抜けると縁の下に入れる。そして「自分の歯は早く生えろ、鬼の歯はあとに生えろ」という。(萩平)

イジッコ 養子ももらったあとで生れた子は、イジッコ或はヤキモチッコという。この場合先にもらった養子は、他家にやるのが普通である。従ってこのような養子をするときは、女の子を養子にしておいた方がよいといわれている。(萩平)

双生児 二卵生の異性の双生児は、心中の生れ代りという。そしてどちらかが欠けやすいといわれる。(萩平)

子供組 以前は別になかった。道祖神祭もしなかった。(猿石)



子供会行事連絡 (居館)
(撮影 今井善一郎)

寺子屋 寺子屋で教えて

いたころは、師匠ものん気で、朝子供に教えておいてから山仕事に出かけ、山へ行って来てからまた教えたりした。月謝は盆・正月にぼた餅を入れて持って行った。(皆沢)

子供のはき物 今倉学校に通っていたころはワラジョウを毎日一足ずつはいた。オナベ(夜仕事)にはソウリ作りがひと仕事だった。雨が降るとワラの横緒のついた相下駄をはいた。(皆沢)

一 年 祝

腰巻き祝い 三歳の子に餅の腰をおばさんが買って贈る。(大門)

オビトキ むかしは、男の子も女の子も四つでやったのがふつう。

四つとき——オビトキのお宮参りのときヨツキを着せる。

ところが四つに年にこしらえた着物の、いいところ一年か二年で小さくなって着られなくなるので不経済だから、だんだんにのぼして七つでやることになった。だからオビトキは、いまでは七つでやるようになった。(清水)

女つ子が七歳、男つ子が五つでやり、帯をしめてくれ、オコワをふかして天神さまにお参りする。このときにはチングはなくなる。(石鴨)

帯びときは十一月十五日、男五歳、女七歳、三歳。(大門)

今はしない。昔は五月になるとしめた。(居館)

七五三 三歳の女の子の時には、お祝いをしたりしなかったりで、最近のほうがよくやる。五歳の男の子の時は近親を呼び、お宮参りに行く。七歳の女の子の時も、着物をこしらえて着させ、近親者を呼びお宮参りに行く。(猿石)

子供が、女三歳、男五歳(袴着)、女七歳(帯とき)の時七五三といって神社へゆく。(居館)

千代ヶ淵にある天王様に詣る。七歳のお祝いを最も盛に行い、女子は長い反物のオベコを作り、実家では帯、下駄、カンザシをくれる。全部実家で作ってくれる場合もある。男子は実家で着物、袴を作つてやる。これをオビトキ祝という。(萩平)

十七祝 娘になった祝。七・五・三より重んじる家もある。母親の織った平絹の着物を染めて、着物、羽織、長襦袢を作つてやる。

男は二十一歳で検査ギモン(紋付、羽織、着物、袴)を作つてやる。甲種合格になると赤飯をふかして祝う。(萩平)

成人式

最近一月十五日、桐生の産文会館で行う。家庭では友達など呼んでお祝いする。(居館)

厄年

男二十五、四十二を厄年といい、その前年厄年に厄除けといって、厄除大師に行く。女は十九、三十三が厄年で佐野の元三大師、小俣の鶏足寺、成田不動、菱町の観音院等に厄除けに行く。

子供の四つは厄年といひ、妻の黒川の泉竜院へ行き、お金をあげて、厄除を買って来る。一月四日が縁日である。(居館)

男は二十五歳と四十二歳、女は十九歳・三十三歳・五十五歳。とくに男は四十二歳を中心にして前厄・後厄といわれ、その年代を気にかけていた。(猿石)

女の厄年も、十九のときはふつうは家にいるから特にやらないが。結婚して他家へ出たりすると三十三の厄年のとき、親元へ請求が来たりするので思い出すことが多く、生まれた家から三角もよりのウロコ帯を贈ることになっている。この時は理くつなしに買ってやる。

この帯は、厄年だからというので一回しめる程度で、後はタンスノコヤシになるていどだと思ふ。

勢多東の草木では十九のときにつくつてくれたのを見た。(清水)

厄おとし

厄年の者は、障子を開けておいて、豆の中にお金を入れて半紙で包み、外に投げて放り出し、それがすむと直ぐに戸をたてた。そのお金は家の人は拾わない。

男も女も同じことをする。(清水)

佐野の元三大師へ正月三日にお参りして護摩をたいてもらう。また、持護院が厄除けに回ってきて押んでくれる。来ると大風が吹くといわれ。(猿石)

一月の四日ころが厄おとしで、神社や寺によって日が違うからその日

にゆく。ふつう、桐生、大間々、佐野あたりまでで、かたい人は川崎でも成田でもゆく人がいるが、行かない人も多い。

特別のことはなく、お参りして厄除けのおふだなどをうけてくればよい。今年十九になる娘は、川向うのヒシへ行った。(石鴨)

四歳の子は一月四日の四つ前(十時前)に菱村の泉竜院へ厄除け(虫封じ)に行く。本人が行けない時には着物を持って行く。(猿石)

年祝い、喜寿、七十七のお祝、親類をよんで酒肴で祝う。吹竹を作つて(老人が)贈る。

米寿、喜寿と同様であるが、子供が出し合つて赤いチャンチャン、赤い帽子を作つて贈る。大が十一月十五日に行う。(居館)

六十歳、七十七歳、八十八歳にはお祝いをする。(猿石)

喜の字の祝いには、吹き竹二本に水引きをかけて、孫子に配る。穴はあけないで配り、もらった方で穴をあける。吹き竹は長息するように、二重になって火を吹くまで生きろという意味で配る。(猿石)

七十七でお祝いとすると死ぬとか、八十八でお祝いとすると死ぬとかいふ。(猿石)

米の祝いでは、本家に孫子が集まつて、赤いはんてん、座布団、赤い帽子、赤いふんどしを贈つて祝う。年寄りなので神社へお参りには行かないが、神官を呼んで押んでもらう。(猿石)

三 青年集団

若衆組 若衆組とよばれたものはないが、大正初期入飛駒と梅田側と合せて、両馬青年交友会(馬立が二つに分れていたから)それ以前は両馬青年同志会があった。

遊ぶ事も勉強もすべてこの会で行なつた。この会には小学校卒業と同時に入会した。入退会は新年会を区切りにしており、新年会の初めに新入会員を紹介し、茶を飲んで話し合いに入る。酒は使わない。退会は二十

五歳だが、会員の新人と同時に年う。この会は夜学に力を入れ、十月十一月一杯の二カ月、毎晩日曜日なしで実施していた。指導は梅田北小学校と入飛駒小学校の先生が交代でしてくれた。夏は八木節をやった。これは最初足利郡三輪村から教えに来てもらった。好きで嫌いでもおつきあいで皆やった。

会では村から兵隊に出る人のあったときの送迎もした。酒は使わな。また散髪は家でやり運動会は秋にやった。会としての旅行はない。

同志会時代は、桑園の仕立て、山の植林もした。当時林業関係の仕事が一日六〇〜七〇銭、酒一升一円という時代である。(馬立)

夜あそび

夜あそびは、この近くに行った。兵隊検査近くの年令のものが、各自思い思いの方向へ出かけた。当時ははたやに多くの女工が来ていた。越後や能登の方から来た年令奉公の人たちがいた。そこへあそびに行つてむだばなしをして来た。三人とか四人とかあつまつて、わいわいさわいでいた程度である。十五夜とか十三夜のころはさかんに出かけた。まつりのときには、よそ村まであそびに行つた。ぼんおどりのあるときには女衆も夜あそびに来たので、たのしみであった。女と男とが一措に歩くことのない時代なので、おぼんがたのしみであった。

よばい、ずつと年輩の人たち(明治初年生まれぐらいまでの人)がやったことである。むかし、娘と約束なしで、その家へ入りこんだところ、木の枕ではりとばされたものもあったという。(井戸谷戸)

若い衆の遊び

もつこかつぎの棒で棒押しをやったり、石かつぎや角力もやった。

(高沢)

わかいしゅは夜あそびをした。夜あそびに出かける前に、翌日はくわらじをつくったものだ。しかし、実際にはわらじづくりをせずにあそびに出たものもあった。

夜あそびに出かけるのは午後九時すぎで、帰ってくるのは十二時か一

時ごろであった。中には三時ごろに帰ってくるものもあった。

出かけた場所は、むかしは村内であったが、自転車に乗るようになってからは、桐生から佐野の方まで出かけたこともあった。一カ月に一度ぐらゐは遠出をした。夜あそびにはほとんど毎晩のように出た。山へ仕事に行つて、昼寝をしていたこともあった。

夜あそびに行つたわかいしゅのもてなしが悪いと、いたずらをされたこともあった。障子に穴をあけてのぞつこみをするくらいはおとなしい方で、なかには、外湯(外風呂)のせんをぬいてしまつたり、墓石をかつきこんだという場合もあった。

親が承知で娘にあわせてやれば、夜あそびに来たわかいしゅが、かゝこの桑くれを手伝つたり、蚕糞ぬきを手伝つてくれたりした。

親がきびしくて、娘にあわせぬき家に、やぐらから入りこんで、六尺ふんどしでさがつて部屋に入りこんだものがあつたという。それをおぼけだとおどろいて家中とびだし、娘だけが部屋に残っていたとか。

夜あそびに出かけた年令は十七・八歳から二十五・六歳まで、嫁をもらえ行かなかつたし、仲間もつれて行かなかつた。

夜あそびは、人づきあいの勉強になった。

娘はふだんは夜あそびには出なかつた。おぼんのときとか、芝居があるときに出かけた程度であった。夜は針仕事が主で、なかには、なわな仕事をしていたものもあった。きびしい家では、娘には夜あそびをさせなかつた。そういう家では、親のいいつけをきちんと守れといつて、夜あそびに来たわかいしゅと知りあいになつたものは、くつついたとか、なれあいといつて、はだしはだかで嫁にやるとか、二度ととぶ口をまたがせないなどといった。なかには、夜あそびで一措になつたものもあった。(皆沢)

機屋には娘たちが三〜五年くらい寄宿舎にはいつて働いていたので、若い衆が夜遊びに来た。ハタオリツ子の所に遊びに行つて、さわがせたりいたずらしたりした。追い出されると、いたずらをして、ワナを仕か

けたり、井戸にモミヌカをあげたりした。

青年会ができ、補習学校が夜学で始まると、夜遊びをしなくなった。

(猿石)

若い衆の間に芝居や剣術のはやったことがあり、本間道場の高弟が回ってきたこともある。大正十年ごろまで、花火がやはりこしらえてあげた。

夜ばいは明治時代の話である。(猿石)

力くらべ 六尺棒の棒倒し、相撲やそのあたりにある二十貫位の石をかついで、力くらべをしたものである。正月、盆、農休みのときなどに行った。また米俵を二俵天秤にして、肩にかつき、十歩歩くのは強い方である。(馬立)

ヨバイ 現在六十二、三歳位の人まで行っていた。テナシゴがでると親の子にしたが多い。また恋愛結婚はこのような場合に行なわれた。然しテナシゴの生れる場合と結婚できたのと半々位の頃もあった。最後まで一措になれないのは、男方の親の反対の場合が多かった。

(馬立)

四 婚 姻

(一) 結婚の条件

婚姻圏 村内が多いが、次は飛駒本村、足尾線沿線で、最近は桐生から嫁が来るようになった。これは男が勤め人になったからである。

(秋平)

婚姻圏 部落外が多いが、飛駒村同志はかなりある。遠くでは足尾線の沢入地方で、それは米沢の石炭岩を鉄索で沢入に運び、更に足尾に運んだからである。その後大正九年に葛生の石炭を足尾に運ぶようになって、米沢の運はなくなつた。(馬立)

昔は土地の者で、いとこ同志が多く、「イトコドウシハ五分余計ハイル」といつた。戦後はポットニモネエ。知っている人がいて話をしてくれる関係から勢多東村が多い。栃木の方も多いが、これは飛駒の方で、馬立は飛駒の方が多い。(石鴨)

婚姻圏 村内や飛駒・川内が多く桐生とは少なかった。藪塚や広沢まで行く。(猿石)

結婚年令

昔は女は十四か十五という人も多かった。いまの中学生くらいで、嫁に来てからも寝ぼけてどうしようもなかった人がいる。十八で嫁いだ人は、家の人から「三日行つていりやあい」といわれたという。

今の子どもじゃあ十四や十五ではつとまらない。(石鴨)

結婚 他村の者との恋愛ということはなかった。男は二十五歳前後、女も同様で二十歳というのは極く早い方である。

年廻りは、一歳上の妻をよいとし、こうした女はかね、太鼓でさがしてもないといわれた。(馬立)

明治半ばまでは十七、八歳から二十歳前くらいで結婚するものがあり、村木の前で鬼ごっこしていたといふ話もある。明治後半には二十、二十一歳くらいが普通になった。二十二歳は並ぶといつて嫌つた。それを通ぎると晩婚だった。(猿石)

良 縁

主として財産がつり合う程度のもを仲人が見立てた。また家屋敷位あるところにやられた。(馬立)

嫁は大尽からもらえ、むこは貧乏からもらえといつた。(橋話)

よいめはずれは、六十年の不作という。(橋話)

いれ嫁 親のいうことを聞いてよくかせぐ嫁がいい嫁で、親のいう言に返し言葉はできなかった。(猿石)

姉さま女房

一つちがいは金太鼓でみつつけてもみつからねえ。(石鴨)

嫌選び 戦前は見合いなどしなかった。仲人と双方の親同志でとりきめた。狭い地域だから平常いつとはなしに知り合った。こういふものだと皆が思いこんでいる。自由行動をとるとヤクザモノと思われた。(馬立)

昔は恋愛は許されず、皆見合い結婚であった。仲立人が入って、時間を含せて会った。(居館)

嫁は親が決めた。恋愛でいっしょになると、ナレアイといわれて軽べつ目で見られた。(猿石)

仲人 恋愛結婚はナレアイでタツツイタといい、この場合表立って仲人結婚の形とする。従って最初の婚約申込はやはり仲人がすることになる。仲人はもらう方が頼むのだから、嫁の家に申入れる。

仲人は村の有力者、人望ある財産家の人が普通する。仲人のナナデンボウといつてつくりごと、うそをいうこともある。(馬立)

大体二人の配偶を見付けてくれた人がなるが、又懇意な人をたのむ場合もある。(居館)

ナコウドン(仲人)

どういふ結婚の場合にも仲人をたてるもので、昔は親せきの者、たいがいはおジゴや兄姉がやり、仲人は旅行に行くころおもしろえといふので一里もあるところを歩いて行ったり来たりしてやってくれた人もいふ。ふつうもらう方から頼んでやるが、下ごしらえといふので近所の別荘の家に頼んで行ってそれとなく話してみても脈があると仲人をたてる。ナコウドンのナナデンボウといふ、何とか結びあわせるためよくほめるので、罪のないデンボウという意味に使われる。(石鴨)

仲人には世話好きの人や、嫁・むこ両方にこんいなる人がなる。(猿石)

(二) 婚約

クチガタメ

話ができると良い日を見て、仲人が酒一升もってくれ方にゆき、組合まわりをしてあいさつし、組合の隣りの人を招んで酒を半分口をつける。くれ方が半分返してやると仲人はこれをもってもらい方に戻り、残りの酒をのんでクチガタメができる。酒は結納だも一つ詰めてもってゆくものだが、今は一升もって行って、別の一升を返してやってきまふ。半端もんよりは一升の方がよい。

クチガタメは結納おさめにしたのもある。(石鴨)

口がため

日のいい日に仲人が、先に女の方へ一升持ってゆき半分置いてゆく。女の家では親戚や伍長を呼び、その日に近所中、施主か仲人を連れてまわる。(居館)

結婚の約束を固めるために、仲人が酒一升を持って婿方に行き五合置いてきて、嫁方に行き五合をやって、分けて飲む。(猿石)

仲人が酒一升を婿のところから嫁の家に持って行き、半分飲んで残りに足して一升(一緒)にして、婿の家に持ち帰る。(大門)

クチガタメという。仲人が一升買つて先ずむこの家に行き、ここでは飲まないが、次に嫁の方に行つて半分飲み、またむこの方に来て残りの半分を飲む。この場合、組合の人近親者が十人位集つてお祝いをし、ほかに用意しておいた酒をむ。嫁の家では嫁も同席する。

クチガタメのとき仲人披露といつて、仲人が両者の組内を廻る。このときは親がついて廻り、仲人を紹介する。仲人は例えば〇〇家の娘を、

〇〇の嫁にもらうと挨拶する。(馬立)

アシイレ クチガタメのことで、嫁が来て泊ることもある。このときは翌日帰るのが普通である。仲人は酒一升買つてきて、嫁、むこむこの家で飲む。そして先ず嫁方の村内を挨拶廻りしたあと、むこの父親と

部落を廻る人が挨拶廻りする。そのとき半紙一帖仲人の名を書いたのを持って廻る。(秋平)

クチガタメで婚家に来てしまうこともある。そのまま祝儀をしないの

もある。アシイレは普通結婚の半年〜一年前で、アシイレにしかせいでもうという。準備ができないから、手もないことだし、決つたことだから手伝つてくれというわけであり、一泊して帰り、その後また来て泊つたり行つたり来たりするのもある。大洲でアシイレのあと男がいやになつた例があり、このときは金で解決した。(萩平)

タチガタメのとき仲人が連れてきて、一夜或は二夜泊ることをいう。普通は一夜泊つて翌日帰る。タチガタメをして渡せば、あとは仲人はかまわない。祝儀の当日「これはタチガタメの酒です」とことわつて、それから式に入る場合もあった。(馬立)

口がためをして、ご祝儀をする前に、はじめて泊りに来ることをアシイレという。これをアシガへえつた(はいつた)という。アシイレをしてそのまま居続けるものもあった。ご祝儀の前に一旦実家へかえる。アシイレは身上にはあまり関係がない。(橋詰)

トマリソメともいう。

タチガタメがすむと、その晩「借りてゆくよ」というので娘を連れて行くものもある。その日から夫婦のようになるもので、そのまゝいついで戻らないで、お祝い——結婚式もしないですむ人もある。足入れをしてから破談になることは山の中だから少ない。(石鴨)

泊りそめ 式の前に嫁がお客に行つて一晩泊つてくることもある。お客として泊るだけである。(猿石)

口がためがすむから、宿り初めといつて、嫁になる娘をつれてくる事がある。嫁を借りるなどという。その晩妊娠したなどいう話もあった。家庭の都合で男の母が病気の時などオンカで借りて来られる。最近はこの足入れというのとはなくなった。浅部にはあるとか聞いている。(居船)

結納 タチガタメの日にもっていく場合もあるが、式の日にもっていくのが多い。目録と結納金で、結納金は着物の有無によつてかわる。(馬立)

口がための日に、結納はいくらとか、仕度はどうするとか定める。結納金は今は五万円位、昔は十円か十五円であった。結納かえしなしに五万とか約束する。場所によつては袴代といつて半分位返す。嫁が品物がいという品物を贈る処もある。結納とは別に嫁の衣装はムコ持ち、髪結さんはヨメ持ちである。大体結納は一カ月前位に贈る。(居船)

結納おさめの日は特別にとらず、結婚式の当日やつた。結納の金に、嫁のしだく全部やるのだが、ムコの場合にはカツブシ二本というのがきまりだつた。

今の人はタチガタメのときにするようで、できている目録でもつてゆから来た。トリムスビをする人が折つて作つてくれる。(石鴨)

婿方から嫁方に金品を贈るが、金でやらずにたんすなどの品物を買つてやる方が多かつた。お返しに袴をやつたりした。(猿石)

目録 仲人は嫁方から目録に裏書きして持つてきた物を受け取つて、目録を取りかわす。「右の品々めでたく受領下されたく候」「右の品々めでたく受納仕り候」。(猿石)

婚約破棄

時には子約が破談になる事もある。そういう時は仲人は組合をわびて置かなければならない。違約金をとられる事もある。尤も相手がおだやかならとらない。結納日がすむでから止めると、男が止めると結納流れになり、女が嫌やになると、結納金を返す。(居船)

(三) 嫁入り

お宮まいり

嫁に行くときは、屋敷稲荷、神社、そのほか近くの神さまへはおまいりした。おわかれのじんぎという意味があつた。(橋詰)

婚禮のウドンブチ

婚禮の準備のウドンブチは、前の晩に集まつて粉をこねこんでおき、翌朝は夜も明けぬうちに朝飯食はずにきて、夜のうちに用意した粉でウ

ドンをぶった。川原にカマをつけてゆでがまとし、近所中から借り集めたハンダイを使ってうどんぶちをして用意をした。(石鴨)

嫁のいとまごい

いよいよ嫁が出発という前に、お勝手の人にもジンギを言っておいさつをし、その後親たちに別れのあいさつをして出る。表から出てからは後をふりけえらねえでゆくのだというが、うちが恋いしくてだれでも振り向いちゃう。

ある人が、「お世話になりました」というんだといわれながら、ついうっかりして「行ってまいります」といっちゃったところ、親から「お客に来るんだらいいけど、帰って来るんじゃないかね」といわれて嫁に来た人がいる。こつちからモライイチゲンに来ていた人たちが、翌日になってから「行ってまいります」といったけど、お客に来るんじゃないから来てもいいけど帰って来るなといわれたんな」といってからかわれたので本当にきまりが悪かった、という人がいる。(石鴨)

オ勝手ブルメエ

くれ方では、嫁を送り出すとオ勝手ブルメエといつて気軽な宴会になる。(石鴨)

オツツケミツメ

立ち振舞いのあと出かけた嫁が、すぐひっかえして仲人がつれて戻って、お茶を一ぱいもらって来ることをオツツケミツメといい、こうしてあればいつでも実家へお客に行ける。(石鴨)

モライイチゲン

朝早くムコが嫁の家へもらいに行く。家へ入るには縁側から入るが、すぐに入らずに目録を出す。隣り組の人がうけとって施主に渡し、施主が目を通し、組の係の人が目を通すと裏書きをしてハンコを押して返してよこし、「確かに納まりましたからお寄りなすつとくんなんしょ」といわれてからイチゲンは入るわけである。親子が出て挨拶するまでは坐っている。冷酒の前にお茶が出され、親子の盃がすんでからオチツキ

が出る。(石鴨)

朝イチゲン 式の当日の朝、婿方から婿や近親者と仲人が付いて嫁方へイチゲンに行く。女も一人ぐらいいは行く。親は行かない。嫁方では嫁の近親者が待っていて、仲人が紹介してお近づきの世話をやき、固めの盃を取りかわす。嫁方の組合の人がオン・ウパンで酒をつぎ、充分にふるまう。イチゲンの者は充分ごちそうになって、昼ごろ引きあげて来る。(猿石)

仲人がもたらう家に来て挨拶をし、むこ方のイチゲンが嫁方に行く。嫁方はこのイチゲンを迎えて飲む。このときむこも一語で、嫁はおしやくをする程度である。

部落の代表が嫁方の人を、又仲人がむこ方のイチゲンを嫁方に紹介する。この紹介のときは、むこ方にくるイチゲンは除く。そしてオチカツキの酒を一廻り廻して飲む。むこ方のイチゲンは先に帰る。(馬立)

結婚式は今略式が多く宴会も双方出合いが一般であるが昔の風をかくと、

ムコ一元(一見ともかく)これは朝早く、婿方で、本人や伯叔父が揃って嫁方へ行く。そし御馳走になつてくる。その後嫁が出て来る。(居館)

嫁支度 はさみ箱の中には縁起物として、貝ののしを入れたわらのツトッコ・末広・スルメ・帯・じゅばん・たけなが(髪飾り)・紅・おしろいなどを入れてきた。(猿石)

中 宿 嫁が化粧直しをする為小休する家で、貰い方の近くにたのむ。(居館)

次で嫁方のイチゲンが嫁を送ってむこ方に来る。このとき嫁はチュウザに立寄り(茶をのむ程度)むこ方の準備の出来るのを待つ。

チュウザ

花嫁の行列には特別の順序もなく、仲人ばあさんが嫁の小さい面倒を見て、ムコの方が後の方になる。婿家より手前の方の家を休み場として

借りて、休んだり、化粧直しをしたり、先方の都合による連絡待ちをする。この休み場をチユウザといい、お茶を出すていどである。(石鴨)

送りイチゲン 昼過ぎに嫁方のイチゲンの一行が、提灯をつけて出かける婿の家の近くのチユウザ(中座)に寄つて時期を待つ。婿方では家のカド先まで、組合の人が提灯をつけて迎えに出て、灯りをたきカドウタイをうたつて嫁の一行を迎え入れる。嫁がカド口をはいる時に、女シユウトに菅笠をかぶせる。これは角を出さないようにするため。イチゲンは座敷から直接に出入りする。(猿石)

門入り

もらい方ではもちろんをつけて待っており、カイドウを入るとオチツキ、メチヨウの役をする子どもがチヨウチンで切つて(すれちがいをして)消す。門つきという。

花嫁は玄関から入るがそのときに門うたいをする。「ハヤスミノエニツキネケリ」とういときにトボグチをまたいで入る。姑さんに手をひかれて入り、お勝手、施主にあいさつをする。仲人も施主やお勝手の人たちに「確かにもらつて来やんしたら……」と挨拶をする。(石鴨)

仲人は嫁を連れてむこ方の家に来る。このとき仲人の後にむこがついて出迎える。そしてむこ方の人で謡曲の出来る人がカドウタイをうたう。「高砂や……」も謡う。一方嫁方のイチゲンは轡側から、嫁は玄関から入る。(嫁が初めて家に入るのは、右足から先に入ることになっていた。むこ方の姑が嫁を迎え入れる。このとき菅笠を姑が嫁にかざす。昔はカズガラを結えて作ったタイマツを両側かもつて、嫁がその下を通ると位置を交代した。その後タイマツが提灯になった。(馬立)

嫁 入 貰い方の組合の者が提灯をつけて中宿迄迎えにゆく。婿の家では長竿をトボグチにおき、麦稈の束で火をたく。これは長竿は川の代りだといひ、火の方は火にも堪えられる為という。嫁が竿をまたぐ時に、姑が菅笠を嫁の頭の上にかざす。組合の人は庭に入る時カドウタイをうたう。「高砂や……」の謡である。それを家で待ち受けた人々が、

嫁が軒先に来た時ウケウタヒをして引き継ぐ。家へつくと仲人が嫁の手をもつて引上る。謡は桐生から宝生流の人をたのんで来る。(大体その練習は秋の夜長の時分にやっておく。)

嫁入りの時は玄関から、婿入りの時は廊下から上る。(居館)

嫁が門口に来て、たい松をまたぐとき母が笠をかぶせてやる。「上を見ないで、たい松の中でも三年のしんぼうするように」という意があった。(居館)

嫁は婚家に来るとトボ口からはいるが、ひきいをまたいだ時に姑が菅笠をかぶせる。上を見ちゃならないという意味で、子供が寄つてタイ松で尻をたたいた。(昔沢)

婿入り

婿は表座敷から直接はいる。嫁はトボ口からはいる。(皆沢)

オチツキ

オチツキは、ツキモチ、オコワ、スシなどがあり、オコワは赤い顔をするからというので余り出されない。これまではツキモチが多く、ぞうに、おしるこの家もあった。

オチツキは送りイチゲンにも出されるもので、オチツキをケエタ(盛りかえを出した)ので、オチツキヨメゴといわれた人もいる。(石鴨)

取り結びの式 座敷には嫁方と婿方の近親者が並んで席に着く。嫁は待ち女房(近所や親戚を頼む)が二組そばに坐り、仲人夫婦、雄蝶・雌蝶を新婚夫婦に加えて、五夫婦そろうのが本式だった。雄蝶・雌蝶は近所の十歳以下の子を頼み、固めの盃のおしやくをしてもらう。組の話をうたえる人を頼んで取り結びの式をした。(猿石)

取り結びの座敷は、床の間は仲人が坐り、その隣りに待女房が二人坐る。これは夫婦揃った人で、お腹に子供のない人がえらばれる。仕度はトメ袖の礼装。

司会は組内の人がする。新婚夫婦は三三九度の盃の後、御高盛の御飯が出る。この嫁のお高盛の飯を盗んで食うと後に嫁が自由に出来るなど

いう。(居節)

次で嫁方の家での席と同様に、仲人の両側にむこと嫁が坐る。この席について紹介し、オチカッヅの盃を交換する。そして組内の両親のある五・六歳の男女の子供が男蝶・女蝶となつて、三三九度を行なう。このとき「高砂や……」の謡がうたわれる。(馬立)

式の終り 式のと酒宴になる。宴がすんで嫁方の一方が帰るが、仲人も式がお開きになるまでいる。宴が終ると、嫁が式を着物を着替えて組合の人にお茶をついで飲んでもらう。嫁ごのみやげを配り、嫁ごのお茶を飲んでもらうと、組合の人は帰る。床入れの式はしない。(猿石)

式の後には嫁の土産といつて、両親や家族にお茶菓子を出す。(居節) 式が終つて嫁は仕度をかえ、オチヤダシギモンに着かえる。そして送つてきた嫁方のイチゲンに近い人が嫁を立て、座敷にきて、手伝いにきて働いてくれている人や両親に挨拶する。次で酒盛りとなる。

これが大体限度になると、嫁方のイチゲンが帰る頃になる。そしてお茶を用意して、嫁方のイチゲンに出す。次で持つてきたヨメノオチヤガシをむこ方で働いている人に出す。これはタチ茶である。これで式は終る。(馬立)

お勝手ぶるめえ

イチゲンの帰つた後、お勝手やその他で手伝つてくれた人たちに酒を出す。この席では酒をすていいし出して出したので夜が明けたことが多い。

嫁がお給仕をする。(石鴨)

タチオチヤ(ヨメゴのお茶)

ヨメゴのお茶は、イチゲンのいるうちに出す。そのときに姑に対してオツカサンといえればその後はずつとオツカサンといえるが、このときいえないとオツカサンということばがいまいち。

このお茶をのむとイチゲンは帰るのでタチオチヤということになる。お茶菓子は一人一人に嫁さんがはさんで出す。(石鴨)

ヒキオトシ(引き出物)

イチゲンのヒキオトシ(引き出物)は、くれ方はかんたんで、よい方でスルメ二枚にふるしき一枚でいどで、ちとんべえくれた程度だった。もたらひ方でも、ふつうにはスルメを三枚とか五枚くらいひいた程度だった。(石鴨)

シマダイ

お膳に米一升を山盛りにし、松竹梅をとつて来て、おひなさまの高砂のじいさんばあさんを並べてから、大根を切つて松竹梅をさす台としてさし、カメははしがきにこまめの頭をつけてつくり、ツルは紙を折つて松にタケテつくる。(石鴨)

ダイノコボロ 五十年前までは、むこ方の組内の若衆が、大根で作つた男根に松葉をさし、水引をかけ、式のとときお膳にのせて嫁の前においた。「高砂や……」が始まるとこれに合せて「そもそまだいのこぼろと申すは、もともつくり毛が生えて、かりたかがさをかぶりそめ、およめごさまのまたぐらへ、すつと入り舟にのり込み」といった。

(馬立)

オタカモリをお膳にのせて出すとき「そもそまだいのこぼろと申すは、夜中の頃にむつくと起き、およめごさまのまたぐらへ、ずくんずくんと入りつ」といいながら出す。ヌデン棒で或は二又大根で作つて東ね、水引をかけたものである。(今倉)

婚禮のつくりもの

シマダイのほかにはダイノコボウという男のものをつくる。大根で実をつくり、トウミギ(とうもろこし)のチンゲで毛をつけて、ちゃんとしたものにして、謡をうたいながらおせんの上のせて嫁さんの前にもつてゆく。(石鴨)

ダイノコボウ

御祝儀のダイノコボウは、先ず大の男が生まれることが何よりのねがいで、大根をダイノオトコとかけてやるのだという。またダイコンのダイは、ダイダイ(代々)ダイノコ(大の男)ができることを意味して祈

念するものなのだという。(清水・石鴨)

婚礼のつくりもの

いまから四十五年くらい前(大正末)、川内の方へしごとに行つていて婚礼を見に行ったところ、大根でつくり、トモロコシの毛を使ってつくつたものを、腰をつかいながらヨメゴサンの前へもつてゆくので、そのかつこうが突におもしろいので手をうって笑つたが、見に来た人に酒をもつてきて、いくらでもくれるので酔っぱらうようだった。

アナッポをあけるほどいいというので穴をあけて歩いたもんで、ノ

ゾッコミをした。(津久原)

結婚式のときのうたい

一、げんかんつき

たかさごや、このうらふねにはをあげて

つきもろともいいでしほの

なみのあわじのしまかげや

とおくなるほのおきすぎて

はやすみのえに つきにけり

二、のしすえの時

いやましんに

みたからのおんを

はこぶみちなり

せしんゆうばんぜえの

ちはこのたまをささげん

三、しまだいをだす時

しこうのおんしゃくに

あづかるほどのきなりとて

いこくにも

ほんちよにも

ばんみんこれをしょかんす

四、さかずきをだすとき

しんよりのいのほとりにて

きくをたたえてよもすがら

つきのまゆにもともまつや

またかたもくるさかずきの

かげをたたえてまちいたり

五、さかなをだすとき

あれみや

たからがしまから舟がくる

舟にきんきくそをつみおきて

これのみくらいをおさめおき

六、きつたてをだす時

そもそも福神と申する神は

ちくぶじまにて

べんざいてんにてせうろろ

くらまの福もえびすだいいく

えんめこうぶくる

うちでのこづちちよくちよくうてば

ふくがきたるらん

せんしゆうばんぜえの

ちはこのたまをささげん

七、高さご 一のさかずき

まつだいのためしにも

八、高さご 二のさかずき

まつもろともにこのとしまで

あいおいのふうふとなるものを

九、高さご 三のさかずき

ありがたのようごや

月すみよしの神あそび

みかけをおがむあらたさよ

げにさまざまのまいひめの

こえもすむなりすみのえの

まつかげもうつるなる

せかいとはこれやらん

神と君とのみちすぐに

みやこのはるにゆくべくは

それぞげんじょらくのまへ

さてばんぜえの

おみごろも

さすかいなにはあくまをはらい

おさむるてにはじふくをいだし

せんしゅうらくはたみをなで

まんざいらくにはいのちをのぶ

あいおいのまつかぜ

さつさつのこえぞたのしむ

十、おたかもり

そもそもたいのここと申するものは

もとにもくりとけがはえて

それぞめたき

十一、おいさかもり時

うれしかなや、いざさらば

このまつかぜにたびいして

かげもうそふくとらるとき

かみのつげをまちてみん

十二、こじさんのさけ出す時

ななつごがしゃくに出て

さかなさかなとのぞまれて

ちよしのくちへまつをさし

まつのことだにたかをそへ

ことりをとらせおさかなに

十二、こじさんのさけ出す時

ながきいのちをくみてしる

こころのそこもくもりなき

つきのかつらのひかそう

えだをつらねてもろともに

あさゆうなるたまのへの

ふかきちぎりはたのもしや

十三、親酒盃(数字は盃の順)

侍女房

諸親類

15、16……

人男仲8、10

17、11、7、3、1 旧男

12、6、4 姑

9モコ

女仲人 13

2、5、14

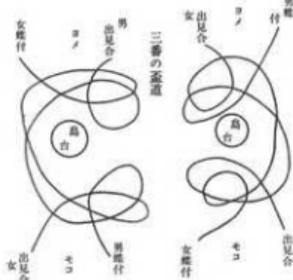
侍女房

十四、三三九道蝶の道的事

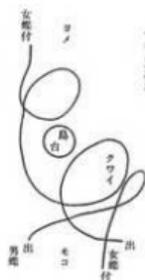
十五、鳥代づくり
松は式本 柏老松三がい二かい



終道勝手ひらく



一番の歪道

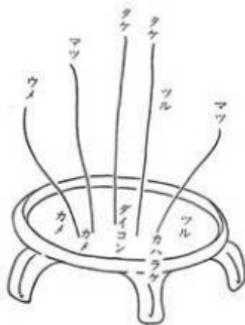


- 目録進上
- 一、熨斗
 - 一、御家内喜多留
 - 一、御肴
 - 一、御白毛
 - 一、御末広
 - 一、御和紙
 - 一、御菓子
 - 一、御毛ぬきはさみ
 - 一、御櫛筭
 - 一、御白粉
 - 一、御手掛

- 老折
- 老荷
- 老折
- 老色
- 老対
- 老東
- 老折
- 老ト品ズツ
- 老ト品ズツ
- フタツ
- フタツ
- 老筋

シマダイ
相生の松、中に竹を、左に梅、左右は鶴亀、但シ鶴、是は山なり。亀、是は海なり。前方金銀のカワラケ二枚、是は鳥神の故なり、大根二本是は大之男の子をもうくと吉事なり、鳥代、是は嫁舞はかりにて出なり。置物は遺物なり。中に紙にてさいしき山をかざりけり付との……にてなみを書、海の形とするなり

- 竹は式本 七ふし
- 梅は老本
- 米は杏升
- カハラケ二ツ
- 大根式本
- 鶴
- 亀



- 一、御丈長
- 一、御小袖
- 一、御帽子
- 一、御す志除
- 一、結納金
- 一、足袋
- 一、足駄

右目録の品々幾久敷御受納被下度候

大正 年 月 日

- 武枚
- 耆重
- 耆トツ
- 耆ト筋
- 耆本
- 何円
- 耆足
- 耆足

何村 何番地

何 某 印

何村

何 某 殿

但シ目録ウラ書之事

右目録之品々相違無干 秋万歳目出度受納仕り候

年 月 日

以上

何郡 何村

何 某 殿

何村 何番地
何 某 印

○おたかもりを出す時
 そもそもないのこともうするものは
 もともくりとけがはいて
 かりたかさをかぶりそめ
 およめごさまのまたぐらへ
 つつといりふねにのりそめ

およめごさまの
 おはらがぼてれんと
 いつぞごたんじょのせつを
 まつぞめでたき

○にはのいさご

にはのいさごは金銀の
 たまをつらねてしきたいの
 いおえのにしきやるりのとそ
 シャっこうの
 ゆきけためのうらはし

いけのみぎはのつるかめは
 ほうらいさんもよそならず
 きみのめぐみぞありがたき

婚礼とりむすび座附の事



ノゾキコミ 昔は式るとき若衆がノゾキコミをやったもので、彼等には酒を御馳走した。庭に酒をもつて行って飲んでもらった。今は部屋は冬でも明け放してやるからこうしたこともなくなった。(馬立)

若い衆は招かれるが同級生位である。(居館)

ノゾクコミ

馬立では若い衆に酒を出して乱暴をしないようにする。

ふつうは、障子にノゾクコミの穴をあけることはよくしたが、乱暴することはなかった。しまいには障子をおつ外つて「よく見てくれ」といつてやるようになった。

御祝儀の酒より青年がのんだ酒の方が多かったようだ。(石鴨)

ノゾクコミのもめごと

上藤生の人の御祝儀のとき、若宮のじいさんが仲人をして、仲人だからみんな酒をくれるもんで酔っぱらっちゃつて、集まっていた青年に向かつて「ひとんちのヨメゴをただで見せねえ」といったところ、「じゃあいくらだ」ということになり、「ひとんちのヨメゴにねだんをつけるとは何ごとだ」といい出し、ひとんちやくをしたという。(石鴨)

氏神まいり

ヨメゴは来るとすぐに氏神さまに連れて行ってお参りして来る。(石鴨)

ヨメビロウ (嫁披露)

婚礼の翌日、姑さんがつれて村中をあいさつにまわる。馬立からコインツクリの方から高見まで、ウンマミチは歩かなかつたがみんな歩いたから、嫁さんはたくをしをシリッパシヨリをして歩くのだから大変なことだった。(石鴨)

組内をむこ方のシュウトバアサンが連れて廻る。このとき半紙一帖、水引でしばつてもつていく。今は組内の人に対して、ザシキビロウを式の夜にやる家が多い。(馬立)

祝儀の翌朝、組合の人が来て跡かたづけをしてくれる。一通りかたづけと、嫁は菩提寺にお参りに行く。それから組合を一軒一軒、姑が連れて回る。半紙を二帖ぐらい包んで配る。その後、近場の親戚回りを人力車で回った。(猿石)

式の翌日 翌朝はその家の嫁として、仏様や屋敷稲荷を拝み、勝手仕事を手伝う。ようすがわからないので、聲がリードしてくれないと嫁は困つてしまふ。(猿石)

ミツメ 昔は三日目に仲人・嫁・婿が嫁の実家に手土産をもつて行った。このとき両親がつきそつて行ったが、これが両親のつき合いの初めで、履物などお土産にもつて行った。また三日目はイチゲンに行かなかつた近親者が嫁の家に行き、むこ方にも嫁方のイチゲンが来た。(馬石)

婚礼の三日目がミツメで、仲人と嫁ムコ、姑ばあさんがくれ方へ行く、ミツメには泊れずに帰るわけだが、オジンギをしてごちそうさまをしてからなら泊つてよい。(石鴨)

里帰り 祝儀のあと三日めを三ツメといい、嫁は婿と二人で里へ帰り泊つてくる。五ツメ(五日め)に二人で戻る。(猿石)

かねつけ祝い 嫁に行き里帰りから帰る三日目「ミツメ」に行なう。姑に白歯を見せるものでないといひ自分で染める。(大門)

オハグロ 山のヤシヤの実で、針くずを使つて作つた。まゆをそる人もいたが、大正初期までのことである。(馬立)

四 その他

仲人礼 「仲人三年」といつて、仲人にはお中元やお歳暮などを三年以上贈つていた。戦後はそんなにやらなくなった。(猿石)

仲人孫 仲人は「仲人孫」ができると、産着やひな様などを節供・歳暮・中元などに贈る。一姫二太郎の二人ぐらいは祝つてやる。だから仲人礼をこぎつてはかわいそうである。(猿石)

八 期 今は九月一日。赤飯にシウウがを調えて。
歳 暮 シオビキ持参。(馬立)

よめ・むこの里がえり

初よめ(初むこ)は、五節供には必ず里がえりをさせた。

一月は七日に里がえりした。赤飯をもつていった。よめに来て、二・三年はこの日里がえりをした。八日にかえった。

三月三日、五月五日の節供にもかえった。

七月二十日ごろ、祇園に里がえりをした。土用に入るころである。

八朔は、よめ、むこのなきわかれという。このあとしばらく農作業がいそがしくなるので、里へも行けないということである。赤飯をもつていく。

このほかに、八月八日にも里がえりをした。これはよめに来て二・三年ぐらい。(皆沢)

姑のあるうちは嫁とよばれた。

嫁三年、むこ十年という。その間は、その家の人になれない。その家庭にそまらないといわれた。嫁なら三年、むこなら十年たてば安心という。また、むこ六十でしゅうとになるということばもあった。大体むこに来てから四十年も辛抱しなければならないということである。(橋詰)

客ばら三日という。嫁は苦勞していたので、里へかえると沢山食べられることにいう。乳の出ない嫁も、里へ帰ってのんびりすれば、乳が出るようになったというはなしもある。(橋詰)

婚姻関係用語

フロシキヨメゴ 何ももたずに嫁ぐもの、この辺には例がない。

セイフロムコ とまりぞめに来て翌日帰ってしまうむこのこと。これは、たとえば、一晩泊って翌朝おきてみたら、しゅうとが草刈りに行ってないので、おどろいて、いやになってかえった場合など。また、あつてこつちむこに行って、出てくる場合にもいう。(橋詰)

出るの入るとさわぎをして出たり入ったりしたムコのこと、嫁の場合にはセツロヨメゴという。

ここではこうしたさわぎは多少あつても別れちゃった人もなく、ナカトリでまあまあといつてるうちに情がつつていついたり、子どもができておちつちやつたというのがふつうで、これまが嫁の面倒見の期間というものだ。

一晩しかないなかつたムコはイチヤムコという。(石鴨)

離 離 離婚になるのは親対嫁の原因が多かつた。また、小姑が大

変だつた。不嫁で出て行く時は、嫁が持参してきた物を持って行くが、慰籍料などは無かつた。子は里子に出したり、連れて行つたり、置いて行つたり、さまざまだつた。(猿石)

オトコオンナ いつまでも結婚しない女のこと。(馬立)

カリアデンカ 男で女の尻にしかれている。いわゆるカカアデンカ

家の男は、ベズキンかぶつてると悪口いわれた。(馬立)

カカアデンカニ二代ナシといつて、どんなカカア天下でも二代とは続かないということ。(石鴨)

五 葬 制

(一) 死の子兆と死

子 兆 鳥鳴きが悪いとか人魂がとんだとかいう。「死んだ人が迎えに来た」「じいさんがここに来てゐる」などと、夢中で先祖のことをいう。(馬立)

カラスの鳴き声は前知らせになるが、吉凶ともにある。

いせいのいいカラス鳴きは、子どもができる前知らせで、サンシ、サンシといふ。

人が死ぬというときの鳴き方は、「シニ、シニ」と鳴く。(清水)
人が死ぬときは、女ならばナガン(お勝手)に来る。来たときには茶わんの音がするという。

男なら仏だんに来るという。

お寺さまに来るといふこともいわれる。

ヒトダマはある。青いのがヒトダマで、ノロ(尾)をひいており、ヒトダマがとぶときは魂がとぶので人が死ぬという。赤いタマはカネダマだという。

シニガラスが鳴くときは「シニシニ」と鳴く。(清水)

人魂 昔は火の玉をよく見た。青いノロ(尾)を一間以上も引いて墓地へ飛んで行った。火の玉を見ると出世しないという。

人魂は他人でないと思えないで、家人は見られない。死ぬ一、二日前に出るものや、死んだ時間に見えるものがある。ノロシを引いて、すつと行くのもあり、ふらふらするものもある。夕方や夜中の二時ごろにも出る。ふつう、寺や墓地へ向って行く。(猿石)

魂よび

年老りは静かに死んだというが、子どもたちはやっぱりあきらめ切れずにそばへ来て名を呼んでみる。

お産で死んだ人は、井戸へ首を突っこんで名を呼ぶと息を吹つけえすという。(清水)

ヨビツケース、人が死にそうになると耳もとで大声で呼んだり、屋根に上ってヨビツケースをした(馬立)

コオリトリ

病人のぐあいが悪いときコオリ(こり)をとった。びんを川の中において、まわりで拌みながら飲んで水をはじいてびんの中に水を入れ、この水をもって行って病人にくれた(清水)

お百度まいり

病人が医者に見はなされてあぶないという時に、親戚のものとか近所

の人たちが、神社(八幡さま)の鳥居のところから拝殿のところまで往復して、病気の平癒を祈った。やしらのまわりをまわったこともあった。昼間でも夜でも、病人が大変なときに、お百度まいりをした。(皆沢)

鷹林寺の前の住職の時には、近親者が寄って、病人のためにお百度参りをよくやった。その観音様にお参りする。(猿石)

人が死にそうになると、身内の者や組内の者が大杉神社にお百度詣りし、石で数とりをして幾度も往来するしをした。(馬立)

願かけ

天神さまにお百度参りをした。口をゆすいで来ては天神さまを拜んで、数をおぼえるために川原から小石を拾って来た。それが終えると百回といった。

戦時中だけのことで、戦勝を祈願するために熱心にやった。紙に書いてもって行って拜んだ。(清水)

末期 臨終の時には、近親者が綿に水をふくませて口びるを濡らして末期の水をとらせる。(猿石)

ブツヨケ 組内の者が集ったとき、神様の前に半紙をはる。ブツヨケにフタシロという。(馬立)

耳ふさぎ

話だけ聞いたことでは、マグソ(馬糞)を拾って来て耳へふたをすることをしたという。

石をへがして、上と下をとりかえればよいという。(清水)

ネセカエ (枕なおし) 死者は死後直ちにナンドに移し、北に向けてねせかえる。これをネセカエという。そして刃物(マモノヨケ)を布団の上にのせる。(馬立)

死者は北向きに寝せ替えて、線香や水、枕飯、枕だんご等を供える。(猿石)

死者を北向きに寝せると、「一生北向きにした」というのでいいのだ

という。北は鬼門というが、新しく北から始まるというので、北からまわって来るので、もとへ帰すことになるからである。(清水)

死者は北枕にして刀をのせる。(鍋足)

まくらめし

フタオヤ(両親)のある人が煮てくれるという。木と竹で三本の棒をたてて小さな鍋をつるし米はとがずに煮る。煮えると、死者が生前に食べていた茶碗にもつてやる。

このとき使った鍋は、一週間は使わない。(清水)

人が死ぬと、近隣の人が、米をとがずに炊いて死人に上げる。(居館)死者の家に組の人が寄って枕飯をたく。必ず他人がやるもので、庭先に石を組んで茶碗一杯分の白米をとがずに土釜か鍋に入れてたく。この釜はあとでは使わずに棄てる。枕飯は生前使っていた椀に山盛りにして、箸を一本立てて死者に供える。(猿石)

人が亡くなると、まず組長さんに話す。組合の方が皆あつまってくる。そこで誰が告げに行き、誰が棺を作るかなど相談する。(鍋足)

魔除け

死者の上に古なたとか、かまなどをのせておく。死者の上に猫が上ったりして汚されないようにする。

また死んだ人を連れてゆくマモノがいて、夕立のするような雷の鳴るときに空から舞いおりて来て連れて行ってしまうことがあるので、マモノを防ぐためになたなどをおく。

墓地へ行くので担いでいた棺が、急に軽くなってしまったこともあったという。(清水)

死体の上に刀や鎌などの刃物を抜いて乗せておく。猫が死体の上を飛べないようにするという。(漬石)

マクラタンゴ 死者にはチョコダンゴ(とがない米をすりばちですって、ダンゴにこねて作る)とマルで一組として供える。これをマクラタンゴという。(馬立)

これも玄米で粉をひいて、団子をつくる。オチョコといった団子を凹ませて小さな皿形にした上につつ団子をのせて、計六個作る。この枕めしは墓場へもってゆき埋けた上にお膳にのせておく。

団子や、めしをたいた灰はサン俵にのせて、幣束を神官に作ってもらい(南蔵院でも作ってくれる)灰と一緒にのせて三本辻へおいてくる。(居館)

葬式の前に組の人が寄って、玄米を石臼でひいた粉で枕だんごを三個作り、庭で火を燃やし三徳に鍋をかけてゆで、椀に盛る。死者の枕もとに供える。(猿石)

枕めし、チョコダンゴ

故人の使用していた茶碗に一杯の米を、飯にしたり、粉にしてチョコダンゴ(三組一六つ)を作るのに使う。チョコダンゴは飯と一緒に煮る。米はとがなくて炊くので真黒であった。水のある内に、オツケの汁を取る。オツケといっても塩気のない水である。わかしは、ハジゴの棧につるでナベを結わえて枕めしを炊いた。その火は消して、サンダワラに、枕めしをよそったシャモジと一緒にのせて、三本辻におく。枕めしは家族でなく他人が炊いてやる。(鍋足)

カザリタンゴ

七十二コ作る。一串に六ツずつさし、その六本が対になるから七十二コである。このダンゴは欠いて、位牌と一緒に縁者に配る。(鍋足)

組合ばらい 死者のあった家では枕飯をたいた灰や炭をサン俵に盛り、しゃくしをのせ、清めのお被いしたオンベを立てて、近くの三本辻へ出しおく。今でも、葬式の前に組の人が用意してくれる。(猿石)

寺への通知 人が死ぬとお寺に知らせがある。男なら本堂をカタカタと鳴らし、女ならお勝手を鳴らすという。(猿石)

寺には道中寄りよい人が行って知らせる。寺からジャンボン・太鼓・十三仏掛軸をもってくる。カネとチーンは坊さんが持つてくる。(馬立)

死の通知 (告げ)

人が死ぬと組合の者が集って、葬儀の方法について協議する。死の通知は、組合の人がヒトに行くといつて二人一組で軽装で出る。伝達は口頭である。友引の日、トラの日は避ける。(馬立)

施主の家で行く家をきめてもらい、必ず二人でゆく。先方の家では清めを出し、スズギをもって来て上げ、小遣をくれ(今なら五百円位)飯を出し酒も出す。(居館)

二人で行く。まぢがいよいよ一人が補助で、特別の口上はない。誰が、いつ死んでいつ葬式を出すといふことをいう。施主からあずかって弁当を持ってくる。

飛駒の方では、来てもらった家の方で御善勞賃とでもいうのかいくらか出す。現在は三百円から五百円くらいを出している。

時間になればお昼を出す。(清水)

組合の人が二人一組になって、亡くなった日や葬式の日取り、その他施主の希望等を近親者に知らせるために使に出る。電話を使うわけにはいかない。車で回るようになったが、十五軒から二十軒くらいも回る。先方ではお茶を出すのが、仁義になっているが、その他の心付けなどはない。(猿石)

(二) 葬 送

湯 濯

薄着で腕をまくってやる。お湯を用いるが、使った湯はナンドの板をはずして下に流した。そして樽を手や足で転がし合せて、ワーツと声をあげる。これはお被いの意味で、コンバタ(魂)を放るといった。これがすむとすぐ風呂に入って浄めた。

なお湯を入れた一斗樽は、湯濯に用いた布と一緒に、墓場で燃した。

(馬立)

湯かんのことはガンバコに納めるといふ。

湯かんは身内の人がやり、昔は上半身はだかで、荒なわで片側だけかけて死んだ人をふいてくれて棺に入れる。

湯かんがすむと、酒を一ぱい飲んでから、ナンドから外へ出てまわってきて、塩を使い、さかみずで手を洗ってトボウにヘインクと塩をもつてくれて人がキョメてくれてから家に入る。

今はだかにはならない。(清水)

棺に入れる前に、近親者が寄って、線香を立て男はふんどし姿、女は腰巻姿になって死者の身体を湯でふいて清めてやる。上半身を男がふき下半身を女がふく。死者が女の時女がおもにふいてやる。終ると清めに酒を吹つけてやり、着せ替える。(猿石)

すっかり裸にして、頭から水をかけて洗ってやた。

女の人は髪の毛をすって丸坊主にした。すり落した毛はあつめてはい

けない。そのままにしておく。(毛をするのは納棺後である)

湯濯した道具は、墓のむこうに持って行って捨ててしまう。シヨウ油の入った樽を使った。(鍋足)

湯濯の事を納棺ともいう。一緒にするので混同したものと思われる。

昔は男は六尺ふんどし一本になって、死者は褌裸にし、水を充分にかけて洗い清めた。今では上着をとる位で簡単にふくか、脱脂綿でアルコールをつかふ程度になった。昔は湯濯の桶は桐生川へもって行って洗ひ(勿論自分の身体も清め)桶は桶ごと流してしまつた。人は河へゆ

く時は裸足でいった。(居館)

納棺は葬儀の前日行う。死者には新しく作ったサラシのキョウカタ

ピラを着せて、足には白足袋を右左逆にはかせ、コハゼはかけてやる。

そしてワラジは新しく買ってきてはかせる。また昔は一厘銭、五銭、

十銭と金を入れてやつた。道中の小遣銭だといふ。そのほか大人の場合

眼鏡、煙草を、子供の場合玩具を入れてやつた。棺はナンドからデイに

移し、仏壇のようにして白布をかけておく。(馬立)

入 棺 もとは立棺が多かつた。腕と足は予め組ませておき、立棺

の中に坐らせる。動かないように小さい座布団を敷いてやる。坊さんが用意してくれた血脈を入れ、花なども入れてやる。(狼石)

死装束 死者にはゆかたを左前に着せ、上に経かたびらを着せる。経かたびらは肉身の者が晒し木綿を使って。麻の糸で縫いつ払いに縫って作る。(この時に身ごもっている者は腹の子に影響するといふので、手伝わない。)死者の手には手甲、足には脚絆、たび。わらじを左右逆にはかせる。じゆずを持たせ、男には筆と墨、女には針を持たせ、六文銭を持たせた。(狼石)

かたびらはさらしを買ってきて、身内の者、親せきの者がみんなでぬう。キョウカタビラをつくるときは、ものさしを使わないでエエカラカシにみはからってやる。はさみは使うが、かえしは使わない。(清水)

アクマツパライのマクリダシ

仏を棺に納めると座敷に出してから、丸いものなら、タル、ウス、メカイ、カゴでも何でもいいが、これを湯かんとてくれた人たちがみんなで大声を出してあげながらまくり出し、わあわあやって悪いものはみんな送り出してしまふ。陰気なしめっぽい空気を入れかえるもので、アクマツパライになるのだろう。

丸いものとはいっても、後で使わねえでふんがいちやうものだから古いかごを使うことが多い。(清水)



葬式のと座敷にころがすかご (清水) (撮影 上野 勇)

通夜

友引、トラの日にぶつくと二日となる。普通は一日である。(馬立) この土地では通夜はしない。(清水)

死者の近親は遺骸の近くで夜おきている。今は清めを出し、又すし位出す。交替で起きている処もある。最近は大体半夜位で終る。(居館)



棺道具置場 部落共有のものを保管(皆沢) (撮影 関口正巳)



棺道具置場 部落共有、3年前まで使用 (皆沢) (撮影 関口正巳)

近親者が死者の枕もとに集まって、線香の煙が絶えないように一晩中起きて昔の話などを話している。子供が大勢いいると、枕もとがにぎやかでないので困る。(狼石)

棺道具

ふつうは寺から組の人が借りてくるが、組合で持っている、堂などにも保管している所もある。

飾り付けは組合の人がする。棺・位牌・鐘・太鼓・にょうはち・竜頭・四方旗・たいまつ・杖・ろうそく立てなど行列用の道具をそろえる。(狼石)

を所有し、小屋に保管して置いた。三年ほど前から石雲寺で台を新調したので、それを使うようになった。(皆沢)

本膳 昼食を本膳として、十一時から一時ごろまでに一同が食事

をすませる。その後、出棺となる。(猿石)

出 棺

出棺のときは坊さんが拝み、焼香して庭廻りして家を出る。庭廻りは庭を左廻りで三廻り半する。この葬列の役付は坊さんが決める。普通墓標は組内の人、位牌は長男、お膳は子供、ハナは孫がもつ。竜頭は庭に南北に向けて立てておくが、これは列に入らない。六本のローソク立ては庭につるしておくが、これは庭廻りするうちだれともししておく。庭廻りがすむと庭に台をおいて棺をのせて、そこで読経、焼香をする。読経・焼香の間、チカラメシの御飯を重箱に入れ、組内の女が少々つまんでくれる。

棺は二人で尻合せになって左廻りに結って、十三尋半、これでしぼる。棺を運ぶのはトコホリの人で、近親者は棺のそばについている。

棺の出たあと、葬列が家を出ると僧侶は着かえて家で待っている。組内の人は家をはき出し、帰ってきてからのオキヨメのお膳の準備をする。(馬立)

鉦を下げておいて、お経の始る時、中頃。又終った時叩く。これがなると出棺になる。(居館)

葬 式

高岡寺から坊さんがきておがんでくれる。縁者が石で棺の釘を打つ。棺に繩をかけて縁側から出す。庭でアナマリをやる。左に三回半まわる。棺は棒でかついで行く、かつぐ人はトコ(墓穴)、ホリをした人がかつぐ。繩を切つて穴に棺を落とし、身近な人から順に土をかける。最後に、かついで行った人が、犬ハジキをする。

翌日、親戚の人が墓ナオシといって墓を飾ってやる。サオ石をのせ、そのまわりに泥がくずれないようにする。

墓を作る時使った道具は一週間目にもってくる。その後、七日七日にお参りする。四十九日には坊さんがきておがむ。百カ日には縁者が墓参りをし、塔婆をあげる。(編足)

出棺の行列の役割りは発表される。鐘(組合の者がたたく)・籠(錢をまく)・提灯・めい旗・竜頭・生花(施主花)・膳(枕だんご・枕飯をのせ施主の妻が持つ)・水(女が持つ)・香炉(女が持つ)・たいまつ・杖(竹製で孫が持つ)・位牌(施主が持つ)・墓標・弓矢(男が持つ)・棺(男の近親者が棺付きになる)の順に並んで行列を組む。行列は庭の天蓋の廻りを左廻りに三回り半廻る。(猿石)

願をとく

願をかけておいてうまくゆかず、そのまま死んじやったときには、家族などが願をとくために、死者の着物をもって後に投げる。(清水)病人がねている間、願かけした神社や寺院の名を扇にかいて、要をぬき、それを桐生川に流した。(居館)

役

役を紙に書き出すことはない。来てくれた人には世話役の人が書いておいて来た人から順に、おまえさんはこれこれという話を話しておいてくれるので不都合はない。イハイモチはあととり息子のことをいう。(清水)

(清水)

葬列の服装
昔は男は和服で、紋付き袴に福み笠をかぶり、わらぞうりをはいた。白むくの着物で、黒の元結いで髪を結った。戦後、黒むくの着物に変わった。(猿石)

昔は白無垢・つばし島田に髪を結び袖をかぶって行った。(居館)
今は黒の紋付。位牌持ちは刀をさし、編笠をかぶり、肩又は頂(ウナジ)にこれをつける。(居館)

穴掘り

葬式の日隣の組合がトコホリの役をする。共同墓地に小さい小屋があり、そこに備えてあるものを用いるが、穴のホリオキをするものでないという。穴は棺に合せて掘る。掘っている間に、キヨメの酒を一升位(一升以下が多い)出す。あまり出すと酔って掘れなくなる。穴掘りに

使った鎌・その他の道具類は一週間は使うものでないという。墓場にそのまま置いて、ハカマイリに行ったとき持つてくる。(馬立)

以前は穴掘り組合があつて、よその組合が掘ってくれた。今では、部落単位で、部落内の若い者がくじ引きで決めて当番になる。四人で一日かかって、深さ八尺から一丈ほどの穴を掘り、葬式までに間に合わせ。墓地にお神酒・ゴマメ・キンピラなどの三つものを供えて清め、飲みながら掘る。古い骨が出るので、正気では掘れない。唐ぐわの柄を短く詰めて掘り、石箕で土を上げる。唐ぐわなどの使った道具は、その後一週間使わずに置く。(猿石)

穴はりは組合の人の中で、ツゲに行かない人たちのしごとで、棺をつくる人、シローコバナ、ハナカゴをつくる人を除いてやつた。

穴を掘るときは、「地所を買う」といって六文もってセキトウの所に行き、掘る穴の四隅に四文を並べ、残りの二文を地代でありますといつてそのまんなかにおいたのが正式で、合せて六文の地代を払ったわけである。(清水)

梅田町五丁目、山地辺りでは葬式の出たあと、座敷の上を臼をころがして、曳きまわす習慣がある。ころころ音を立ててまわす。この事は余程以前謂雲寺の和尚が話してくれた。(六門)

墓 地 皆沢には個人墓地の人はいない。共同の棺道具があつて使つていたが、今は寺に揃つているのを借りる。(皆沢)

畑の真中に墓地があると、借金のカタに取られないという。(皆沢)
墓地は組合の共同墓地、掃除は別個に行なう。村への新入者は、金を出してお寺に埋める。(馬立)

埋葬法 この地方は土葬が多い。昔は坐棺であつたが、今は寝棺が多い。棺は組合の人が作る。(馬立)

一般に北向きに埋ける。穴の深さはこの辺では五尺位が一般である。

(居館)
埋葬は、見送りに行った人全部が、一掘りでもかける。あとはトコホ



墓地開田により整理 (猿石)
(撮影 関口正巳)

りの人が埋める。

墓標は、埋葬したらすぐ頭の真上に立てる。そこには名旗と共にオ購をおく。墓の廻りにはオオカミヨケ或はイヌハジキといつて、竹を曲げたものを立てる。この竹は棺をかつぐのに用いた竹を割つて作つたものである。(馬立)

野辺送り 葬列が墓地に着くと、荒縄でしばつた棺を穴の中に吊りおろす。繩は遺体に乗せて置いた刃物で、施主が伐つて縁切りをする。近親者が一掘りずつ泥を入れてから、土をかけて埋める。あとでへこむので、土はあまり入れないでおく。組の人が墓の廻りに青竹で竹矢来を組み、魔除けに竹を曲げてハジキを作り、墓標を立てる。(猿石)

埋葬の掃除は近路するなどという。必ず往きの路をかえれといれた。

(居館)

七日の経 墓地へ出ている間に、家の奥に位牌を飾り付け、坊さんが「七日の経」をあげてくれる。(猿石)

野帰 り 墓地から野帰して、家につくと、入口の所に用意した塩を振りかけて清める。水で手を洗い、組合の人におはらいしてもらう。日は別に使わない。清めてから家にはいる。(猿石)

七日の膳 野帰して家に着くと「七日の膳」が用意される。(本膳)
膳には一膳しか食べないで出る。膳には精進物・野菜に酒が出て、

施主が接待してがっしり食べてもらう。(猿石)

オキヨメ

埋葬が終わると行ったときと同じ道を帰ってくる。家に着くとトボグチで波の花でオハライをする。そこには被う人がついている。次でオキヨメとなる。オキヨメはオシウサマザシキともい、先ず近親者と坊さん、次の座敷はクマイザシキとなり、次でお勝手で働いた女衆のオカツテザシキとなる。食事はナマダサものを避けるだけである。(馬立) キヨメは両親のある男の人と女の人とでやる。男が塩をまいて神だなにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、ミツビシヤク水をかけてサンダワラの上に灰を少しとり、塩もいっけてやると、男の人がこれをもって家から離れた三本辻のところにおいて来る。これで火がきよめられる。

こうすると女の方は、ほかのもので新しく火をおこし、鉄びんの水もとりにかえてきれいな水を入れて湯をわかし、新しく入れたお茶と、酒とを男の人に頼んで上げてもらい、その後みんなにも出してやる。このときはランプの火も一度消してつけ直した。電気が入ってからもスイッチを切つてからつけなおすことをした。

キヨメノ酒は、冷酒を最初出し、これがひと通りすむと「キヨメが通つたから燗しとくれ」ということになる。(清水)

オハライ

葬儀の翌日、オハライといつて、ヘイソクを隣組にまわす。また少々のお金を各家で出す。最後の家の人がサンダワラのところへヘイソクを立て、オヘネリに入つた金をおいてくる。金は子供達につかわせてもよい。(鍋足)

小さいダンゴを作り、葬式の晩、念仏にきてくれた人にだす。(鍋足)

香典返し

葬式の当日にマンジュウとお茶を返す。(鍋足)

念仏

埋葬に行っている間に、留守の人は新に祭壇を作り、供物、位牌、十三仏の掛図をかけて用意しておき、オキヨメが済んで客が帰ると、組合の人や残っている客が念仏を唱える。ナムアマダブツと十三仏の念仏を唱え、この間に一回休んでお茶をのむ。

なお、桶に水を入れて縁側におき、念仏が始まると五六コのコップに水を入れ死者に供える。そして念仏を唱えている間水をとりかえてやる。それは桶は縁側においたままで、ここに近親者、近所の親しい人がコップの水をもつてきて庭に捨て、新に桶の水を入れ、次の人が来て、庭に捨て、汲みかえる。これは長い道中でノドがかわくからあげるのだという。念仏が終わると神主を呼び、お被いをしもらう。家族、残っていた人をきよめ、次で神様の半紙をはずし、また火を清めるといって、イルリの灰をとってサンダワラにのせ、御幣を立て、メシシヤモジをのせて三本辻におく。(馬立)

十三仏と南無阿弥陀仏をやる。七へんげえし十六べんとかいって、カネを叩く人がまちがえないように回数をかぞえてからやる。中休みがあつて、ネンブツガシ、ネンブツダマが出る。この間近親者は、念仏を聞きながら仏の水をとりかえてくれるが、水はまだれのところへ渡すもので、この水が流れるほどくれてやると仏はこれをのんでのどをかわかさずにいられるのだとい、何回でもとりかえる。(清水)

十三仏の飾りだんご 大きなだんごを三十六個丸め、六個ずつ串にさしたものを六本作り、「六甲」という膳にまろく立てて、色紙の飾りを上に付ける。高さ一尺五寸ほどで、わくに生のうどんをかけておく。これを位牌の両がわに供える。(猿石)

墓直し 葬式の翌日、近親者が墓を直してきれいに整える。竹矢米を取り払い、川原から川石を拾つてきて四角に並べて表面を飾り、サオ石を中央に印として立て、前に膳を置く。(猿石)

埋葬の翌日に、近親者がするハカナオシのとき、四角に土を高めに盛

つて埋めた上に、サゴ石（川石）をおく。（馬立）

（三）死後の供養その他

七日ざらし 人が亡くなると、死者の着物を日かげに北向きに掛けておき、七日間家の者がひしゃくで水をかける。いつもしめつけておればよいという。（猿石）

着ていたジューパン（下着）を日のあたらないところに置いて、家の方にむけて干す。毎朝水をヒシヤクでかける。七日経ったらしまっておき、体の弱い人にそれを着せると丈夫になるという。（鍋足）

あと念仏 野辺送りのあと、七日の膳がすむと、組合の人が集まって組合念仏をあげてくれる。念仏は十三仏を十三回、南無阿弥陀仏を十三回唱える。組合の人が念仏を唱える間、親族は念仏しないで水をあげる。鐘をたたきながら、水を取り替える所作をくり返す。（猿石）

一七日 七日めに近親者が寄って墓参りする。（猿石）
埋葬後七日毎にお詣りする。四十九日までだが、今は三十五日であげる場合が多い。（馬立）

忌明け

四十九日を忌明けと云ったが、今では三十五日が多く、僧をたのんで親類はお墓参りする。おほぎを作る。（居館）

人の魂は死後四十九日は屋根棟にとまっている。四十九日に棚上げをする。（猿石）

墓地に七本木を立てる。これで塔婆を立てたことにする。

位牌を床の間から、仏壇に移して細め、餅をつけて供える。死者の霊が仏になる。（猿石）

四十九日まで

四十九日がすむまでは仏は家にいるのだといって、仏の着ていた着物を軒下にかけて、これに毎日水をかける。七日供養は、一週間一週間にオダンゴをつくり、花をもっていって線香をたてる。七本木は墓場にもつ

て行って一回ごとにとつてかえしてくる。これを家においといて、一回行くごとに一本ずつもって行く人もいる。（清水）

百か日 近親者や組合を呼んで供養する。坊さんが来て念仏をあげる。（猿石）

忌 中 不幸のあった家では、神棚に白紙を貼りシメも張る。入口に忌中と書いた札を貼るが、門牌は立てない。（猿石）

忌の事 プクをきるという。死者のある家では神棚に半紙を下げる。神社の鳥居をくぐらない。これは四十九日間、親の死んだ場合は百か日の間。（居館）

死後四十九日から百か日までは、プクといつて家族は神様に供え物を上げない。（猿石）

年 忌 一回忌・三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十三回忌・二十七回忌・三十三回忌・五十回忌・百回忌とある。ふつうは二十三回忌で終る。（猿石）

一週忌 坊さんを頼んで拜んでもらう。ふつうは一週忌ぐらいは来るが、話がなければ行かないから、他の地区にくらべると雑だという。

三年忌、七年忌、人を招ぶのは略すことが多く、近親だけでやる。

十三年、二十三年、二十七年、三十三年はそれぞれ年忌になるが、坊さんも頼まずに、彼岸に塔婆をたてる。（清水）

一年忌はどこでもやるが、それ以後は家によってちがう。（鍋足）

三十三年忌

三十三年の供養には、杉の葉っぱのついでている——シンのついでている塔婆を切つてたてる。このときまでにセトウがたたねえと「これで供養してもらえええ」といって仏が泣くという。

これからは先祖さまということになる。（清水）

三十三年忌のシントウバを立てて供養すると、これで縁切りとなり神

様となる。(馬立)

死後三十三年めに年忌で供養する。「さかさ塔婆」として、杉の葉のついた心とう柱を墓に立てる。自然に燃るといふ意味。極楽浄土に納まったことになる。(猿石)

位はい

仏に関係の深い人、親が死んだときは子や兄弟たちに、かざりだんごと、紙に書きたいはいをつけて渡すので、これをもらってきて仏だんに納めておく。

これをオキヤトポトケという。(清水)

香 奠

この辺では組合の規定は五百円。(祝儀の時のお祝が千円)(居館)

行 器(ホカイ)

昔は祝儀、不祝儀共に行器を使った。葬式にも、老人が死ぬ時は赤いおこわ、若人が死ぬと白いおこわが贈られる。(居館)

引 物

茶と饅頭が古くから多かったが、最近では毛布、上敷、布団がわ等が多い。常識では香奠の半返しというのだが、今は千円位は返し物にする。

元は念仏講で十円ずつ積立てておくと葬式の跡始末ができたものである。(居館)

不幸つづきのまじない 一年に同じ家で二人の死者があった場合、二度あったことは三度あると云って、薬人形を二人目の死者と一緒に埋める。(馬立)

流れ瀧頂 お産で死んだ人は、血でよこれているので、千人の人に身を通してもらうため、朱の無地の三角巾をつくり、一斗樽に麻でしばってつるし、外にバケツに水を汲んでおいてひしゃくを用意し、通る人に水をかけてもらう。こうしないとあの世に行けないという。(秋平)

産で死んだ時、シンデンの真中で流れ瀧頂をした。四角な布に経文を書いて、竹筒のヒシヤクで大勢の人に水をかけて貰った。母親の死ぬ時

と赤ん坊の死ぬ時と布の色がちがった。(居館)

お産で死んだ人があると、神田という処によく田の掘へ竹の四本柱に白い布の二尺位のをはって、ひしゃくをつけて置き、通る人に水をかけて貰った。赤ん坊が出来なくて死んだ産婦の時は白い布出来てから死んだのは赤い布をつかった。(大門)

産婦が亡くなると、四角に竹を立て白い布(和尚が字を書く)を張って流れる所に置き、通る人が竹びしゃくで水をかける。布がいつも濡れていれば後生よく、行ける所へ行ける。産婦には念が残っているから、特にこうやった。大正時代まで見られた。(猿石)

お産でなくなつた人のために、川に竹四本を立て、白布をはり、そこにヒシヤクをおいて、通つた人が水をかけてやる。四十九日までやる。そうすると死出の山を楽に登れるという。(鍋足)

子供の葬式 子供が死んだ場合も葬式は普通にする。墓石は川の石を拾ってきて立てたり、小さい墓石を立てたりする。(猿石)

生き返つた 広沢の人は一旦息が止まってしまった。その人は夢でハスの花が咲いていて、きれいな野原を連れて行ったら、寒くて霧がまいていた。そこに父の菩提寺のオツシャン(和尚)がいて、向うへ渡さなかつた。自分の名を呼ばれるんで目がさめたら、気が付いた。オツシャンは全然知らない人なのに夢に出たのが不思議であるという。(猿石)

猫が死者の上を、三回またぐと生きかえる、という。(清水)

夢うつつ 十二歳の時に肺炎にかかり高熱で夢うつつになった。その時に、諏訪神社の裏に小さな花がいっぱい咲いている所をさまつた夢を見たのを、今でも覚えてる。(猿石)

仏おろし

死者の供養のため、その言葉をきく事があつた。これはいつでもはできない。おろしの専門家の女の人が来るとたのんだ。その女は行李みたいなものを背負つて来た。白い足袋をはいて居り、頼杖をついて死者の口を語つた。盲目のように見えたが目明きであつた。(居館)

口寄せ 村に女の占い師がいて「池の端の占い」といわれたが、幣束を使って拜み、死んだ息子を呼び返すと、さもその子が言ってるように語った。(狼石)

しらせ

昭和十六年頃峯岸玉吉さんが養老院に入って居た。西桐生の駅の手前で向うから来るその人に午前八時頃出会った。その人は中気病みでヒロヒロ歩いて通りすぎた。汽車に乗ってから珍らしい人に会ったなと思つた。その翌日その本人が養老院でなくなつたからという話があつた。昨日会つたばかりだと云つたら、そんな馬鹿な事はないと云われた。その時は汽車の時間にせかれて声をかけなかつた。

又別の話。四万の帰りに沢渡の湯に行つていた時、ガラス戸の下を誰か通つたようであつた。夜になつたら迎え人が二人来て、その人の死を知らされた。

某氏は養子であつたが山の炭焼小屋に泊つていた。そこへ実家の母が煙草入れを下げて現われた。名を呼びかけたら消えうせた。後に死亡の沙汰があつた。(大門)

新 盆 盆棚を作り、新しいゴザを敷き、近親者が墓詣りにくる。このとき提灯、ゴザ、妙糖、西瓜、ウドンなどを持つてくる。昔は大きいトウナスが多かつた。重なるものももつていくものでないとして、一つ持つて行った。(馬立)

組合、親戚が寄り、坊さんが来ておがむ。(鍋足)